と袖をかへして扇を胸へ。星精の飛火、來つて、七首の如く阿嬢の腕に刺青して、燦爛として輝く時、秋の草は離々として、夜の虹を敷いたのである。

十三

星の輝く夜であつた。

「此の殘暑の激しさは何と云ふ事でせう。」

「聊か天變の部に屬しますかな。」

宵には小兒が焚いたらう、南京花火の煙硝の臭の籠る、小溝を境に、軒並び、向う同士が、納涼臺で三四人、やゝ更けたから大人ばかり。

椅子を持出して居るのもあれば、踏臺を計略して、張物板を渡したのもある。

「朝虹が立つても天變だと、老人は騒ぐと言ひます、況やですよ。」と一名、郵便局員が、椅子をばた〳〵と藪蚊を煽ぐ。

「旦那、しかし、其の光りものと言ふのは實際見えるんでございますか。」と、浴衣の糊の突張つた、角刈の男は仕立屋で、地に踞んで腕組をして云つた。

仰向けに天を仰いで、瞑々として居た生命保險取次の事務員は、頭を抱へた兩手を解くと、居

直すはずみに凸凹地面、ぐらりと搖れる椅子の腰を、ぎしりと直して、

「確です、生命保險だ。いや、醉つて串戲を云ふんぢやありませんな。はじまりは一昨晩、見た人が確だ。名も金剛さん、其家の謠の先生だ。……遲うごすなお歸りが。今夜は早く歸つて、一所に見ようつて約束だつけ。」

「然やうさ。」と局員が髯を捻る。

「御指南番が居なさらないぢや見當が付かなくはありませんか。」と仕立屋が四角に立つて、銀河をずつと見渡す。

「大丈夫、其處が光りものです。昨夜なんざ稻妻がさしたやうに、こゝ等が燈と明く成つたと言ふくらゐですからな。こりや金剛さんの御新造が見なすつたんだし、……大崎さん、貴方の奥さんも御覽なすつた。」

「然やう。」

「ね、私の家内も舍弟も見ました。皆ね、金剛さんが見なすつたと言ふ、初晩で氣を持つた昨夜なんでね、角の煙草屋のお婆さんが横町の湯屋で話をしたつてんで、女湯から、ぞろ〳〵ついて、出て來たんだつてね。私は留守にして惜しかつた。」

「其奴は堪らねえ。」

「可厭なお人だ。地震ぢやあるまいし、湯屋からだつて皆衣ものを着て居ます。」
「はゝゝゝ、喜太郎さん、其奴は嘘ですよ。しかし實際家内は見ました。」
「難有い、ぢやあ確だ。」
「確實は分ッてるぢやありませんか。しかもね、大崎さんの奥さんは昨夜はじめてぢやない、先から御存しなんださうですよ。此の土地ぢやないけれどね、お國では飛星と言ふんだつてね。」
局員が煙草を投出し、未點。
「格外に暑氣の激しい年に限つたものださうでしてな。極陽の氣が夜陰に燃えるとでも言ふのでせう……」
「お點けなさいまし。(まッちを摺つて出しながら)見たいなあ、どんな形のものでせう。」
「薄の根に、おもひ草と言ふのが生えませう、まあ、あれの大いんですね。」
と、事務員の細君が框に出て、格子を覗いた。
「奥さん、おもひ草は嬉しうがすな、星が思ひに燃えるんでせう。」
「ね、可いでせう、おもひ草。」
「引込んでおいで、お前なんか思ひ草と言つた柄ぢやない、わらびか、ぜんまいで澤山だ。」
と事務員は嘲笑つて、

「否ね、其の光り物を舍弟の奴見立てが可いんで……銀煙管の轆轤首は何うですえ……ずつと出て、ふら〳〵と光る工合かね。」
「仕立屋さん、そりや氣味の悪いもんですよ。尾を曳いて、いびつ形の圓い頭で、音も何にもしないで、眞白に光つてね、あッと思ふと尾花が散るやうに消えるんですがね、流れ星とは反對に、何處に根があるつて事もなしに、すッと天へ昇るんですもの。白い大な蛇が突立つたやうにも見えますわ……昨夜は丁ど九段の上と思ふ處から、然うね、安藤坂の方へ、流れました。」と、細君が云ふ。
「處で、其の飛星とか云ふ、光り物につきまして、御町内は何う云ふ事に成りますんで。」と仕立屋が云つた。
「妙だね、お祭禮ぢやあるまいし、町内が何も附合と云ふわけも。」
と事務員が云ふのに被せて、
「ですが、恁うして光るのを待つて居れば、言はば附合ふと云つた勘定に成りますな。」
「天變に交際ですかい。」
「可厭ですね、氣味の悪い。」と口に淺葱の團扇を當てつゝ、折から戸口に立つた白地がある。
「や、金剛さんの御新造、お歸りをお待兼で、立待の御寸法。」と事務員が手を擧げた。

「待つのは涼しい風ばかり、醉つて歸られちや、尙ほ暑うございます。」
「御意……で、今晩の方角は。」
「さあ、昨夜は九段の方でしたがね、一昨夜、主人が見ました時は電車通りへ突當りの町家の屋根裏へ立ちましたつて、見當は、あの丁ど清水谷かと思ふあたり。ですから公園の納涼に花火を揚げたのが出來損なつたのか知ら、と思ひましたさうですよ。青くも赤くも開かないで、それなり消えましたものですからね。」
「否、手前伺ひますのは、御主人のお出先で？」
「えゝ、近所です、紀尾井町の松澤さんと云ふお醫師様。
——それは清川の緣家なる博士である。——
「御新造さん、何か涼いお土産でも頂きたいものですわね……何とか恁う、あのくらるな名高いお醫者なら、人間の暑くないお藥でも發明をして下さると可いと思ひますよ、染々今年は驚きました。」
と事務員の細君も格子戸を開けて出た。
「ねえ、奥さん、御覽なさい、最う十一時近いのに、あの銀杏の葉がそよりともしないんですものの。」

近く其處に、番町名代の大銀杏が、一團雲の峰の黑きが如く、星を貫いて鬱えて見える。
「でも、何となく、恁う、ぐわうと云ふやうな音がしますね、樹も此の位なのに成ると、呼吸をするものと見えます。」
と局員は又蚊を拂ふ。
仕立屋がとぼけた聲で、
「鼾です。」
「え。」と誰かが訊いた聲。
「蟒でも天狗様でもありません、あの何千羽とも數の知れません椋鳥——近來鑑定は極りましたよ——連中が泊まり込んで居ますからな。」
「はゝあ、椋鳥は鼾を搔くもんですかな。」
「大崎さん、眞面目に聞いては不可ませんぜ。」
「否、鼾と云ふと法螺……はゝゝ、何だか山伏が獨言を云ふやうですがな。あの夥多しい數が寢てゐるんですから、おのづから恁う寢息が籠るんだらうつて考へなんで。何しろ、御存じの通り、晩方、一伸しに伸して來る時なんざ、忽ち夕立かと思ひますぜ。不意に針を持つた手許が見えなくなるつて騷ぎだ、町の空は羽擊きの黑雲で。」

「眞個ですね。」と女たち齊しく云ふ。
「一度にどつとだ、早い話が、枝につかまります時と云ふと、さしもの大木が、ぐツらぐらとな。」
仕立屋さんは團子を取つて揑返すやうな手振なり。
「何て事でせう、まあ、手前も御近所にや十年の上も御厄介に成りますが、つひぞ今年ぐらゐ鳥の集つた事つて覺えませんよ。」
「仕立屋さん。」
と寄居蟲の如く、事務員は椅子を腰にしたまゝ乘つて出て、
「で、此の事につきましては、お互に御町内、何う云ふ事に成りますんで？」
「え……（と考へ）不可え、旦那。」
一同は聲を合せて笑つた。
「一體、何處を、あの鳥の大群は往來をして居ませうな。」と大崎が問うて言ふ。
「牛込の、出羽樣の中の大榎へも集るさうです。飛んで、小石川大塚の火藥庫裏の銀杏樹、上野の森にも群がるッてことですよ。」
「上野へ出りや大海でさ。——狹い町内だから。」
「何う云ふ事に成りますんで？」

一同は又笑つた。
事務員が改めて、
「星だ、鳥だと、恁う數へると、煙草屋の奥を借りて居る、あの畫工とか云ふ、」
「前原さん。」——仕立屋が知つて居た。
「矢張り七不思議に數へなけりやなりませんな。」

十四

「先達て伺ひました、あの晩の事なんです。」
金剛倫之助——能の師匠が、或日、紀尾井坂の邸に松澤博士を訪ねたのである。
博士は老來、謠曲を嗜んで、斯の名家に就いて熱心に學ぶ處、今日は毎月の定めの稽古日ではなく、夜に入つてから倫之助が殊更に刺を通じたのであつた。が、恁した客なれば、豫て設けの應接室ではなしに、書齋を兼ねた博士の居間で。
「あの晩は御存じの通り、御當家で頂戴して大分醉つて居りました。壯い身そらで、眞に不體裁ではありますが、歸途の電車の中で、うと〳〵して、下りる筈の停留場を念入りに三帳場ばかり乘越したものですから、又乘直しますのも面倒で、それからぶら〳〵、夜露で冷しながら、快い

心持で、歩行くのか練るのか分らないで歸りましたものですから、例刻より大分遲れて、町内へ入りました頃は、彼これ一時近くだつたらうと思ひます。

が、暑い時節で、寂しいとも思ひません。尤も邸町で、近所は勤人ばかりですから、此の陽氣で寢られないと云つた處で、十時を過ぎれば皆靜まつて了ひます。寂とした町の中に、いつも、其の上ばかりは雲が掛りさうに思はれます、森のやうな銀杏の大木があるんです。」

「有名な大銀杏。」

と、博士は虎の髯を空ざまに、嘯くが如く片手を擧げた。

「射るやうに、星は晃々としましても、樹の下は暗いのです。が、雨を凌ぐと云ふ次第ではなしに、何となく此が町内一統の屋根とも垣根とも思ふ賴もしい氣がします。葉の枯れた時も、紫の霞を被ぎ、綠の霧を籠めて、美しい帳に見えます。分けて下やみほどに繁つた折から、眠つた町の柔い衾、涼しい冷い爽かな天然の蚊帳です、城とも砦とも思ふ、此の名樹に對して、お辭儀もをかしいものですから、何時も下を通る時は、立留まつて、仰いで見て、一寸敬意を表します。」

「はゝあ。」

「不斷、どんな夜更でも、如何なる場合にも、然うした覺えは嘗てありませんでしたのに、其の晩に限つて、一息、樹の下へ立つたと思ふと、總毛立つて悚然としました。

見ますと、貴方、また其の暗い處が黑塀に成つて居るんです。……其の塀の上に、一體緋の袴……」

博士は聞きつゝ、輕く腕を拱いた。

「それも黑ずんで、星明りに笹色に底光りがすると想ふのを穿いて……袿をした、下髮の、顏の色が玉のやうに艶々と、細眉の氣高い、眦のきりゝ切れた、細面の、やがて小造りな人だけぐらゐはあらうと云ふ人形が一體載つて居ました。」

「人形ですか。」

倫之助は僅に微笑を洩らしながら、

「人形でなかつた日には大變です。少くとも貴方に、お話は出來ません、お恥かしくつて。」

「いや、然う云ふこともないですよ。はあ、それで。」

「肩の下と胸へ、恁う白い手を受けた處が、長柄の銚子か、それとも管絃の太鼓の撥か、でなければ扇でも持つて居たのか、とれたか落ちたか、と思ふ、餘程年數の經ちましたもので、又それだけに、宛然、活きたもののやうです。あの、富士の人穴の奥を極めて、大きな流の向うに彳んだと云ふ姿、月山の琴彈谷、千枚岩の裏に經机に凭れて睡つて居た、と云ふのを髣髴で、私は、貴方、頭から、冷く成つたまんま、暫時夢を見るやうに立つて視めました。

銀杏の梢の、さら〳〵と鳴るのが、大川の水の夜陰に流るゝ音にも紛へば、曠野を吹く風、深山の谷へ落込む瀧の音にも聞えましてね、……魂は其の人形より高い處、銀杏の樹へふら〳〵と釣り上げられたやうでした。

唯、人形と見てさへ然うです。此が何かの間違ひで、慌てて、ものの姿の幻影とでも思つたんぢや、私なんざ紋着に袴を着けた恰好で、八九軒前の自分の家まで、もんどりを打つて投出されなけりや成らなかつたんですよ。」

倫之助は苦笑の片頬を、淺く掌で壓へつゝ、

「一目見て、すぐに人形だと氣が付きましたには、一寸然るべき所説があります。私は家業がら、隨分あちこちへ參りますが、今年の春、左やう昨年の暮頃からでせうか、邸の門内、町家の露地などへ入つて來て、

――お人形さんの壞れましたの――

――壞れた人形を買はう――

――と云ふ。……それが、貴方、風呂敷包を背負つた婆さんもあれば、籠を提げた美しい娘もあると言ひます。讓ると成れば、金錢に絲目は付けない、いくらにでも買つて行く。尤も、壞れた人形にさした價値もありますまいが。又望みとあれば、繕ひもし、修復もしようと云ふ……其

の料金は些とも取らない。かはりには、受取りと云ふものを決して書かない。從つて、預づて行くのに町所を明しません。詰り、何處に其の仕事をする細工場があるか分らない、と云ふ次第なんです。

此が事實ならば眞個結構、それも雛、人形には限らない。犬でも猫でも、いきものの形をしたものなら、玩具の類凡て引受けようと云ふのださうです。

手や足の折れたの、耳鼻の缺けたの、腹からぼろ〳〵と蟲の粉の溢れるのやら、中でも激しいは、土細工の姉さまの、結綿に緋手柄と云ふ首が、つけもとから、ころりと落ちて、落ちたともいふはないで、白粉に、口紅、で、莞爾して、手足が白々と、身體の別に成つたのなんぞがよく有るものです。

燒くのも氣に成る、流しても消えず、泥のなんぞは、沈めても水の底に、眉も目もそのまんまで、何十年も居さうでならない、と云つた向には、然うした企圖は、實際、救世主と云つても可いわけだ……と……

それが、念頭に有りましたものでせう、咄嗟に緋の袴を見て、あゝ人形だ、と思ひました……中に繋る緣はなし、ぢや、何のために銀杏の下の黑塀の上に載せてあつた、と言はれると成ると、其の筋道は分りません。が、何を思ふ隙もなしに前申しました人形と云ふだけは分つたのです。

處が、あとで分りますと、別に不思議は無いのでした。

と云ふものは、此の緋の袴の人形と云ふのは、銀杏の樹邸のものなんです。……古くから家に傳つて居たのでは無いのださうです。或人が、伊勢へ參つて、桑名の細い町の古道具の店で見出したのが餘り出來がいゝので、ふと直を聞くと案外易い。雖然、身輕な旅だつたから汽車の中でも荷に成ると思つて、其のまゝにして、しかし道具屋の名は覺えて歸つたのを、豫て懇意な、私の町内の、右のですね……銀杏の樹邸の、宮内省へ勤めます主人に話をすると、然う言つた古物を大好事で集めて居るので、早速伊勢の方へ紹介して、手もなく取寄せたのが、其の緋の袴なんですが。

凄いと言ふのです……家中。

床の間に据ゑても、書棚に載せても、其處だけ陰が出來て、薄暗い中に、緋の袴の姿が浮く。薄ら青い面影で……

不思議な事には、座敷に飼つてある狆が、うゝ、と吠掛らうとしては、耳を臥せて後退りで窘むんださうです。

些と大袈裟かと思ひますけれども、まあ、話がね。こゝに……」

倫之助は、使つた扇子を疊んで、

「其の邸に、九官鳥が一羽居ますんです。」

「はゝあ。」

と博士は膝を進める。

「眞晝間の寂寞とした時なんぞ、うつかり通りかゝりに、鼻にかゝつた甘ッたるい聲で、唐突に——(今日は。)——なんて遣られますと、樹の上に天狗でも居さうに思はれます。

尤も、(お竹さん)や、鶯のほうほけきよは、近所でも聞馴れて居るんですが、幾通りか、其の九官鳥の藝當の有ります中に、時々獨言のやうに、口の裡で小さな聲で、

(煩いよ。)と云ふのと、それから、優しい、柔かな、しかし、何となく底の有る聲で、

(ほゝほゝ。)と思出したやうに、ひとり笑ひをする……其の聲と云ふのが、天井からともなく、縁の下からともなく、物置の隅からともなく、妙に響いて、をかしく不氣味だ、と其の何です、飼つて居ます銀杏邸の人たちも、然う言ひ〳〵して。又其家ぢや、女中だけ町の湯へ行くんださうです。處が、湯の中で、巫山戯た女中が、其の九官鳥の笑ひ聲の眞似をすると、蛇でも鳴くやうに女湯ぢや裸體で騒いで、眞白いのが、片隅へかさなり會ふッて云ふ評判だつたんです。

貴方……一時其の緋の袴に、邸の内君の手が觸つたのを機會に、

(煩いよ。)

如何です。」
「成程。……」
「それからの騒動で、長持の中へ、密と納めて、内君が電燈を紐ぐるみ差付けて、主人が蓋をしようとする途端に、
（ほゝほゝ。）と遣りました……」
「遣つた、成程。」
「それなり、蓋も出來ないで、其の晩は客蒲團の新しいのを敷いて長持の上へ安置と成ると、さあ、夜が明けてからも狆どころか、女中連が寄附きますまい。」
倫之助は眉のあたりへ手を翳して、
「雑と見た處此のくらゐ。隨分、人が坐つたほど大きいんですから、佛壇とも行かず、神棚とも參りません、置場所にも始末にも困つた處へ、然も此あるがために、天から生れて、待つて居た
と云ふやうに、九官鳥が、ほゝ、と笑ふ。
鼠が天井で騒いでも、頭の上だと、
（煩いよ。）が、青い唇から光つて出ます。眉の柳の優しいのが、ッ、と細い目を釣上げて、……
さあ、愈々氣味が惡いと成つた、夜が更けると、一晩も我慢が出來ない。で其の銀杏の樹の眞

下の塀の上は、樹の靈がいつも何となく清淨で、北へさして廂へ屆いた下枝の處は、猫も傳はらず、限つて其處には鳥のふんも無い處から、外へ出して黑塀に乗せておいた……緣あるもの、と云ふのも妙ですけれども、通りがかりの誰かがあつて、ふと出來心で抱いて行きでもしてくれたら、其のまゝ遠ざけ奉らう、何の事はない、人形の捨兒ですな。」
倫之助は語氣をかへて、
「むかしなら姫君をお一方、楫なし船で行方も知れない荒海へ流したと云つた體です。怪しからんと言へば云ふんですが、實際、邸ぢや弱つたらしい。
其處へ行合はせたのが、當夜の倫之助、私なんです。」
「これは、奇怪ぢや、はゝあ。」と言ふ。
「處で、話は話ですが、これから肝心の事件です。貴方にお話しに參りましたは……
時に、人形だと思ひながら、大銀杏の樹の下に、緋の袴を視て、梢の風を、流か、瀧か、と聞きながら、宙に吊されたやうに成つて悚然として立ちますと、間もありません。
四邊が眞晝間のやうに、赫と青白く成つて、はつと思ふと、――あの晩もお話しました、……
飛星とか云ふ人魂のやうな光りものがすら〳〵と舞上りました。……丁ど銀杏の上まで……梢を覗いたかと思ふと、音もなく沙汰もなしに、吻と息を吐いたやうに消えたんです。が、それが宛

然、人形の古色を帶びた衣類の襟の合せめからすらりと尾を曳いて、心と云ふ字を、ぽたりと白い面に取つて、凄く輝きながら拔出したもののやうでした。

光りに驚いたものと見えます。ばたりと足許へ、星が缺けて黑く落ちたやうなのは、鳩よりも小さな鳥で。此は夏の半ばから凡そ幾千と云ふ數で銀杏に集つて居るのでした。が、落ちた。やあ、落ちたと思ふと、其奴を引掴んだのを機掛けに、私が、かた〳〵駈出したものですから、內から、からりと格子を開けます。

空も黑し、雲が掛つて、銀杏の梢が大波を搖つて搖れる、と今更可恐く成つて、崖から家に轉がり込んだ氣がします。

（何うしたんです。）

（大變だよ。）

（えゝ。）

（鳥が目を眩して居るんだ。）

とつい云ひました。兩手で掴んでる椋鳥が目を眩して居ます。それが、何だか、私自分でもあるやうで變な心持でしたよ。

家內は、貴方、唯、鳥のことばかりしか氣が付きません。目白押の壓くら饅頭で、揉合つて、

銀杏の樹に止つて居るから、一羽突出されて落ちたんだらう。それとも宵まどひをして寢ぼけたのか知ら、中には嬰兒も居るでせうから、可哀相にッて、さ、自分が薄ら眠さうな顏をしながら、それでも淸涼劑、と云つた處で、椋鳥の氣絕したのには、何がきくか分りやしません。如何にも、むく〳〵としたのがむく〳〵と云ふやうに、堅い嘴を默々くくして居る。

とに角冷水で、湯呑と成ると、女のでも大き過ぎます、茶棚の抽斗から猪口、と云ふのが、鳥によると、鹽氣を嗅がしても斃死ませう……況や酒をや。慌てるから、（おい麥酒は何うだい。）ッて、家內に睨まれましてね。

此の時、家內が一生に出來した事は、紅猪口で……鏡臺の底から明いたのを取つて、ざつと濯いで、紅は藥だから。——此も鳥には何うですか。

でも、薄りと桃の露ほど流れますのを——片手に抱いて……嘴へ注込んで、何しろ、苦しからう、暑さが酷いから。で、淺葱色の深草團扇で、——餘計な事ですが、色は覺えて居ます、鳥が蘇生ると此の淺葱の上へ、それは〳〵美いものが見えました——唯、家內の奴が、そよ〳〵煽ぐ。

一品通はせるやうだね、なんぞ、と手酌で、貴方、私の方も淸涼劑が欲しい……一息つくつもりで、麥酒の口を拔きながら見て居ますと、風をうける羽と一所に、今まで固まつてた黑い目の球が、きよろ〳〵と動くんです。成程、椋鳥だから氣が付きました。家內の手から紅猪口の水ぢ

や、鷲だと蘇生りはしますまい。」
「まあ、可いですが。はゝゝ。」
と、氣の無い笑ひはしながらも、博士は耳を傾けた。
「やがて、身震ひをするやうに、はら〳〵と羽を捌くと、家内が煽いだ手を留めて、はつと、うけるやうに鳥の胸へ團扇を當てます。
其の淺葱色の上へ、羽が亂れて、ひら〳〵と散つてこぼれますのが、紫だの……紅だの……」
「紫だの……紅だの……」
「はあ、萌黄も綠も、虹を削つたやうに見えます。五色です、五色の羽です、……そんな椋鳥はありますまい。」
博士は乘つて出でて頷いた。
「如何にも。」
「家内が、密と、夜中に朝顏の咲いたやうな團扇の上で、指の尖で觸りながら、(絲屑のやうです、綿か。)と言ひます。
いや、羽だ、眞綿のやうな毛なんだ。……銀杏に集つた此の鳥の大群を、椋鳥だ椋鳥だ、と云ふけれども、それは町内の評定だけで、誰も手に取つて見たものは無いのだから、これは何と

か云つて、こんな綺麗な五色の羽のある別の鳥かも知れないよ、と云つてると、……窓の外に、向う側の塀について、立つて聽いて居たものがあつて、(御免。)と云つて入つて來ました。——
さ、此です、貴方。
貴方は前原辰馬と云ふ繪師の方を御存じと思ひますが……」
博士のもの言ふに先んじて、其處は寢た氣勢の——次の室で、猫が嚏をしたやうな、乾びた咳をしたものがあつた。
倫之助は語續けた。
「つい近所の、煙草屋の、一人ものの婆さんの奥の室を、此の春ごろから借りて居るんださうで。おとなしい、陰氣な人なんです。
些少の部屋代と食料だけ有れば可い、と言つたやうに、團扇の繪だの、賴まれた寫しものなどをして、一月を過ごすだけ稼いだ、と思ふと、あとは、ぶら〳〵寢たり起きたり。
宵から夜具を被つて寢ることもあれば、夜中起きて居ることもあります。握飯を燒いて貰つて、竹の皮づつみにして、羽織の下へ、風呂敷の腰兵糧で、朝から腕組をして、てく〳〵出掛けて、夜分遲く歸ることも毎度だと言ひます。
一晩も内をあけた事の無いのが確で、友達が一人訪ねるでもなければ、手紙が來るでも無し…

…様子は變でも、人品な男ですから、又お婆さんものん氣で、別に怪しみもしないのですッて。

御存じの通り、私は、勤めに毎度旅を掛けます。家に居ましても所々出勝ですから、まことに見知越と云ふまでですが、家内は、狹い裏庭で、垣根越に顏を合せます處から、偶には煮豆の一品も、お惣菜を皿で運んで、一寸知己に成つて居ました。

煙草屋の婆さんを通じての話ですが、此の頃其の畫師が又輪を掛けて樣子がをかしい。(仕事が可厭だ。が、何かしないと暮せない、打つのでも可し、うつすのでも構はない。箔の内職はないか、探して見てくれ。)と云ふんださうでしてね。京阪地の人と見えます……彼地は本場でせうけれども、東京には餘り箔打の商賣と云ふのがありますまい。が、婆さんも眞面目に氣に掛けて、家内にも聞いたさうで。其の節、私に話をするから、……箔の内職、選りに擇つて妙な註文、何かの謎ぢやないか、と云つてますうちに、又謎のやうな事がありました。

それは、未だ宵の口だつたさうです……山の手の居周圍にはつひぞ見掛けない、年紀ごろ十八九かと思ふ、……艶々した高島田に結つた、品の可い、それで居て下町風の嫋娜な處のあるのが、雪駄穿か何かで、褄を輕く、花道を歩行く形に町をすつと……唯一人、胡蝶を左右へあしらひさうに扇を使ひながら、煙草屋の店へ來て、澄まして立つと、婆さんが眼鏡越に、じろりと額で見上げたのを氣にも掛けず、暑いから開放しに成つて居た奥の間を熟と見込んで、それから五歩ば

かり、横あるきに、振返りながら、私どもの向うの塀際へ行つたのが、くるりと向返つて、もう一度店を覗く、と角の生垣について横露地へ廻つて、夕顏の花越しに庭を覗いたのが、畫伯の居室なんです、――居ない。……留守だつたさうで――其の娘の態度と云ふのが、……貴方。

やゝとばかりで近所の門納涼の連中が、遠卷に卷いたのに目も掛けず、澄まして覗いて、矢張扇子を使ひながら、あとじさりに、一度溝際へ下つて、伸び上るやうにして、畫伯が居ないと見定めたか、其のまゝ舊來た隣町の大通りの方へ、襟脚のいゝ後姿で、すつと戻つて見えなく成つた……と言ひます。

同じく此の謎も、箔の内職と一所に、解けずに居ました……

――其の畫伯です、……貴方がお聞及び、御存じの前原さん。――

それが唐突に入つて見えて、私が掴まへて、家内が袖に包んで居た、其の椋鳥の美い五色の羽と云ふのを、見たいと言ひます。

お易い事で、それ、お手に取つて、と云ふのを遠慮して、團扇に乘つたのを、手を支いて熟と視て居るうちに、顏の色が颯とかはりました。……

(毛ではありません、絹絲の縺れたのでもありません、五色に染めた眞綿の羽です。)――

と、貴方、貴方の前ですが、恰もメスを持つて解剖をしたやうに説明をしましたよ。」

（襖の外にごそりと云ふ音。）

「處で、……（唯今、其の仔細は申されませんが、失禮ながら伺ひたいのは、此の椋鳥はお飼ひなさいます思召しでせうか。）と恁う、畫伯が訊くんです。

飼ふにも飼はないにも、一晩介抱をするとして、入ものと云ふのが、差當り、鼠捕の金網しか心當りがない始末。銀杏邸の緋の袴ではありませんけれども、笑ふのを承知だつて長持へも入れられません、さしづめ外へ持つて出て塀の上へおきますか、羽があれば飛びます、飛べば遁げるので、之は直ぐに放すつもりで居ます、と云ふと、畫伯が、それぢや、夜中とも申さず、初對面を顧ず、お騷がせをいたした罪に、御當家の下男と思召して、其の放生會のお役を自分に御申付けを願ふ、と云ふ、堅い口上。

いづれ。で、見送ると門へ出ました。……樹から落ちた其椋鳥と云つた足取りで、ふら〳〵と、銀杏の許へ畫伯の行くのを、家内が格子戸から見送つて居ましたつけ。稻妻か、電光か。

ぴつしやり戸を閉てて、雨戸を締めて、私どもは臥りました。が、驚いた事は畫伯、其の時から行方知れず……」

「前原が、行方知れず？……」

と博士は顎の鬚を、ざわり、と扱く。

「其の晩切、歸つて來ません？　つひしか家を空けた事の無いのに、不思議だ、何うしたらう、と云ふので一夜二夜は過ぎました。が、此が三晩四晩と成つて、煙草屋の婆さんが、老年に似合はない甲高な聲で喚き出すと、町内お附合も騷ぎはじめる。何處へ知らせようにも誰に相談をしようにも、戸籍も在所も分らなければ、親類一人友達の手がかりも無いのですもの。人品を信用したればといつて、お婆さんも暢氣過ぎる。雲を踏外した仙人のやうなものを、今時の時節に、奥へ飼つて置く法があるもんぢやない、と叱言を云ふやら、寄合ひを附けますやら。

で、念のために、町内が四五人連署で、其筋へ捜索願ひを出さうと云ふ、やがて半月、丁ど居なく成つてから日を數へて十四日の夜中頃茫乎として歸つて來ました……」

「前原が。」

「歸つてですね……」

倫之助は更めて、袴に整然と手を置いて、

「夜が明ける、と更めて、御迷惑を掛けた御近所へは、又お詫びに出ます。が、差當つて、——

と云つて私どもへ、のそつと見えたのが彼是一時頃です。

何處に怪我があるでもなし、衣服も鍵裂も見えなかつたんですが、實際、神隱しに逢つたとか、天狗に攫はれたとか云ふのは、恁うした風采かと思ふ、何とも形容の出來ません、……影が薄い、

顔色憔悴しましてね。そして言ふことが變です。
（お蔭を以て、あの椋鳥に連れられまして。）
と椋鳥に連れられたは妙でせう。……（で、樹から樹を傳はつて、或大なる森の、木隱れた高樓の欄干に、仰向けに頰杖しながら、五色の眞綿を練つて、紅梅の唇、白梅の齒で、美い霞を綾取る端麗な夫人に逢つて來ました。
蒼空の水のやうな白い雲の流れを隔てた、向うの高樓の窓にも、天女のやうな面影が覗いて、此方の欄干と微笑みを交はす。
牡丹の花のかへり咲した、園の池の汀には、高島田に結つた錦繪のやうなのが鯉を連れて遊んで居ます。——まことに天上、極樂です——
が、女の首の落ちたのもある、黑髮も散つて居ます、裳の亂れた白脛も横はり、虛空を摑んだ袖も飛ぶ……
廣庭を仕切つて、小屋を並べて、此を守るものは脫衣婆で、白衣の看護婦のやうなのが、或は抱き、或は繼ぎ、或は塗ります。此は地獄です、——いづれ、冥土です。
其の五色の霞を綾取る、夫人との約束で、近日更めて其處へ行きます、冥土へ行くのです。冥土へ行くのは死ぬのです、近いうちに呼吸を斷ちます。

私は其が本望なのです。）
——と其の畫伯が言ふんです——
時に、（其の夫人との約束に因つて、私が死ぬ、私が唯死ぬだけでは不可いのです。世界に此を、死んだ事を、確かに認めて貰はなければ成らない人が一人ある。其れ、清川扶道氏と云ふ工學博士……）
と恁う又前原さんが云ふのです。」
「えゝ、御免され。」
しやがれた聲して、襖を開けて、割股で出たのは、是なむ黑澤尻の刀自である。着と早や寢衣を替へて、紋の着いた被布でござる。
「や、これは其の清川の御老母です。金剛倫之助さん、お能の先生ぢや。」
「こんれは、先づ、はい。」
「はあ、はじめまして。……時に清川さんは、目下御洋行中で、此戰爭にも、いまだお歸りがないやうに承ります。これも畫工さんから其時に聞いたのです。」
「獨逸のべろりん、に。」と刀自は、頸を上げて舌をべろり。
「目下は英京です。一昨年の冬から參つて……滯在の間、御老母を預つて居るですよ。」と博士が

言つた。

「處で、畫工さんの云ふには、清川さんが留守であるから、自分の死んだことを確めて頂きたいのは、貴方、御親戚で在らつしやる貴方、別して醫學博士で在らつしやるから、いざ死んだと云ふ時に、御檢診が願ひたい。貴方に診て頂かなければ死んでも死ねない……いや……意味は違ひますが、浮ばれないと云ふんです。

此はお聞入れはあるまい、ために豫て私が御懇意である事を知つてるに就いて、一生の依頼、折入つて、見掛けて賴む、とつい引入れられたやうに成つて、私が承知するのを見て歸りました。

今まで驗のない、出先へ家内から電話が掛つて、先刻です、――大變な事が出來た、歸れ、と言ひます。――

前原が息を引取りました……」

十五

松澤博士が倫之助とともに、自動車で、煙草屋の店に臨んだ時、茶の室に四五人、町内の見知越が控へて居て、畫工の亡體の横はつた枕許に、唯一人、高島田の婀娜な凛とした姿の娘がついて居た。

此の娘は、前原が息を引取つて、小半時ばかり經つと、丁ど何時かの宵の間、と申合はせたやうな時間に、おなじ方角から、矢張り扇子を使ひながら、スツと來て、聊も猶豫はないで、店から澄まして前原の居室に通つた。

世に祕めた緣であらう、と心得て、婆さんをはじめ、居合せた一同、いづれも、次の室へ退いて、故と、襖を隔てて居たのださうである。

亡體に手を掛けた時、娘は鈴のやうな瞳を睜つて、凝と博士の顏を見た。

博士は、前原の死を斷言した。そして、心臟痲痺だ、と言つた。これを聞いて、

「成程、衝心だ、あの、ぶら〳〵とした工合が、豫て脚氣だつたんだ。――」恁う仕立屋さんは言つたのである。

棺に納めて、蓋を打つ時、娘は、もう一度、人を拂つた。染々名殘を惜むらしい。そして明方にスツと又一人で歸つた。

お婆さんの菩提寺が、本郷駒込の目赤不動の近所にある。

其處へ葬る事に成つて、町内の四五人、中に角刈の仕立屋さん、脊の低いのが、長い袴を引摺つて見送つた。倫之助も會葬した。

先んじて、黑澤尻が黑の紋着で控へたのを見て、

「此は御奇特でございます。」
倫之助が會釋する、と刀自は手を振つた、其の時、紅うらが、ちらりと動いて、もの凄い。
「私は、見屆けに來た、首實檢と云ふのですばい。不埒な、なつし。」と又頭を振つた。午前十一時である。
讀經が濟んで、和尚が嚴に引導の偈を誦せむとして、拂子を捌いて、正面を切つた途端である。
小寺の淺い門前へ、自動車が颯と着くと、飜然と下りた、島田で裾模樣の娘が一人。紺泥に銀で七星を描いた扇子を、半ば開いて、片頰に當てつゝ、すら〳〵と壇を上つて、つと進んで、輕く左右へ會釋をしたので、和尚は魔を視たやうに猶豫つた。
唯、棺に、褄の媚めかしい片膝を支いたと見ると、月がさしたやうに、腕を揚げて、手が屆くと空へ飛んで、欄間の梁へ、うき彫の獅子の頭が紅の色に出るが如くに乘つた。
あれよ、と見る間に、ふッと唇を吹く。五色の綿は、棺を湧いたか、手から捌くか、忽ち千筋の絲と成つて、靡く、と擲つが如く蓋を刎ねて、棺の裡から、すッく、と立つたは、前原である。
「大なお人形さん、ほゝゝ。」
と笑ふ時、口に銜へた扇子を片手に、娘は片頰笑して刀自を見ながら、片手で押すやうに前原の背を送つて、恰も人形の如き畫工の姿の、後について、門へ送る、と自動車の窓から、端正に

して艶麗なる、圓髷の顏が出て、上らうとする前原の、其の額に接吻した。
車の内に、もう一人、氣高い白襟の美女が見えた。
刀自が、棺の前まで震へて出て、拳を握つて、立竦みに成つた時、口を開けて立並んだ出家を後に、自動車は軌出した。
唯、鬱金の風呂敷が絡つたやうな一道の砂煙が、瀑と車體を卷いて、富士前通を遙に天かけるが如く見えたのである。

附記

此の一編の物語は、實は、金剛倫之助から聞いたのを、聊か潤色を加へたものである。
あの大銀杏の下で、眞夜中に緋の袴、十二一重の宮女の姿を見た時は、彼は、實際總毛立つて凄かつたと云ふ……爾時、枝から落ちた鳥の羽に、五彩の纖毛を認めて、細君とともに最う一度驚いた處へ、唐突の客に尙ほ駭かされた。客の、其の畫工前原に賴まれて、彼が松澤博士を訪ねた時、博士には知らない振をしたけれども、前原の生立だの、清川夫人とはじめて逢つた箱根の事、電車の黑髮のもつれまで、其の實、依賴を肯く前に、畫工自身の口から、倫之助が悉しく聞

いたのださうである。

また不思議に、倫之助の細君が大津屋のお親の乳母と知己で、其方の音信は此から知れた。が、お親は、あの夜、伊豆千の芙蓉の庭から、萩の垣根を、一小間まつたくの事、破つて出て、裏田圃の薄の露に、雨霽の星の宿ると齊しく、扇面に七曜の輝くのを、籠行燈の灯で、乳母の手に照らさせながら、劍尖の輝く方へ辿り〳〵、星が土手を指したので、向島の川べりへ出て、またもや扇が大川の對岸を教へたので渡船を呼んだ。

乳母は、何と云つても、それからは連立つことを許されなかつた。雖然、痣鐵は、嘗て清川夫人を、同じ星の指す方へ俥で送つたと云ふので、或處まで連立つ事を、お親から許されたのであつた。

其の或處と云ふのは、倫之助も聞く人の想像に隨せると言ふから、讀者の想像にお任せ申す——で、お親の隱家と、大津屋との連絡は、誰にも祕して、痣鐵が付けて居よう。

それから畫工が、倫之助から五色の蓑を着た椋鳥を引取つて、此を抱きながら、ふら〳〵と成つて、出て行つて、一度行方知れずに成つた間の、不思議な謎の絲の、一ケ處繼目を知つて居る者がある。其は、倫之助の町内の彼の仕立屋である。

角刈の此の男は、同じ夜、謠の若師匠の歸るのを、少し離れて見ながら、町を隔てた屋臺店へ、

鮨をつまみに行つた歸途で——戻つて來た。一寸間があつたので、銀杏の下へ蹞込んで、倫之助の何をして居るかは知らなかつた。が、其の家へ入つたのを見送つて立留る、と向うの出窓の外に、人影が立つて覗いて居たものがある。此の頃、美い娘が來て、ふと其處等を窺ふと云ふので、もしや、と少し寄つて見ると、何だ男だ。詰らない。其のかはり怪いものではない、煙草屋に部屋借の畫工だ。

丁度銀杏樹と向合つた自分の長屋へ引込んだ、が、赤貝の紐を一つ餘計に退治た所爲か、いつになく寢苦しい。暑さは暑し、で、素裸で戸外へ出た。

師匠の家の出窓には、未だ灯がさして、人聲が夜陰に響く。

唯、思はず、先刻蹞込んで何かして居たのを思出して、何心なく大銀杏を見上げる、と、梢までもなく黑塀の上に緋の袴で腰を掛けた蒼白い顏を見た。途端である。暗の中に、目の光る、煙のやうな姿の婆の姿が、ふはりと來て、跫音もなく目前へ逡いた……薄汚れた鬱金の風呂敷を頸にわがねて居る。

何、此には然まで恐れなかつたが——仕立屋は、以前本所の奥に住んで覺えがある……風采と云ひ、容子といひ、第一、いきれたやうな、冷いやうな、古蚊帳のやうな芬と來る其の匂が、巫女と云ふものに相違ない。世に滅びたものの姿は、幽靈に齊しいのである。

それは未だしも、緋の袴に肝を冷して、格子戸へ飛込んだ、が、燈の無い暗がりに身を潜めて、密と覗く、と婆は其處へ、大銀杏の下へ、ふはりと立つて、猫が背伸びをしたやうに、人形の其の蒼白い顏を凝視めるらしい。

間もなく、一人、すら〳〵と雲を渡るやうに美しい娘が來た。

其の娘が、身輕に婆に抱かれる、と葉蔭の暗に、くつきりと顏が白く、袖で抱いて、緋の袴の官女を取つた。婆が風呂敷に包むと、二人が舊來た路へ姿を開いた……時である。

倫之助の家の格子戸の鈴が鳴つて、其處から人影が顯れた。それが大銀杏の下に近寄ると、イんで視た娘が、扇子を星に飜してひら〳〵と招くに連れて、迎寄せられた風に、其の人影が町を過つた——仕立屋は正しく透見をしたと言ふのである。

さて、隣家の荒物屋の奥で、前原の死を檢した松澤博士は、其後倫之助が相變らず稽古をつける時も、此の事については何も言はぬ。が、其の死骸か、寺で、五色の絲の操にかゝつて、棺の中から顯れた方か、其のどちらかの一つは、人形であることは疑ひない。

白晝公然、紅裏の黑の紋着を着た姑の見る前で、人倫を亂すことなくして思ふ同士が接吻する

此の錬金の術を修し得て、清川夫人をして、祕戲を爾なさしめたものは、根津のお天守の姫君

に相違なからう。姫が嫁して、僅に三日。以來十年の寡居幽棲に酬いるに、天は斯の數奇を以てしたのである。

其のお天守、並びに五千坪を、天地にした婦人たちは、やがては白晝と暗夜を繋ぐ黄昏の如く、此世間に接觸して——お人形さんは壞れたの——壞れた人形を買はう——と言ふ聲に、暮六つの鐘の如く、われ〳〵を音信るゝ。

近頃、兩國橋の欄干の袂、下谷車坂の上、兩大師の建札の下に、思ひも寄らない綺麗な人形が立つて居て人を驚かした——窓飾りの圓髷、高島田の美人像がある——あれが拔出したに髣髴であつた、と聞く……大津屋のお轉婆さんの惡戲であらう。

あの人たちが遣りさうな事だ、いまに此が激しく成つて、五色の絲の自在を得ると、人だか人形だか分らなくなるのであらう。最近に聞いたのは、萬世橋の交叉點に、振袖で、竪矢の字のが、月夜にすらりと立つて居た……

事實が最う一つある。

同じ、あの晩、前原が倫之助に話した中に——畫工は兩國の割烹松岸で別れて以來、清川夫人失踪して、其の消息が絶えた時から、半ば失心し、半ば狂噪して、其の行方を覓むるうち……當時、黑髮のみだれし事故ある電車で、學生の口から聞いた心だよりに……ふと思ひついて、愛宕

の塔に上つて見た。然る妖しき姥もありや、物色しようと思つたのである。秋の半ばの夕暮の事。

塔の頂に昇ると、思ひもかけない木の圓柱と翁との間に、干からびた蜘蛛の如く遍く挾つて七十餘りの、朱檀の朽木のやうな婆が、長い白髪をすんなりと肩に掛けて、點々として、恰も其の髪を縷るが如く、細かな網を透いて居た。

安置したもののやうに見えた。

が、照樹の圓髻を摑み壞した婆とは固より、學生の見たと云ふのとも似も附かない。ためにロを利く繼穗もない。

欄干に面を向け、柄をば臺に控へた、大昔の望遠鏡があつた。

「借りても可いかね。」

聲は有るだらうか、とさへ思はれた媼が、言下に應じた。

「何を見さつしやります。」

妙な事を言ふと思つたが、

「景色を。」

「大事ございませぬ。」と頷いて言つた。

やがて、兩國を見て、やがて、萬世橋の邊を、やがて柄を繞らして、くるりと向つた鏡の面。

大なる森の、不知火の如く、むら錦葉したる樹立の中に、二階が映つて、欄干に、雪の手の頰杖を輕く支いた窈窕たる人の姿が映つた。庭の一面紅白の花も咲く。……

其の森の、就中大樹の中から、ふと一齊に、一群の小鳥が舞立つ、と其の人が顏を上げた。

途端であつた。茫と霞んで、青空に消えたのは、圓柱の陰に居た媼が、颯と一捌、投網を望遠鏡に投げたのであつた……

唯、見返りもしないで、口の裡で、

「景色かと思へば、人の內證事を覗くの。それは見せるものではない。私が世の中を見る道具ぢや。」

畫工は拂はうとしたが、投網は霧のやうで手にも取られず、そして次第に濃くなつた。

「おけ〳〵……其處から吉原の廓は見えぬぞ、若い人や。ほゝゝ。」と笑つた。

面は火に成つて、塔を下つた。愛宕山上、高塔の第一層は、巨人の綿頭巾したる如く、霧に包まれて居たのである。

世にかゝる媼の住むは、新しき壁の雨もりの跡のやうなものであらうと、倫之助が又言つた。

夕

顔

一

「一寸……」

白木の枠に磨硝子と云ふ誂への、氣取つたつもりの軒燈も、世界が不景氣なのと、場末なのと、此待合が寂れたので、格子の中に釣したのが何うやら魂迎の燈籠めく。

三和土に水を打つて、宵の濡場の、しつとりと有るのさへ、出入る婦人の蹴出しの色、褄取る艶に、うつくしく露を置添ふる風情はない。時節柄に葭戸も入れぬ、障子の破れ、壁の古さに、侘しく雨漏を思はせる。

唯、其處へ立つたのも、燈籠と雨漏に相應しい、皺の見える單衣の上に、薄羽織の裾の捩れた中年もの。細工よりは取次の商賣を主として、近い頃までは表通りに然るべき店を張つたが、或る事情から女房に死なれて、小兒を二人抱へながら裏路地へ引込んで、帳場簞笥の拔さしにも、寸法に狂ひの來た指物屋、――ぼうと成つた灯の下の顏を見よ、長屋住居の近所では、

(あけら)と帽子を被せさうな名は勘七と云ふのであつた。

勢のない聲で一度呼ぶと、雨氣と夜露のしとりと成つた、麥藁の帽子を脫いで手に下げた。

「一寸……」

屹と見込む元氣もなし。人を呼びながら自分は俯向く、足許の格子際へ目が着くと、撮み上げた盛鹽の眞新しいのと、爪の高い、薄汚れた足袋とを見較べて、腰すぼまりに悄乎しながら、はつと溜息が聲繕。

「御免。」

ニヤー……と上頤で震はせた、咽喉の戰く鳴聲で、尻戸が二三寸開いた隙間へ、眉間へ白い斑のある、大な顏を、ぬい、と出したのは三毛猫で、脊筋の影が朦朧として、畝を築いて、障子越。藪から虎に、勘七ぎよつとして、遁腰を後へ引きつゝ、調子高に大に急いて、

「居なさらないか。御免。」と言ふ。

「はゝい。」

今度は人間。が、ぼやけた聲。直き其の框で、もさ〳〵と動いた樣子は、坐睡をしたに相違あるまい。

「どつこいしよ。」と、欠伸と共に居合の呼吸で、ごと〳〵と障子を開けて、五十有餘歲と思しき乾びた婆樣が、衣ものも髮も、影のやうにもそりと立つ。

そも〳〵是は八月の下旬である。……此日は朝から糠雨で、暮方に一驟雨、風を誘つて、どッと來たのが、又小留んで、月を宿した雲脚早く、空と水と入交りでもするやうに、宵から急に冷えて來た。が、框の障子から古猫が覗いて、帳場に婆さんが船を漕ぐ。洪水は向島邊だと聞くのに、此の芝浦も津浪か知らず、火の滅えたこと夥しい。

まだしも勿怪な僥倖は、婆さんが出ると同時に、こつそり變化した樣子もなくて、件の猫が框に消えて失くなつた事である。

「多日。」と、何と、客の方から會釋をする。

勘七の顏を薄目で視て、

「おや、入らつしやいまし、旦那。」

「多日だね、あはゝ。」

と、つきもなく笑ひながら、吻としたらしく、勘七は雨傘を立掛ける、紺蛇目傘ではあるけれども、恁る折から色氣はない、淺瀨に朽ちた棒杭也。

勘七は俯向いて衝と上つた。

ボン〳〵時計と姿見が、ふててベッかッこで向合つた、眞中に、天井が口を開いた穴の如き階子段を、腰の据らない立身で望んで勘七が、

「何方だい。」

「どつちにも何にも、旦那、へゝゝ。」と黑く開けた鐵漿口。其から霧を吐くかと思ふ、薄暗い茶の間の隅の電話の下から、ヌッと出て、以前の古猫が、のさ〳〵と二階へ攀る、茶色の煙の這ふやうに。

二

「景氣は何んなですえ。」

つい通りに先づ云つた……勘七は二階の八疊で、卓子臺を前に控へたが、背後の床の間が淺い處へ、壁が煤けて龜裂があるのに、何を感じたやら長柄、足柄の分ちも覺えぬ、鵜飼を墨繪の紙表具。……其の黑い本尊が……南無阿彌陀々々、鴉に似て、贅澤な眞似をすると水に溺れる段、諷する處あるが如し。で、旁々床柱を背負つた指物屋の旦那にあらで、公賣の手傳ひに、襖を背負つて腰を拔いた輕子の形。立入つて此を言へば、佛壇を賣りに出て、御先祖の祟りで、金縛りに成つた樣子もある、勘七は我ながら、

「あゝ、陽氣も惡いが、景氣はどんなですえ。」

婆さんが生暖い煎茶を出して、食籠の松風煎餅、色のみ常盤にして、颯々と風の渡る、浮世の

塵の積つたのを卓子臺に按排しつゝ、

「此の通り……」

と投げた口が、欠伸の餘波で、

「で、ございますよ、はい。」と自棄らしく力んで言ふ。

此處が八疊、中仕切が階子壇の上り口で縱四疊、隔ての向うの六疊の三間を見通して、やがて二十疊。座敷は唯た此切ながら開放しに成つて茫と廣いのが、眞中に薄りと青みを見せた、まだ新しいが以ての外の安琉球、隅々の惡く赤茶けたは、苗代田へ水が溢れて一村飢饉のあはれが見える。……かと思へば、鼠が片端へ手を掛けると、ぐる〳〵と一卷きに成つて隣家の廂合へ吹飛ばされさうなのに、濁つた星のやうな、どんよりとある電燈が三箇。大空だか、天井だか、同じやうな雲の往來である。

客は云ふまでもなく一人もない。先へ上つた猫も見えぬ。

「何處も同一ことだと云ふのぢや無いかね。」と勘七が茶を舐めると、絲底をひいて、垂々と卓子臺が最う汚れた。

雙方水の出花なら、此さへ濡の機掛で、戀のいろはも書くのであらう。

婆さんは籠に疊んだ小さな布巾で、效性なげに一撫で撫でて、

「何處もおなじだと申します中にも、上も下もございますがね、此方などはお話しに成りますやうなんではございませんよ。はい……」と、はつきり覺めた目が却つてしよぼつく。

「お上さんは、媼さん、留守なんですかね。」

「はい……先月、あの、旦那がお見えなさいました——あれは確か、お盆前でございましたつけかねえ。」

「え、其ッ切、何處かへ行つて居ないのかね。」と餘の事に、勘七は先潛り。此だけは氣が早くッて職人らしい威勢だつた。

「有體は、おつしやる通り、お盆を見越しまして駈落をいたします方が可かつた程でございますがね、はい、はゝゝ。」

と飛んだ世辭笑、鐵漿の見える口の端が、電燈の加減で變に輪取つて、

「とに角、此の屋臺骨を背負つて居りますので、錢湯へ駈出すやうに、手拭一本で、おさらばとも參りません。精々ものいりをかなじんで、引越たての猫のやうに、二人でねえ、まあ、旦那、お帳場の隅に鼻を突合せて、縮こまつて居りますが。何うでございませう。あの晩旦那が、あの、何時も申すことでございますが、まあ、あの、お美しいのと御一所においで下さいましてから、一月餘、日に數へまして三十幾日が間と申しますものは、旦那え、其の何なんでございますよ。」

と嵩にかゝつて乘出すばかり、急込んで言ふのを聞けば、
「お一人だつて、缺片だつて、お客樣の影も無いのでございます。」

三

「上さんも氣が氣ぢやございますまい……ねえ、旦那、何を當と申すでも無いのでございますけれども、内に熟としては居られないと申しちや出歩行きましてね。はい、つい……と云ひましても、此の、月はじめ、眞晝間でございましたが、内の路地口で、旦那、馴染のお客樣に出逢ひましたものでございますから、たしなみも忘れて、おや、可うこそ、さあ、おいでなさいましッて、まるで、引張りでございますよね。へゝ、あの、其の御仁もお弱んなすつたが、可厭だともおつしやらずに、むゝ、待ちな。其處等を御覽なすつて、あの瀬戸物屋で買物をして、すぐに寄る、とおつしやるのが、角の荒物屋の筋向うが藥屋で、其の隣家なんでございます。
では屹とですよ、か何か申して、素頓狂に肩を敲いて帳場へ駈込んで、上さんが、まあ嬉しい、お一方出來たよ、お馴染は難有いものぢやないかと、急に鐵瓶を掛けますやら、火入の灰を平しますやら、も一度緣起棚へ、お燈明をあげますやら。くる〳〵舞して、居たり、起つたり、さあ、それからでございますが、以上。」

と婆さんは恐しく極つた、生眞面目な、事も大仰な顔をして、勘七を瞻つて、
「いくら待ちましても、おいでが無いのでございますね、……へい。まさか、お欺しなさりはしまい、お身體に別條が有るのではなからうか、表は電車通ではありはせず、……お怪我と云つた處で、もしや頓死をさつしやりはしまいかと、つい、目と鼻の間でございますだけにね、旦那。餘りお遲いので心配しまして、上さんが駈出して見に參りますと、お客樣處か日盛りの炎天で、戸外に人通もございませず、瀬戸物屋の店が寂寞して、石屋のやうで、口惜い所爲か、きんかくしがお石塔に見えて、蟋蟀が鳴いて居たつて、溜息を吐くぢやございませんか。
お約束が瀬戸物だけに、お客樣が駈落をなすつたらうと、ねえ、まあ、私が仕方なしに然う申したのでございますがね、はい、へゝゝ。」
「成程。瀬戸物だけに缺落かね、はゝ。」と勘七も氣のない笑で、のめるが如く卓子臺に眉間を兩掌。又此の頭髮の伸びたのが頭痛がしさうな容體に見える。
「泣くより笑でございますよ、はい。それを聞いて、上さんが笑ひました顔を見ますと、あゝ、二十日餘りも笑顔と云つては見た事もないのに、其の笑ふのが當にした客に逃げられたこじつけ故か、と思ひますと、酒落を申した私の方が、氣の毒なやら、はかないやらで、つい、ぼろ〳〵と泣きましたんでございますよ。」

としんみり云ふ、――成程、洗髪で晝夜帶の女中は辛抱が成兼よう――此の婆さんと女房とは、伯母姪の間と聞く。

「何事も成行きだよ。」と勘七も身に詰まされたやうに云つた。

「でございますが、其の旦那、成行を成行きにして落着いては居られませんものでございますから、最う此頃ぢや神頼み。」

「はあ、神頼み。」

「へい、佛信心、心當りのお客の數ほど、彼方此方願掛をいたすのでございまして、今日も晩方から出ましてございますが、いづれ、お百度を上げて居りますから、歸りますにはまだ少々手間が取れませうでございます、が何うぞ旦那、御緩りなさいまして、はい。」

「然う緩りもして居られないのだがね。」

「どうか、然うおつしやらずと、お連樣は、お連樣、内の上さんに、お顏を見せて遣つて下さいまし。拜みますでございませう、御利益だ、と思つて。屹とあれでございます、何方樣かの滿願の日に當りましたに相違ないのでござります、へい。」

「まあ、待つて下さい。」

勘七は言を壓へた手を、それなりに頸を抱いて、後退りをしながら、

「願掛けにお百度をあげる滿願の夜に當つて、御利益と云ふ客が此の體ぢやあ、私は御存じの指物屋だが、矢張り駈落をせにやならない。」

四

勘七は勢のない、屈託らしい、詰らなさうな、氣の拔けた、其の癖、落着かない顏をして、座敷の沖に唯一人、其の難破船を雲から覗く、淀んだ星の如き電燈の下に、兀然として、二枚折の金屏風を視めて居る。

驚いては不可ません！　此の待合と、此の客にして、金屏風。

乞ふ君、黃金の箔にも恥ぢよ。卓子臺の上には銚子と盞とあつて、燦爛たる這個色彩に對しながら、面に一點の紅潮を見ず、蒼しよびれて居るではないか。

然し不思議も、矛盾もない、實は其の酒には醉へなかつた。――金屏風にも理由がある。

最一つ差置いた水焜爐の炭火が、がさりと中崩れがして、周圍に尉が白いにも係らず、鐵鍋は黑い穴の開いたやうに同じ卓子臺の上に閑却されて、並んで控へた軍鷄らしい仕出しの皿が、手着かずに、上へ、じつとりと半紙の紙が掛つた處も、御注意を願ひたい。

執も假名で澤山、繪解に因つて明かに解る……

が、こゝに一つ説明の限りでないものがある。其は、あれ、其處に、軍鷄の皿の其の紙の上に、ぶつりと乘つた蟲である。羽の生えた蛆である、陰慘たる光を放つて、蒼く燃ゆる毒である、即ち蒼蠅である。此奴は勝手に來て、勝手に留つて、勝手に隙を狙つて居る、ために白紙の蔽もしたらう。……が、果して軍鷄舐が目的歟。此の場の光景を以つて見るに、何うやら腐つた人間の腸を窺つて居さうでならぬ。あゝ、浦には近し、此が螢の亡骸だつたら、金屏風にも影が通つて、情も景も備はるものを、如何せむ蒼蠅である。勿論、説明の限りではない。……

「矢張り、お電話はお掛けなさりませんのでございますね。」

樣子を知つて婆さんが然う云つたのに、默つて頷く……勘七は此家で、左褄して島田に結つた縮子の帶、餘所の妾と首尾するのであつたから。

のを呼ぶのではない、圓髷に結つた

「まあ、お久しぶりで、婀娜なお姿がをがまれます。……今頃おいでなさいますりや、一目見たばかりで涼しく成る。暑さも何も忘れるんだけれども、と、初中終上さんとお噂を申すんでございましてね。眞個に、世の中に、あんな又雪のやうな、お色の白い方はあるものぢやございませんよ。」

「さあ、何うですかね。」とはぐらすでもなく、勘七は浮かぬ顏。

却説、酒と成つた。

「何しろお銚子を……」

で、婆さんは下屋へ下りた。

「あゝ。」

勘七は我慢も意地も忘果てた大歎息。

「人より前に猫が出る……此の二階へも、のさり〳〵先へ上つた。可厭に陰氣だ。居睡からこぢ起された、あの婆さんの下りて行く後姿は何うだらう。汗だらけの衣紋が、べつとりと摺下つて、やれ〳〵、……帶の結目がぶらんとして、あれで黃色けりや、其のまゝの尻尾だ。

不氣味だなあ。」

勘七は、などと思ふ。

五

「恁う又……馬鹿な、待合で猫を氣にするのは、お寺で亡者を可厭がるやうなもんだけれど、矢張り心持だ、時と場合に因る……

藝妓をして居る中に、生命も身上も入上げて、それで此方の意地が通つて一分でも立つた事か。婦は今ぢや他人の妾。……初手は色戀で逢つたのが、情に搦んで、忍んであひゞきをした內はま

だしもだつけ……此の頃ぢや婦も何うやら眞個の義理で出て來るらしい。
無理もないが、我ながら賴母しくないからな。婦のために氣苦勞して、身代と一所に、見す見す痩せて、乳から胸、胸から咽喉、咽喉から顋、あゝ、そのどれも美しかつた、顋から頰と段々に消えて了つた……死んだ女房の思でも、婦とは末は遂げられまい、と云ふうちに、最う十日に三度が、月に二度、間四十日も途絶えるほど出逢が煩しくなつて居る。
家には小兒が待つて居る。六歳と三歳の頑是ないのに、乳母を附ける仕覺もなし、子守兼帶の小女一人、恁うしてぶら〳〵出て居ちや、嘸ぞ長屋中此沙汰で、口の端に掛る事だらう……歸る家さへ敷居が高いものを、居心の可い待合が天から授かる道理はない。……變に冷つく。簾が煽る。じと〳〵と生溫い、幽靈の濱風だ。可厭な空模樣だ。婦が出るのに故障が起りはしないだらうか。最う何の彼のが小煩い、これで婦が來て逢ふのを合圖に、息を引取りや世話はないに……
おゝおゝ古い天井だ、大な俺の影法師だ。
あゝ寂しい影だ。……」
「はい、お待遠樣。」
「あ！　媼さんか。吃驚する。」
「えゝ、何を吃驚なさいます……あの方だと思召した處へ、婆ぢや、化物のやうにお見えなさい

ましたのでございませう、はい、へゝゝ。」
と、それ其の鐵漿口。
「いや、化物は此方こそ、一人でつくねんとして居る處は、狐か狸に見えやしないかね。」
「可厭でございますね、あんな事を。」
「然う云へば猫は何うしたい。」
「猫？……でございますつて……」
「それ、先刻、框へ顏を出してから、二階へ上つて來たぢやないか。」
「えゝ、あの、お駒……」
「お駒。」と、勘七は聞返す。
待人の名なのである。——
此の呼吸だと、駈出しの女中にも分るのであらうけれども、女房の伯母さんには一向に氣が付かなかつた。
「へい、駒さんと云ひましてね、露地隣の非商屋さんのでございましてね、雌猫でございますが、それは旦那、鼠を取ります大達者。もう取盡してお隣には居りませんものでございますから、此の節ぢや、手前どものを構つてくれるんでございますがね。家も寂れますと馬鹿にして、此の又

鼠の荒れますこと。夜中に上さんと二人で、起直つて、何うしようかと顏を見合せるほどでございましたのに、彼が來てくれて、眞個一晩に十三銜へたことさへございます。此の四五日は、風がなければ音のしないほどに靜りまして、全くおかげでございますので、最うお駒さんお駒さんと申して、內ぢや獸のやうには思ひません。

眞個に、よく申すことでございますが、お駒と云ふ名は猫につけると、よく鼠を取りますし、女の子につけますと、別嬪でね、旦那、それは〳〵男殺し。」

「へい、男殺し？……」

と可厭な顏をした。

さすがに、フツと氣は付いたが、引くには引かれず、婆さん恍けた色して、

「と申しますよ。へゝゝ、お心當りでも。旦那。」

と、てれ隱しに調子を高めて、

「御遠慮は申しましたが、婆のお酌で、さあ御一杯。」

利く手に受けると、少し陽氣。

「……十三匹は、えらいもんだなあ。」

六

「何しろ人氣が少うございますから、鼠の數と申しては、そりや無いのでございますからね、旦那、二階などは全つ切、空屋同然だものですから、三十五十一齊に駈歩行く騷動……私どもを馬鹿にするのでございますよ、はい。」

「媼さん、御飯が未だなんだから。」

勘七は唯さへ滅入る。陰氣と不景氣が、ばら〳〵と尻尾を生して暴廻るやうな鼠の話に、うんざりして、箪笥を嚙つて一張羅に穴をあけられた泣言が出さうな處を遮つた。

「御一所に……へい〳〵、召食りものは存じて居ります。」

と些とは人間に返つて出て行く。

「これだ。」

豫て期したるものの如く、勘七は猪口を覗いて眉を顰めながら、注置きで冷めたのを、一杯杯洗にざぶりと開けた。藥すべが入つて居たので、場合が場合、酒から河童が出たやうな氣味の惡い顏をした。

「臺所も狹いから、竈の傍に土用越の樽と來て居る。眞夏、雜と四十日、口をつけても涎ぐらる

にしか注いだ事の無い溜です。徳利も如件だ。蓋をしない古井戸同然、中から何か出ようも知れん！」

と手酌で思切つて、どぶりと注ぐと、冴、盞の弱小い模様を、山の如くに壓して、蛆が泳ぐやうな、ぶく〳〵と膨つた鼠の屎。

「祟だなあ。」

とぐたりと俯向いて、寂滅らしく、げんなりする。

其處へ婆さんが、

「はい、旦那、おあとの熱いのが參りました。」

「お世話ですよ。」と少し憤氣。

先の銚子と入替に振つて見て、

「おや、些とも召飲らないで、お盞が……おや〳〵、おやまあ！」

と婆の瞳が、鼠のそれと同じ影に、酒に映るほど熟と覗いて、

「飛んでもない蛞蝓が。」

「えゝ、蛞蝓。」

と、勘七は堪らない弱切つた顏を上げて、

「そりや鼠の屎ぢやないのかい。」

（ないのかい。）と彼は云つた。

「へい、成程、まあ、大々と思切つてふやけましたこと、へゝゝ。」

と唐突に笑ひながら、とぼんと忘れたやうに寂しい眞顏で、

「私は又蛞蝓かと思ひましてね……否、それは、事も大層な蛞蝓でございましてね。夜分寢て居りますと夜具の上を這ひまして、此の間なんぞは、上さんの小搔卷の天鵞絨の襟を臺なしにして、私の頰邊を傳るだらうではございませんか。其の時も二人とも飛起きました。

流許から、三和土から、出ますが〳〵。鹽と云へば俵ごと石灰ぐらゐに振撒かないでは追付きません。塵取に取ります處が、山裝一杯。

棄場がございますまい、旦那。お隣の羽目へ障りませんやうに、溝板のわきを掘つて埋めようといたしますと、其の穴が又蛞蝓で一杯なんぢやございませんか、悚然いたしましてございますよ、へい。

あれもね、甲羅經ると化けるものと見えまして、赤いのが居りましてね、大さと云つたら、佃から賣りに來ます粒選の海鼠ぐらゐ、角が生えて居りますよ、へい。大將でございますかね。それが幾つでも出ますから、兵隊さんは數も限りも分りません。ぬる〳〵湧いちや推寄せて參りま

すやうでございましてね、夜半に熟として考へて居りますと、ざあ〳〵跫音がしさうで氣味が惡いやうでございますがね。

まあ幸と、二階へは澤山あがりません。――あゝ、然う〳〵、上さんに言はれたのを忘れました……お客樣がおいでに成ると、此を。」

と立つて――窓へすらりと簾をおろした――片隅、戸袋の壁に着けて、裏を折つて立掛けた、棧に伸上るやうにして手を掛けたのが、こゝに開かれた金屏風。

婆さんの、鼠のやうな圓髷の上から、簾を透いて、物干の柱が、雲で搖れるか、と其の時見えた。

七

「旦那、上さんが此は、お茶屋に奉公をいたして居りました時からの希望で、世帶を持つて待合を初めたら、何はなくても是非金屏風を、と云ふのでございましたさうで。……つい達きません處から、彼處だ、此處だ、と手入やら、繼はぎやら、雨露の方にばかり掛つて、其のまゝにして居りましたが、鼠にはお駒さん。が、蛞蝓でございます……邪氣なり濕氣なり、黃金は惡氣を拂ふ、此の商賣の隙なのも金屏風を買はなかつたからだらう。と然う申して、へい、苦しい中から。

私は止したが可からう。夜着の襟さへ這ふのだものを、ずる〳〵傳はれて御覽なさいまし、金屏風は一度で臺なし……景氣も直つて引越でもしてからの方が、と申して留めましたのでございますがね、何でも惡氣を拂ふから、と然う云つて、しかし念のためにね、旦那。誰方もおいでになりません時は、裏を向けて伏せて置くのでございましてね、はい。」

……と云ふ念入な緣起附で、お開帳ほどの勿體。饒舌りながら、立ちながら、徐々と割つて開く、と簾越しに見透す屋根は、射込んで稻妻を浴せさうな暗さだつたが、有繋に座敷の其の隅だけ、颯と二折切拔いて、夜が明けたやうに輝いた。

唯、見る間も無かつた。ドンと地響きを打つ、沈んだ陰氣な音がして、大なものが倒れた、と聽くや、ばた〳〵ばた、どん、づしん、氣たゝましい、人數の跫音。

はつと呼吸を詰めて、思はず勘七が膝を立てた時、婆さんは突拔けさうに簾から首を出した。

「何だ、火事か。」

「へい。」と怯えた聲をする。

途端に、がら〳〵と格子戸が開いた。が、金屏風の下に響いたのは、其處が露地の、此家の勝手と向ひ合つた家らしい。

續いて、すた〳〵と駈出す響。

「手が入りましたのかね、お向うさんへ。」と、今度は然まで慌てもしないで、様子を見にやら婆さんは階下へ下りる……

「尋常でない。」

勘七は血相した……如何にも尋常でない、變な、重い、意味の籠つた響であつた。

ぶる〳〵震ふ手に、二度目の銚子を注いで見たが、

「何の因果だい。」

で、ざぶりと又覆けた。

「餓鬼道の苦みだ。こりや、俺あ寂滅だぞ。」

と卓子臺に、がつくり突俯す。

「頓死したのでございます。」

「……」

「お向うの大工さんの爺さんでございますがね、へい。不斷達者な人だけに、卒中でございませう。晩にお極りの三合で、可い機嫌で、いつも講釋場へ出て行きますのが、今夜は若がへつて、活動へ行かうと申して、三和土に下りて下駄を突掛けましたと思ふと、ぶつかへりましたさうで。どしんと……其の音だつたのでございます。」

「ぢや人の死んだ音だ……死んで了つたのかね。」

「如何でございますか、下駄の下には大きな蛞蝓の赤いのが居りましたさうで。辷つた拍子、打所が惡かつたんでございませう。……うん、と其ッ切。手間取が一人お醫師へ駈出します出會がしらに、旦那、濟みません。入つて來た出前持が打つかつて、お汁を溢して了ひまして、すぐに取つて參ると申しながら、若いものツて仕樣のない、お向うの騷動を、立つて覗いて居ります。叱言を申して遣りました、御免なさいましよ、はい、すぐに。」

と云ふ。焜爐と、軍鷄の皿は並べたのに……

「あゝ、こりや何だ、死んだ訃音と鉢合せに打つかつたんだ。」

「滅相な、お醫者へ行く使なんでございますよ、へい。」

「年寄の卒中なら、醫者も坊主も同じやうなものだらう。」

「然やうでございますともね、はい。」

いや、あけらの勘七生命が危い……見る間に窪みさうな目で、せめて婆婆に居る表象らしい金屏風を視める、と、何と、それが燦と輝いたのは金色だが、亡者を迎にござる阿彌陀如來が虚空通行の道筋の後光らしい。

八

こゝに、勘七が更めて、卓子臺を離れて、壁の前に膝組に及んで、金屏風を一人瞻めて居る、焜爐の火が白く成つて、皿の紙に蒼蠅がボトンと青光に留まつて居るのは、――それから、良頃刻經つてからの事なのである。

それまでは伸つ、反つ、苛つたり、悶えたり、立つたり居たりで、階子段の口までも、五六度往つたり來たりした。

婦が何時までも來ないのである。

待つほど焦る。……焦るほど待たれる。あゝして、恁うして、と逢つてからの事が、嬉しいやうに、口惜いやうに、むず痒いやうに、身震が出るやうに、胸も張裂けるほどなのが、口にも聲にも出るので無いから、心が亂れて、凄いまで、目ばかりが据つて光る。

「お遲うございますね。」

「些と手間が取れるんだよ。」

變に言譯らしく云つたのも初手の内で。……

「御退屈樣でございませう。」

「何。」

とばかりが二度めであつた。

三度婆さんが上つて來て、

「眞個に何う遊ばしたんでございませうねえ。」

「知らないよ。」

最う大分苛つて居て、對手に突掛るやうだつた、が、詮方も無き次第。婆さんは客の立てた腹を横に寢かして、其處で枕を置いて行く。

勘七はどたりと仰向けに轉がつたが、待草臥れた手足が萎えて、ぐつたりと成りながら、妙に胸ばかり硬ばつて、天井の壓に打たるゝやうに、廣い座敷も幅つたい。

此の折から、向う長屋の大工の内で、小雨も降るか、濕つぽく、もこ、もこん、もこ、もこん、もん〳〵もん〳〵と通夜の木魚を敲出す……

「愈々不可い。」

醫師が來て檢診が終つて、死んだのが極つて……騷動が止んで、白木の机、樒、枕團子、と思ふと、……立山地獄で煙草でも呑むやうな脂くさい、安線香の香が芬と鼻を突く。支度が濟んで徐ろに通夜をはじめた木魚の音。で、時刻は大分經つたのであるが。

猫で、鼠で、上さんがお百度で、銚子に藁の、盞に屎。頓死に汁が鉢合せ、通夜の木魚でお念佛、と揃つたと成ると、新婚の屏風が廻つても大概な縁は切れる……婦が來た處で浮いた言の一句も言へまい。——第一、どんなに度胸を据ゑた日にも、婦の歸らねば成らないと云ふ刻限が早過ぎる。

南無不可思議光、法藏菩薩因位時。もく〳〵もゝん、と木魚の音。

「あゝ、情ない。」

邪險に殺した女房の手觸りが、何うやら搔卷の裾に掛ると思ふと、希有な事には、重い額が裂けたやうに、括枕が二つに分れて、一つが六歳、一つが三歳の、内に置いた、兒ども達の、橙のやうな、才槌のやうな頭に成つて、やはり、ごつんと腦に響く。

もく〳〵もん〳〵木魚の聲。

すぽん〳〵と額に拔けて、きなッ臭いまで鼻を貫く、頭腦が痺れる。

「あゝ、堪らない。」

勘七はむつくと起きた。が婦と添でもしたほどに、小搔卷の裡に亂れて、はだかつた胸を合せて、貝の口がぐたりとした帶を取つて、きりゝと廻す手に——羽織こそは脫いだが——雇の小女の前も用ありさうに、當の無い外出の折も、まじくなひに插して居る、曲尺が手に觸つた。

勘七は拳で握つた。

「身體中、正しいものは此一つ！」

唯、光を放つ金屏風。

勘七は拔いた曲尺を扇に取つて、居ずまひを正しく、茶に呼ばれたもののやうに、金屏風の前に摺寄つた。

蒼蠅が狙ふと知らずや。

九

薄りした彩色の、覺束ないまで、殆ど、胡粉ばかり。其れも金色に消されたのを、爰に心を留めて間近で見ると、屏風には、夕顔が描いてあつた。

白群で流した歌もなし、墨で留めた蟲もなく、あはれに果敢い夕顔の淡雪積る花の數。葉はただ花を密とのせ、蔓はたゞ密と花を結んで、綠青の淺い、其れも白い。

莟と、半ば開いたのと、大輪なのが二三枚、そよ〳〵と煽つ簾に、影が戰きさうである。

勘七は、まだ恁うした境遇に落ちない以前に、毎年鉢に培つて、此の夕顔を誇とした……發句も歌もあるのではない。こゝが職人を兼ねた指物屋の旦那である。右の曲尺を取つて、其

の大輪に當てて見た。寸法を計るとは言へ、通夜の木魚と蒼蠅を前後に、蛞蝓を拂ふ濕氣よけと云ふ金屏風に對して、待合の二階で密通する餘所の妾に焦れながら、花の夕顔の繪の輪に、曲尺を規したは少し怪しい。

唯、性根を、全ッ切落したやうに、手から、ばたりと曲尺を離した。それが、がらりと疊に鳴るまで、三の間に三つの電燈が、例のどんよりとして寂しいのである。

勘七は花片に爪の伸びた指を當てた。

「然うだ……眞夏の日盛が、却つて人目が無いと云つて、崕裏の木の下闇であひゞきした時——迚り着いた私は草臥れて蹲んで待つた。やがて二時待つた。……涼傘もさゝずに忍んで來て、(蹲んでちや見ッともないわ。)成程私は、膝をはだけて、だらしなく股の眞中へ顎から蝙蝠傘を支いて土百姓のやうだつた。(おい)と立つ。(まあ、松葉が。)と麥藁帽子の頂を掬つて、さらりと拂つて、其の松葉を、一葉二葉唇に嚙んだ、立姿を見た時は、常盤樹の綠の中に、崕をしたゝる露はあり、顏も胸も、手も襟も、宛然夕顏の花のやうだと思つた。

何の鉢にも、あんな白い、そして床しい薫なのはない。(一目見たばかりでも涼しく成る、暑さも何も忘れる。)と言つた、婆さんが今夜も言つた……(あんな又雪のやうな、お色の白い方はあるものぢやない)……」

勘七は身震したが、四邊を視て、和りとした顏色が容易でない。其の夕顏に頰を當てて、もじやもじやの顋髭が、蟻のやうに白い花瓣の一重を縫ふと、花はひらりと頰を包んで、抱き寄せるやうに、こんもりと浮出したと見るや、勘七は口を開けて、唇を當てた。金箔を呼吸で掠めて、ほんのりと薫ると思ふと、甘い露が垂々と成る、息を引いて舌で吸つた。

……と彼は氣が狂つてから人に饒舌る。

あれ見よ、颯と唐紅の夕立を、一筋瀧の如く屏風に流して、夕顏の花に注いだのは、駒(猫)が鼠を銜へたのである。

それは鼠の血汐であつた。

「わッ。」

と叫んで、尻居に反つて、舌を吐いた、血だらけの口は耳まで裂けて、眼は異樣に輝いた。蒼蠅が鉛の如くブンと階子段の方へ飛ぶ。

「お通夜ですつて、氣味が惡いわねえ。」

小さく疊んだ空色の手巾を片手に、すつと入つて來た媚かしいのは、艶々とある圓髷の手柄も白く、着たのは紺筋の明石縮で、帶も白群に銀泥の藻の花模樣。水色の蹴出しに嫁菜の藍が、ちらちらと疊に映る……姿も色も、雪を束ね、夕顏の花を重ねたやうであつた。

「あ。」……聲も立たず、一目見るなり、お駒は立窘みに膝を支いて、はらりと落した手巾は、冷い汗は恁うかと思ふ、薄い淺葱を疊に落して、眞蒼に成る處を……

「お駒。」

と呼ぶ口、赫と血で、矢庭に背を抱くと、早や眞白な其の腕が、袖を亂して空を摑んで、

「あゝれ。」と、云ふのが呼吸の下。

「私だ……」

「放して。」

「勘七だ、私だ、お駒。」

「後生です、放して。」

「何うもしない、何うもしない。」

「堪忍して、堪忍して……」

「えゝ、何うするものか。お前の身を食ふものか。何故、何故然うだ……お駒。」

「御免なさい、可厭ですよう。」が現で云ふ。

「何、可厭だ、御……免……だ。……」

と唸ると、頰に頰を合せた時、お駒の姿は裾をなぞへに、足が縮んで、兩手は柔かにバタリと

落ちた。

天邊に圓髷をのせた、目の圓い、出額の上さんの顏が、二階へ迫出した、と見るや否や、眞倒に成つて脚を上へ、どた〳〵と辷落ちた。「きやッ。」

多勢が立合つた時は、勘七の頭髮が逆立ち、目の色變つて、あらう事か、衣紋の亂れた、眞白なお駒の乳に、件の曲尺が當つて居た……

が、突然物干へ飛出すと、どしや降りの中で故と人を怯す惡戲のやうに、

「ぎやッ。」と叫んだ。それが、猫にも鴉にも似て居たのである。

お駒は、ものの半月ばかり煩つて正氣に返つた。そして、かげながら勘七のために、快復を祈るのに、本尊を拜んで居る。……佛體は月の如き夕顔の花の中に、觀世音を刻んだのである。

此の話は、婦人から其の御像をあつらへられた、名譽の佛師から傳へ聞く。……佛師は、これを、夕顔觀世音の由來と云ふ。

蒔繪もの

其の唄の聲が、唄ふ聲が、山の深さに、靜な峰に谺して、恰も小鼓が鳴るかと聞える。

……スポポーンノポン、スポポーンノポン……

音律が調べに叶ふと、山姫の祕曲にも紛ふのであらうが、口三味線の出まかせで、月夜の狸の腹ほどの冴も無い。それでも唄ふものは、一人で面白さうだし、場所が場所で——蘆の湖の裾を姥子道の岨づたひ、姿は見えないで、茅薄の山の根に茂つた中に響くのであるから、自から言ひ知れぬ風情が添ふ。

……二人旅の萬歳が……

成程、節も其處どころで、太夫といへば名にも恥ぢよう、駈出しの才藏ならば腹も立たぬ唄ひ方。

一人は峠をすご〳〵と、あとに殘りし萬歳は、山の麓に友呼ぶ調べ。

スポポーンノポン、スポポーンノポン。

小春時の眞晝間ながら、聲にも影が有るやうに、山高ければ霜早く、木の葉の上に雲は濃し、松は時雨れむとする趣あり、鳩の鳴音も絶々に寂しい中に、

スポポーンノポン、スポポーンノポン。

敢て手拍子を打つのではないが、拍子の音も手に取るばかり。

湖の緣を縫ふのであれば、すぐに麓だと言へば言へるし、關所に近い山路なれば、其處を峠とも言へば言はるゝ——何方が友を呼ぶのやら。はじめからの一人旅。すご〳〵行くのが自分なら、麓で誰かが呼ぶのであらう。友を呼ぶのが自分なら、誰かが峰をすご〳〵行く。……どちらが我か、いづれが友、覺束なくも呼子鳥。

スポポーンノポン、スポポーンノポン。

又此を餘所で聞くと、唄の心に拘泥むのではないが、聲は固より、何うしても、心細い、賴ない、旅の男が誰一人で、とぼ〳〵辿るとよりは思はれぬのであつた。

見上ぐれば、薄紅に萌黄の緣して、黄金の黄を包んだ、白菊もありや玉を鏤め、霜に擬ふ雲の白きを飾つた神ケ嶽は、其の冠した冠ケ嶽の初錦葉を中空に、蘆の湖の水の碧の裾は、蘆を編めども蓑ならず、三保の松原、三島ケ崎、富士の高嶺を薄彩色に、小波の銀の刷箔した青き狩衣の裳を曳く。

雲の上なる此の姿の、景色には相應しい、二十を少し越えたのと、十八九に見えるのと、綾も錦も、もみぢに較べて、初秋の淡粧と、都も生粹の裝した、年上なのは、裊娜と痩せて、年下な

のは豐に艶な、世にも美しい女が二人。

此の冠を頂いて其の裾を長く曳き、兩體一身の微妙なる白拍子の像のやうに、見晴の丘の一方に颯と展けた、薄の中に、縷の如く縺れながら小徑の通ふ、路傍の白い草に、紅の濃い毛氈を木の葉を束ねたやうに敷いて、人交ぜもしないで唯二人、黑髪の差向ひで、蒔繪ものの重詰を膝近く差置きながら、ふとしては颯と吹く冷い風に、四の袖の振も亂さず、そよ〳〵と靡く方に、雲を仰ぎ、湖を望んで、まだ染果てぬもみぢの色に、面も憧憬るゝ狀なのがある。

姿を包んだ薄の穗、ちらりと搦んだ緋の蔦は、今めいて媚かしい。女二人の色香とも言はば言へ、引廻らした屏風の繪となり、包むに餘つた几帳めいて、人なき境にやゝ凄い。

此の先、一町、數十歩ならで、あの、硫黄が燃え、岩が溶け、地の湧く大地獄が有るのであるから、鬼が群れつゝ門を守る、魔の高樓と言つても可からう。

蝶の來て、飛ぶのも見えず、二人は相見て、唯、微笑みたるのみ、無言であつた。

スポポーンノポン、スポポーンノポン。

今は間近く耳に來て、目の下の尾花の中に、湖の浪に搖るゝやう、ふら〳〵と出た麥藁帽は、此の美人に比して、曲水に浮びたる杯に似て非。通草の色の紫に、案山子が戀の夜這である。

あれ、顏が出て、肩が見ゆ。日向の霧を吸ふやうに、下の徑から上つて來た——

色のあせた久留米の飛白も、萎えた帶も、長旅を思はせる。今時件の麥藁で、其色は赤茶けたが、容子は萬歳にしては烏帽子を持たず、藥賣には革鞄が無し、測量師には和服なり、工夫にしようか、脚絆穿でも效性がない、要するに枯木の枝を杖にした、世に漂泊へる青年である。

口髭をちよんと生して、割に氣の輕い、のんきな顏色。

二人連の萬歳が、一人は峠をすご〳〵と……

と、唄ひながら、すぽぽんのぽんと來る。

二人は澄して、女同士、互に顏を見合せた。

ハタと唄を留めた。と、思ふと、十間ばかり隔てて居た……忽ち棒を呑んだやうに立留まつて、きよとんとしながら、二三度四邊を眄したが、ぐいと屈んで差覗いて、尾花の中の蔦の如き錦を透かした。

すた〳〵すた、と後狀に、もと來た方へ、徑下りに駈戻つて、飛込む如く尾花の浪。頭のあたりさら〳〵と輪を卷いて戰いだ處は、魔を驅る奇しき獵犬の迅さであつたが、やがて、帽子が阿彌陀に成ると、うんのろとした衆生で出て來た。

「えへん！　えへん！」

附けたらしい空咳を二つして、呑と氣を入れたらしく一度腰を据ゑたのが、直きに女に近い所。

それから片袖を垣のやうに斜に突張りながら、つか〳〵と早足に通掛かる。

行かせも過さず。

「あ、もし。」

と、年上のが引留めるやうに婀娜な聲。呼吸を内へ引いて、パッタリ留まつた青年の前へ、眞綿を投げたやうに若い方の白い手が、猪口を斜に衝とさして、

「旅は道伴。」と云つた。

が、二人とも、顏を正して莞爾ともせぬのである。

道の傍へ、擲つ如く帽子を棄てると、覺悟をした顏をして、

「お邪魔をします。」

注がれた酒は、重の組の吸筒の錫の、可愛らしい口からであつた。同じ蒔繪は黃金の折鶴、此が羽搏いて拔けて出さうな光景である。

「餘り、餘り其の……つい通りの御挨拶ですが、貴女方は何處から。」

「近所のものです。」

さつと切つて而して割つたやうに、年上のが云ふのに連れて、

「强――羅――可厭な、山猫が鳴くやうね。」

と、年若なのが、うけ口で幽に微笑む。

旅人は變な顏をした。

「昨夜……元箱根の木賃に泊りましてな、今日は湖のへりを姥子を越えて參りました……」

それさへ何にも訊かれないのに、あるべかゝりに言つたのである。誰とも何とも尋ねたのでなし、何とも彼とも又言ひもせぬ。――杯は頻に勸めた。

互交で、丁ど酌をしたのは少い方である。

「や、自然薯に燒松蕈。」

「まあ。」と、若い方が手にした吸筒をトンと重ねて、其の塗の面の赤きが映ゆる、瞼にほんのり色を染めつゝ、引かなぐつて隱し科に、袖の振がはらりと亂れて、緋縮緬が蔽に代る、それに白菊の縫がある。

其の狀を、青年は熟と視た。

「そんな事云つて、貴方、此娘が極を惡がります。自然薯は箱根の名產、松蕈はそれだつて時節のものではありませんか。でも山の中でお恥しい、腥がござんせん。」

「いや、腥と名がついては、白魚だつておあがんなさる貴女がたとは思ひません。然う云ふ意味ではありません。私は妙な事から、恁うした處に、思ひも掛けない綺麗な御婦人が二人きりでお

いでなさる、此の重箱の裏のものは、蒼青な、照々と艶のある、草團子でなければ成らぬやうに思つたのです。

しかし、それは春でした。……小兒の折に人にも聞けば、もの心覺えてから、何かの本で見た事もあります。

それは、人跡途絶えた、大瀧の奥に、別に一圓の天地の濶けた、萌黄の草を敷いた中に、緋桃の花が一本眞盛な處でありましてな、其の團子を取つて食つた男は、町へ戻ると頓死をしたと云ふんです……」

女二人は、ちらりと、ものを言ふ瞳を合せた。

「頂戴をします！　斷つて頂きたい。」

と、ぐたりと成つて、低い、が土手なりに腰を掛けた、手を支かうとして辷つた肘を、毛氈の端に掛けて、

「既に此の體です、五盞ばかりで、はや半分死んだもののやうに成る御酒を下すつて居るのです。それが、青草の團子であつても誓つて食べますつもりです。お一つ是非何うぞ。」

「あゝ、止して下さい。」

今度は年上の方も袂を添へた。

「お止しなさいな。」と、年下のが優しくも言添へる。

「尤も其話にも、桃の下の美人たちは、食べさせまいと遮つたと言ひます。無理に取つて里人が食べたのを見て、相見て二人傷める色あり、あゝ、可哀相にと思ふのが顏に出たと云ふのです。美しいのに然う思はれりや、頓死、食傷、本望ぢやありませんか。

無論、こゝにあるのは青草の團子ぢやありません。是非何うぞ、强情つても御馳走に成りたいのです。」

「では、めしあがれ。」

「毒かも知れない、ほゝゝ。」と少いのが。……そして、左右へ袖を引いた。

「結構ですとも！　既に一滴の酒からして、私は覺悟をして居たのですから。」——

少いのが、輕く挾む、肩が撓つて、袖が浮く時、颯と硫黄の臭がすると、雲とも無しに、むらむらと一面の薄が蔭つて、二三度、續けざまに鴉が鳴いた。自然薯の一切は、箸ながら朦として黑い影、但鮮麗なのは袖である。

「……私は此の寂しい山の高い處に、……他に誰も居らない湖を下に、大地獄を前にして、貴方がた二人と此處に唯三人居て——實に、妙と言へば妙、希有な、不思議な事を思ふのです。」

「おばけ？……」

と少いのが、おくれ毛を密と拂ふ。
「貴方がた、足を、足を一寸お見せ下さい。」
「え。」と、年上のが熟と視る。
「既に毒を食つて皿を甜めて居るのです。眞個生命を差出して居るも同じ事です。仔細ありません。」
「あゝ、尻尾を見るのね。……さあ。」と云つて、惜氣もなく、其の少い方の燃立つやうな振舞に、年上の友染もしつとりと誘はれて、
「これでも山の中では白い。」と言ふ。草は青し、雪を欺く。
「白狐よ。」
「失禮、もう、それで……いや、岩角、茨に、血を走らしてもおいでなさらない。貴女がたは落人ぢやない。しかし不思議なことを思つたと言つたのは其の事です。私は此處で昔の落人を思ひました。二人して手を取つて薄の中を走るのではありません。寧ろ敵に迫られ、仇に追はれて、深山幽谷を辿るのです。城の落武者です。貴女方は其の姫君、其の御臺です。又失禮ながら私が自ら大將で、其の妹たち、又姉君でも構はない。……恁うして人交ぜもせず、山の根に薄に隱れて、清水を掬び、木の實を拾つて、互に扶け、相慰めたら何うでせう。昨日の榮華も忘れませう。

城も國も思ひますまい。取圍む旗さしものも蝶鳥の遊戯に見える……矢玉の響は音樂です。あゝ、あの大地獄のぐツ〳〵、カラ〳〵と煮える音も、生命を棄てて、ものともしないで、男に思はれた婦に取つては、玉を磨き、金を鑄て、指環、簪の飾を作る響きぢやありませんか。あゝ、醉ひました——しかし寒く成つた。」
婦二人は袖を合せて、何故か身に染みたやうに、美しく涙ぐんだ。
「いま初めて、辛い、切ない、果敢ない、と思つた、城の落人の幸福なのが分ると一所に、お庇を以つて、十年以來、漂泊の宿なしの身の樂が分りました。あゝ、醉ひました。しかし寒い。」
「まあ、何うなすつた。」
「蒼い顏して。」
俯向く肩に二人の袖。
羽衣の如く、衝と拂ふと、奴は飛白一枚で、
「否、赫とほてるんです。矢張醉つて居るんです。殆ど前後忘却です。——
……二人づれの萬歳が、一人は峠をすごゝと……」
年上のが、これに和して、
「……あとに殘りし萬歳は……」

「――山の麓に友呼ぶ調べ。――」と少いのがトンと袂を打つ。

奴は夢中で、

「スポポーンノポン、スポポーンノポン、エヽ、エヽ、スポポーンノポンスツポン、スポスポツポンポンと云うては舞をまひ候。……」

忘れたやうに手拍子しつゝ、すつと立つたは姉なる方、冠ケ嶽の薄霧に風一陣當つると見るや、中を白く、ふち黑く描ける瀧の靡くが如く、渦を卷いて颯と颪すと、薄が暗く成る中に、若い女も氣構へして、裳を投げつゝ下なりに、年上なのと屹と目を合す。雙の面は尾花を拂つて、雪の輝くばかりに冴えると、黑髪の二人の間を、ばら〳〵と木の葉が四五枚、火の如く紅に舞つた。

其の振は唄にはよらず、山姥凄き姿である。――青年は突伏した。

此處を、遙に蓋する狀の、綠青に朱を交へた、片側は燃ゆるが如き巖の陰から、男が二人。高等な圓髷に結つた、黑の羽織の姫蔦の紋もなよやかな美女一人。五挺の駕籠に駕籠舁が以上十人、どや〳〵とついて來た。

眞先の、威儀あり瀟洒なる一客が、其處にのめずつた青年を視て、そして、茫然とした婦二人を見て、

「何うしたい。――果して怪しんだらう……美人が二人、ふと、こんな處に居ると云ふのは、不

思議に凄い、――人間らしくないものなんだから。」

「きやア。」

「あれえ。」

と、驚いて二人が縋る。駕籠屋が一齊に哄と笑ふ。それが、谺をドツと返して、圓髷のも面を隱した。

青年は醉倒れたのではない、氣絕して居たのである。

一行のうちにあつた、私は婦人の一人と共に、其の青年の介抱を引受けた。

懸

香

一

翌日の、あの、物凄い、大風大雨につけても、其の夜の光景が想はれる。

……と間宮は話した……

陰鬱な夜であつた。

胡瓜の蔓が立枯れた、茄子の核が燒ける、田畑も干破れる旱が續いて、それが油旱と云ふのに變ると、眞赤な空に汗の滲む粘々とした雲が湧いて、南を蔽ひ北を塞ぐ。東にも西にも、ソヨとの風もない。時々人じらしな湯氣の小雨が煙のやうにむら〳〵と掛るかと思ふと、赫と破れるばかり照りつけて、砂を煎り、石を煮る。

湧立つばかり、ぐら〳〵と海の波が悶えて動いて、喘ぎ〳〵、白泡の澈を吐く、こんな時を土用波と云ふのである。

五日も六日も續いた。

其の日は午後から暮方に、雨の量が心持多かつただけに、濕氣は猶さら、蒸暑さと云つたらな

い。

瓜に毒あり、草いきれ、月見草の花の大な露も、熱い雫して悄れて居よう。

「遣切れねえや。」

「殺さば殺せ。」

床屋も暇なこと。職人一人、海岸通りの門に立つて、はだけた胸に燃える炎を眞赤に受けつゝ、通がかりの若いものと、ふてくされに宵闇の空を睨んで喚く……炎は小さな百日紅の低い枝に、缺けた土瓶を釣下げて、石油をめら〳〵と燃し立てるので、群る羽蟻を燒くのであるが、彼等の引捲つた脛のあたりに、黑く胡麻を盛つて堆い。

今夜は蟲が夥しい。もう〳〵と立つ油煙の裏に、羽蟲を踏んだ其の職人の脛の毛も、一ツ一ツ燃ゆる火に蠢いて、眞赤な蟻の這ふやうな、其も暑し。

「殺さば殺せか。」

間宮は通掛りに苦笑。近頃は都も町も、村里まで、大方は電燈に成つて、時々洋燈を思出すのも、一つは其香氣の可懷いほどな、嫌でない石油の煙に、さて口鼻を呼吸苦しい思で過ぎた。

其から海へ出る一町ばかり、兩側の松原は、犀川の名産孫太郎の蟲屋が休めば、金魚や金魚も憩ふ、車力も憩へば馬も休み、西洋の婦人も涼傘で行む。日盛にも翠の露の、青い松葉を滴るの

が、恰も古綿の、それさへ厚衾で、天窓から褥氣を被せた。

彼は浴衣の短い裾もへばりつく、汗の足を曳摺つて、海岸の小橋を渡ると、汐入の流は溝の水、蘆の葉のいきれる香に、橋板は乾いた湯殿を踏む。

やがて常夏、月見草、露草の花所で、此の新宿の草の中には、松蟲が集く、と云ふが、なかなか、それ處の沙汰ではない。

乾いた咽喉は、海の音に嚙付いて、海岸へ出たのである。

唯、一層陰慘たるものであつた。

風の死すると云ふ夕凪の潮は、夜に入つて一層重苦しく、恰も銅を溶かして一面の渚に塗附けたとよりは思はれぬ。

打つて擴がるのは海の裂けるのである、寄せては返すのは、浪の沸立つのである。鳴るとも響くともなく、どう〳〵と黑く畝つて、畝つて時々大畝りを投げる、とともに、紫に藍の逆る稻妻を倒したやうな、青い光が渚をまいて、油に注ぐかと爞と燃える。……海は宛然、跪轉悶ゆる火山である。

二

海水浴更衣場と札打つた、濱口の葭簀圍も、恁る折から祭の夜更けた寂しい見世もの、八幡の藪で、五燭ばかりの電燈が蜘蛛の巣を捌くが如く、もじや〳〵と白砂を這ひつゝ照らす、こゝに人間の力で得た光明は、單に此ばかりであるのに、其さへ暗闇の威勢に押伏せられて、却つて我人を裏切つて、明の中に彳むものを、外へ突出す、底意地の惡い影らしい。

が、あかり先だけは、渚の浪が尋常に碎けて白い。無論、一掬の涼味もある事か。旱雲が崩れて疊まつて、明日まで蟠つてまた照つけようとするやうに、むら〳〵と群り累る、其の中に黑い斑のぶよ〳〵と動くのは、時を得顏に海月が躍るのであらう。

「何うだ、人間、狀を見たか。」

で、やつちや、こらさ、と萬燈で燥ぐ。

冥々として黑い海は、中空に築上げた大なる山に似て、脚を立て煽を揚げ、遮るものは岩も草も砂も、微塵に粉にしようとして、紫の牙を嚙む、……浪は毒龍の畝りである。渚の飛沫は幾億の魚の、嘗て人類に虐げられた浮びも遣らぬ怨靈の炎である。

さて、不氣味さは、ものに譬へやうを覺えない。

海原の此の光景を極端な優しいものに較べよう。——恰も暗の夜の紫陽花の花の周圍を、螢が燃えつゝ幽に繞るに髣髴として居るのである。

あれ、晃々と沖が光る。砂白く風清き、月ならましかば、水晶の兎が伴つて走るとも見む、潮に激して逆に立つ波、黒坊主か、大鮪か、海の魔物か、平家蟹か、燐火をどしの鎧を揃へて、

「あら珍らしや如何に義經。」

陸と水との戰に、いま其のいづれか勝敗の決するのは、雲を走る稻妻の表裏反覆、心一つでなければ成らぬ。

其の恐しい光さへ、山の端かけて、沖かけて、大空の底に針の尖ほども顯れず、雲蒸し、風消え、砂も密語を塞いで居る。

天は滅びたのかと思ふと然うでない。風は死んだのかと思ふと非ず。時々ゐみ破れたやうに粒粒と星が覗く、が、赤く黄色に淀んで、あせもが爛れたやうに見える。見えるかとすれば早や暗い。風も忘れたやうに北から吹く、が、海豚が呼吸を吐くやうに、腥くむつと來る、來るかとすれば、そよりともせぬ。

浪は此處を切れ、彼處を打てとてこそ騒げ。射掛ける矢にも、弩にも似て、眞中で白く消え、前後に黒く折れ、颯と折れては、直ちに射、どろ〳〵と消えては忽ち擊つ。

が、渚に碎ければこそよ。音もなく伸したらば、我が大陸は一舐めに舌の尖で舐られよう。岩に角のあるも、峰に襞積のあるも、砂に數あるも、骨身を碎いて潮を防ぐ努力かとも疑はる、。

可恐は暗夜の蒼海である。計り難きは其の海の心である。凄いのは紫陽花の花の周圍を螢が飛ぶやうな景色である。

尤も恁までのことは、此の濱に滅多にない。

が、其の年、土用波の間は、四日五日恁うした趣が毎日毎夜……

つい、其の三四日前の夜の事と聞いた。——

三

「あの浪打際をね、旦那の前だが。」

百姓兼帶の植木屋で、石も叩けば釘も叩く、治平と云ふ親爺が、緣側へ廻つて煙草話。

「鷂の三郎といふね、ひやあ、三浦の大助第一の郎黨と聞えべいが、在方の役雜でがす、小博奕の一つも打つて、しわりごわりと鼻唄で、戸塚通ひをしようと云ふ野郎だがね。渾名の附いた夜網打で、磯端にかじめはねえでも、野郎の影の浪際に、鷂と押立つて居ねえ事はねえだ。

博奕を打つて、鼻唄で、網打てえば、でつぷり肥つた逞しい漢に聞えべいが、可笑しな事は、此が又然うでねえ。青瓢箪のひよろりとした、痩つぽちで脊の高え皺びた野郎、小學校の教員樣が後家に戀煩ひをしたと云ふ容體だでね。お前樣の前だが、ヘッヘッヘッ。眞個は鷂の脚だね、

――形がよ。

右の鵜三郎がお前様、昨日……今日は一昨日だね。其の晩に限つて鵜の鳥の行水だ。はて何故と言はつせえ。濕氣續の土用波だで膝切打掛けるもんだで、ばしやり〳〵一本脛の繩飛をする形で、暗闇の磯を狙ふだあね。腰のびくにや小黑鯛の腹ぴか〳〵する奴さ四五疋ぶら提げて、眞黑な網を尻尾のやうに押立ててね、旦那の前だが。

然うすると、ひやい、目の前一間ばかりの近い處に、何か、ひやい、大え魚の腹かと思ふものが柔かう横に成つて、ふは〳〵と恁う、浮いつ沈みつするだ。

や、浪がしらへ打上げたかと思ふと、右の胴體さ、もろに引銜へッけえ、ぶる〳〵と震ふ手足が見える。わつと見ると、どつと碎けて、眞蒼に成つて潮の擴がる中へ吐出されたやうに成つて、七顚八倒轉がるだ。そりや、背中だ腹だと思ふ間とつてねえ。じや〳〵ッと引いて波の底へ舐込んで、も一つ引銜へようとする處を、鵜三郎は網も何も押放出して、引いて行く波に獅嚙着いて、其の白いものを捩離したわ、抱取つたわで、じやば〳〵と遁上つて、吻と成つて砂濱へ諸膝を支くと、其の身投げだか、溺だか、骸ごと打倒れたと思はつせえ。

鼻の尖に、ふつくり、むつちりとした、ひやい、玉さ洗つたやうな何とも云へねえ乳だ。肩胸のすんなりと脛の伸びた婦人だね。潮を拂うて美しい。

……は分つたけんど、怪我にも身投にも、お前様、旦那の前だが、切端一ッ掛けて居ねえ、爪の尖まで、雪のやうに透通るてえ法はねえ。

魔性だ事は、初手邊から明白だでねえか。

其を、はい。鵜の野郎、竹法螺を吹いて呼ばるまでもねえ。大え聲で喚いたら、濱に人ッ子は居ねえまでも、異人館もあるこんだ。コックや馬丁も駈けて來べいものを、何故だかね、ひやい、右の戀煩ひの髪蓬々てえ顏色で、慌てた目玉ばかりきよろつかいて、見たか、聞いたか猿眞似よ。倒に擔いで水を吐かせる處を、はい、病院の醫師様もどきで、ふつくら胴中へ腰を掛けた。親指の肚で、新粉細工を伸す容體、折鶴の羽へ呼吸さ吹込む鹽梅さ、旦那の前だが、ヘッヘッヘッ。

何、串戲處ではねえ。

其のうちに鵜の野郎、些と心が落着いて、暗夜と潮煙に打暗んだ眼球さ働いて、――澤山遠くでもねえ、直き其の濱の口の海水小屋が薄り朦と映つとるだ、あの光で見ると、――へい。」

其時、鼻の下を横撫でして、息を呑んで少し低聲で、

「其の眞白な婦人の仰向けに成つた咽喉もとから腋の下へと差して、紅絲の染んだ體に、赤い筋が細う、ベッとりと流れるだ。若い叔母も別嬪の從姉妹も持たねえ、呼吸のねえものが、鼻血を垂らすわ、と熟とへい、透いて顏を見ると、何うでえ。」

治平はポンと頸を叩いて、
「首がねえだ。」
間宮は呆れて聞いたのである。

四

親爺は禁呪の九字劃る眞似。
「何と、其の位な事に、へい、魂消ては成りましねえ。まだあるで……鷭の野郎、雲から、すつてんと落ちたほど、腹から辷つて貝殼に尻を突いたと思はつせえ。
壓すので凹んで居た乳の下の鳩尾さ、ふくりと元へ返つただがね、其の首なしの婦人の死骸よ。ずる〳〵と自然に摺出すと、雪が轉がるやうに、暗がりを、白み返つて、浪際を逆に濱の方へさして、すんなり〳〵。
其が、はい、あるべい事か。濱口の右の海水小屋の葭簀張の裏へ辷込むだ。魔ものだね、お前様。沖の波には海月の行燈も燃えるだに、其方へと消えもせうか、人間が點した、お剩に開化の天邊だあ、電燈の光る處へ悠々と納るだ。
やあ是、昔天竺の阿奢世太子は、美女の胴中を切つて餌に刺して、鰐鮫を釣つたと云ふだ。ど

んな異人が鯨を釣る、と鷭の野郎、貝殼を掴んで平伏張つたまんま、半分上つた眼球で見据ゑると、葭簀張の中にロハ臺てえ……恁掛りの附いた細長い椅子があんべいね。
あれへ、漆見たいな髪を捌いた、拔けるほど色の白い、凄いやうな美い女が、姫路の御天守に住んだと云つけえ、華奢な小坂部姫と云ふ姿で、つんとして腰を掛けた、緋の袴ではねえだよ。
それさ、花も雪も一所に絡はる錦繪のやうな片褄を端折つてよ。白い足が、やがて、くろぶしの少と上の處まで見えたと思ふ……野郎、夜の炎天に氷を浴びて頭から震へ上つた。
他でもねえだ。何が、人里を離れた山でなし、島でなし、奥様も、姫様も、潮湯治をさつしやる場所だ。暗夜だとて仔細はねえ。思掛けねえにした處で、ひやい、其の美い女が腰掛けたばかりなら、鷭の野郎と同士に、はい、首なしの死骸に吃驚仰天の夥間だらうでね、それこそよ、眞個に、今度は、きちやうめんな人間の婦の、目をまはらかす處を飛付いて助けもしべいだが、何うでがす、蹴出しに足首が、はい見えたと一所だ、其の足許に、一個、(黒い提灯)があつたのに氣が付いたではねえかね。……え……其の黑い提灯。」……
と云つた。……
此が話の本尊で、鷭の事も實は、(黑い提灯)につけて、治平が間宮に物語つたのである。
……海から上つたとも言ふ、沼から湧いたとも言ふ、土地はじまつてからもつひぞ無い……親

父が六十餘りに成るまで、此の濱で珍しかつたは、一年海豚の大漁があつたのと、正覺坊の雌が、海からぬつと上つて來て、砂地を水掻で引掻いて、卵を產んだあとを、腹でべたん、と壓しながら、青巽人館の唐黍畠まで伸歩行いた事と、夜網の地曳に槍烏賊を盜んだ男が、頭から胸まで墨を流して、曝しものの大笑と、そのくらゐなもので、海の幸は、ひしこ鰯、鯖、小鰺、畠のものは茄子胡瓜。山には松風、朝霞、出汐、引汐、夜と晝。蜑ケ家、茅屋の夕煙、垣の露草、蓼の花。

變つた事は何にも無いのに、今年……然も此の夏に成つてである。……其海からか、沼からか、山か、峰か、谷か、それとも穴から出るのか。村、里、田の畦、小橋の上、崖下、岨路、蘆の中、地藏の前、社の緣、ともすると鬼火の如く、(黑い提灯)が點れて通る。……朦朧として往來する。

見たものは大切で、決して其のまゝ無事では濟まない。目を疾む、熱を煩つた、烈しいのは啞に成つた。が、遠くは然したる害がない。近づいたものほど祟りが酷しい、中にも怪火とともに裳の影、足の所を見たものは、今までのうちに最も激しい、殆ど半死半生だと云ふ。

「それを、お前樣、顏まで見ただ、鷄の野郎、——氣が違ひましただ。……弱つた事には、……乘つたのが濟みましねえ、跨いだのは謝罪りました、……とツて、……聞いて居られねえだ。さうしちや、あたり八方、手を支いて、きよろ〳〵眼で、ひた〳〵と叩頭ばかりするだあね。」

五

「尤も、はい、野郎は其の場で氣絕した。地引の船の見廻りが、夜中にかんてらを點けて磯を步行いて、其が、はい、相撲に投付けられた體に平伏つた鷄三郎を見付けたでね、家へ擔込んだものでがすよ。

一度、正氣づいた、其の夜さり、顚末を喋舌つたつけえ、あけ方、雀の聲もろともに、右の濟みましねえ叩頭をはじめた。三日にも成るが、今もつてだあ、お前樣。」

間宮は半ば信じなかつた。が、こゝに黑い海の、毒龍の如きを視めて、蹠から、そいで引かれさうな砂濱に彳んで……彳む處が、何うやら更衣場を斜違に近い、……其の鷄と云ふのが、怪いものとも知らないで、首のない白裸の妖艶なる軀に、人工呼吸を施した、と餘り隔らない、同じくらゐな場所だと思ふと、信じない話の癖に、何うやら我知らず引着けられた氣がし出す。

唯、人氣勢も何にもない、件の葭簀張の其も破御簾、昔傳へた荒海の障子の透間から、漆の如き黑髮を颯と捌いて、白い顏が差覗いて居さうで成らぬ。

間宮は又、畝を打つて、渚に碎ける眞黑な浪の裾の、怪しく凄く、稻妻を倒して光るのが、何故か一箇の偉なる(黑い提灯)……で、嘘にもせよ、治平の話に、冥々の裏に一種の暗示を與へた

やうにフト考へた。

實際、底知れぬ水の怪異に恐れた彼は、やがて少くとも活きた海の一枚を、眞白き片手に提げて、夜咲く花の幻の、美しい裳を照らす、不可思議なる婦人の威力に逢着すべき運命を持つて居たのである。

後で言はう。

第一、爛れた星、腥い風の、人の喘ぐ溜息に從つて、影を顯すのを見るにつけても、久しく同じ處に居るに堪へない。

「敵か、味方か、たよりない稻妻の射ない前に。」

鹽に濡れつゝ硫黄のやうな、むつとする砂を踏んで、よろ〳〵引返す、と其の脚が、おのづから絲で操らるゝ如く葭簀圍に引寄せられる。

いや、嘘ではない。

蟹が居て番をしさうな、明放した五燭電燈、潮煙に茫と立つ、祕密な見世物小屋を、密と覗かうとして身を躱して、すた〳〵と遁げた。何にもないのに。……

其處が直ぐに海岸通りの入口を、小走りに衝と出る、と兩方が西洋館の、挾んで高い石垣へ、砂を捲いて、海月が追掛けたらしい青白い燃立つ浪が一あふり。馬の前脚搔込む如く、どんと畝

つて、さつと打つ、と彼がはつと思ふ時、

「ほゝゝほゝ。」と、女らしい、媚しい、が、凄い聲が、暗夜の濱に響いたと思ふ……それなり浪の音も聞えなかつた。

間宮は阿彌陀に背負つた麥藁の海水帽を、黑い腕が背後の海からもいで離すばかり、据首に急いで、海岸の橋へ歸る、と最う兩側に人家がある。四角な別莊の灯も映つた。

が、列卒が最う取卷くらしい、墨を流した汐入の小川は、蘆の葉も光る、樹の根も光る、岸を洗ふ石垣も、中を流るゝ泡も光る。

星は一つもない。

間宮は掌で眉を分けて目を擦つた。海の潮を、何時の間にか面に沿びて、その影が散るのであらうと思つたから。

唯、橋杭をむら〳〵と潛つて、黑く濁つた水に、光を刻んで、はしりがきに壽の字を流す、と一掬、水にひらりと亂れて、串の字を崩しながら、川柳の根を、颯と洗ふと、上潮に乘つて、逆に返す一つ一つが、泳いで嚙まんず毒蛇の牙、鱗の如く沈んで輝く。

「小魚の癖にして、まるただらう。」

間宮は苦笑した。

「其の通り。」

と、つうと離れた處で、一尾、翻然と刎ね上つて、水を離れて光つたと思ふと、ばちやん、と消えた。續いて、ぬら〳〵と水を畝らす。

「鰻も居やがる。」

六

此の流と、同一水筋ではあるけれども、間に道路を隔て、洲を隔て、青田、畠、家、雜と一村隔てた池田に、風早橋と云ふ小橋が一つ。鎌倉通ひの道筋で、鐵道の踏切を越した處、左に久木久能谷を控へ、右に、新宿の濱、小坪の岬を展く。今の海岸の橋とは、叔母と姪ぐらゐな緣續きのがある。

暫時すると、間宮は、名をなつかしんで、此の橋の處へ來て居た。

時に、談者のために御注意を願つて置くのは、池田の此の風早橋の——土地には珍しく爰に螢が多いので螢橋とも名づける——此あたりが、特に黑い提灯の逍遙する、魔の通ふ欄干つきの渡殿だと風說する事である。

彼は然し、はじめて來たのではない、豫て此の邊の地理を知つて居た。

處で、今しがた可恐しい海の模樣に一怯して引返した、あの海岸橋のうへから覗いた……黑い水に、波を乘つて追つて來て、我を嘲り嬲つたやうな、小魚の燃ゆる青い火が、壽の字は知らず、一度、串と云ふ字をはしり書して、ざつと崩れて、光りつゝ消えた事を云つた……其の時にも、何故か、此の橋に來て見たくてならなかつた。眞は避け憚るべきであつたかも知れぬ。

不斷から、橋の邊に一ケ處、も一つ山の根を入つて、柏原へ行く途中に一ケ處、水たまりの用水が四角な池に成つて、それを小川の貫いて流るゝ形が、ふと串の字形によく似た、と思つて居たから……御祓の繪とも言はば言はれる。

橋に近い松蔭の池は小さいが、次のは蘆、薄をめぐらす、村の小兒は連立つて泳ぐくらゐ、奧にはもつと大なるを、四五ケ處湛へると聞くが、其は知らない。……潮は此處までは最うさゝぬ。ために螢が、稻葉に露を置添ふる、田の畔にも豆の莖にも、松葉にも。

涼しさ、涼しさよりは寧ろ冷たさ、冷たさも餘所に較べて、風早橋が一番であつた。

然りながら、當夜の蒸暑さは、なか〳〵以て場所によつて凌げるやうな、生優しいものではなかつた。剩へ、昨夜の事——藤澤通ひの駄賃馬が、鎌倉の方から夜更けに戻つて、馬士が螢橋を渡切る、と馬は一脚板に付けた、其時、ぽッと目前に點れたのは黑い提灯。と見たが疾いか、馬はヒイ、ンと嘶いて、棹立になるや否や、低い欄干を一狂ひして、橋下の淀みに嵌つて死んだ、

と來がけに氷店で、また新しく聞いたのである。

話は一寸戻る。先刻橋を渡つて、松原を引返した時、床屋は既う店を鎖したが、裏を開けて涼んで居よう、暑さに呻くやうに尺八を吹くのが聞えて、路傍に釣つたまゝの、土瓶の火は消えたけれども、まだ白い煙を噴く。下に百日紅の花が散つたやうに、油煙の餘燼か、羽蟲の羽の焦げたのか、陰氣に點々と赤く散つた。

然るにても、海には久しく居たと思ふ。

……角に一軒、氷屋があつて、まだ店を開けて居たが、軒に點した水提灯の波も、思ひなしか、凄くて黑い。……

店頭に、恰も土で揑ちたのが、腰から下は海鼠の如く溶けかゝつた、暑さの餘りの土偶三個、氷もとける湯氣の中に、渾沌として素裸の男が二人、女中を對手に。——

「可厭な釣臺が通るだ。」

「また、黑い提灯だんべい。」

蒼い脚がひよろ〳〵と、提灯で砂を黃色にして、さし荷ひのやうに、それは田越の道を行く。

「今のは女でねえかね。」

「何、女だとて容赦しべい。」

「お前らも迎に來るだ。」

「きやつ！」

間宮が、其處へ、

「姉さん、一寸御免よ。」

七

前途が餘りたよりない、池田は暗夜の厚衾、木の葉の蚊帳を透く風もない。線路の枕木も汗を絞る、踏切から最う歸らうとした。

心持もよくなかつた。一つ盛上つて目の前に横はる其の踏切の、恰も難波船の底に浮いたやう、夜陰に忌はしく見えるのも、何うやら人界と、他境の區域であるらしい。

間宮は、番小屋の窓を睨んで、ガチンと仕切をされたやうに、浴衣で、帽を背負つて一人立つた。

其處へ、草の土手に松明の數を揃へて、振り閃めかす事花火の如く、紋着羽織、袴、足袋、職工服も中に交つて、

「六根清淨。」——高らかに、勢の足を輕く刻んで、すた〳〵と來た一行は、少なからず彼の勇

氣を鼓舞した。
「戸隱樣の神酒が戻つた。」
「それ、雨乞のお水が來た。」
閉めた雨戸から女房が顯れ、垣根から娘が出、小兒も巣から轉げて走る、路傍なる農家の面々。
「めでたうござんす。」
「御苦勞にござんす。」
聲を合せて、
「萬歳。」と火を振ふ。
「六根清淨。」
早使の雨乞人は、眞中に唯一人、滿面に朱を灌いだ、据眼に成つて居る。白木綿の後顱卷、頂く御幣を筈高にしやんと負ひ、白衣の胸に、御水の壺を兩手に捧げて、汽車はあるが越の戸隱、上下を一眠りもしないで、歸つて、寸時も疾くで、停車場の近道を、出迎の人數に守護せられて、此の土手を突切つて來たのである。
「六根清淨。」
一行は新宿さして——

あはれ、奇特には、天に銀河が感應したか、と踏切の道が薄明るい。
間宮はずつと突切つた。いまので、太く陽氣に代つた事は……
「はゝあ藤澤通ひだな、人間だと頬被りで、矢藏と云ふのだ。」
螢が一ツすつと來て、田から路を切つて山の腰へ、すい〳〵と青い絲を引いて行くのを見つゝ、仰向いて獨りで笑つたのである。
あとで考へると些と怪しい。
池田の青田は螢の影、水もちら〳〵碧い露。
「それ、美しい遊女たちが、可愛い行燈を、稲の葉に灯して待つ……白露に鐵漿つけて、紅さして……
成程、土手から通ふわけだ。
あれ又スーツと畦から來た。すらりと草から飛ぶのがある。それ水淺葱の媚めいた褄はら〳〵と……女は美しい褄を捌く、野郎は龜覗きの手拭だな。
待て、しかし、宿場ぢやあるまい。山の崖の松の葉越に、寂しい、細い星が留つた。二つ三つ、それも螢だ。松の位の太夫職と云ふのであらう。
稲葉、淺香、阿古屋、岩越、久木、久能谷……新宿、小坪は……不可いな。吉野、初瀬、薄雲、

高尾、恁うした處は仙臺様だ。」

と、有らう事か、橋の欄干に反つて、彼は海水帽で胸を煽いだ。

忘れては成らぬ、黒い提灯に呪はれて、馬の落ちたのは昨夜である。

……彼は其を聞いた、と同時に、いつか、村のものが橋の下で、尤も日中ではあつたが――破れ障子の骨を洗つて居た事も見たのであつた。

八

鎌倉街道を提灯が二つ三つ。

爺、婆、女房七八人、ぞろ〳〵と橋に來懸つたのは、近まはりの念佛講中、教化に呼ばれた戻らしい。

此の又陰氣さ。孰れ衆生も、夜氣に當つて、じめ〳〵となり、釣臺に着いたのを思出す、青い脚やら、鼠の脚布。――よた〳〵……亡者の辿るが如し。

「お難有や、難有や。」

「難有や。」

「五穀成就、暑うござる。」

「一雨ほしいなう。」

「甘露法雨ぢや。」

と、ぶつ〳〵獨言のやうに各自が饒舌つて來て、一人、によッと留り、

「おゝ、風早橋。」

「無常迅速とお說きなされた。」

「お互に彌陀如來の御催促を忘れては成りませぬ。」

「一風吹けばお迎へぞえ。」と、竹の杖を肩越について、皺手をぐい、と屈腰に握つた、だぶ〳〵と黄色に膨れて額のぬけ上つた婆が、通りすがりに胸を伸して、のそりと反りつゝ、間宮の顏を、黑い額で、じろりと仰向けに睨んで行く。

雨乞とは打つて變つて、言ふばかりない其の不氣味さは、年寄の後生氣から、危い橋に立つものに、心附けをしたと思はれぬこともないが、こんな婆に救はれるくらゐなら、何かは知らず、其の黑い提灯に取殺される方が增だ、と思ふ。……間宮は引入れられさうに可厭な氣がして……心が沈んで懵として目が暗く成る。

漆のやうな水田をかけて、橋下の流の緣に、濡增る螢の影は、薄が茂つて小川に捌く、黑髮に、翡翠玉を鏤めた風情である。

唯見る間に、揃つて、殆ど一齊に脈を留めて光を消す。

「ぎや、ぎや、ぎやッ、ぎや、ぎや、ぎやッ、ぎやぎやぎやッ。」

耳許に蛙の聲。

あゝ、酒肥りのした疣大盡に狙はれて、淺葱の蹴出しの遊女たち、草の店に顰んだな、と思ふ

ノち、浮世を果敢なさうに、あはれに點るゝ。

「ぎやッ、ぎやッ、ぎやッ。」

ほうと又消えた。

橋の上に蛙が鳴く、足許が、と見れば目の前で、——まさか、此の口で鳴いたのではなからう

——小相撲の如く横肥りに肥つた、脊のづんぐりとした漢が、大肌脱の頸へ手拭を捲いて、暗に

のそりと突立つたり。

濁聲のドスを入れて、

「何をしとるだあえ。」

間宮は返事せず、素知らぬ振した。

が、瓜盗人を捕へむとて、長者の下男が力んだ體で、

「あゝん、何しとるちばあ、これ。」

「私か。」

「おゝ、お前等よ。」

「涼んで居ては惡いのか。」

可厭な奴だ、とむしやくしやで云放つ。

「何が、納涼だんべい、お前等、海水浴の智慧者面して、黑い提灯を見屆けに來たんべい。」

扨は、魔性の槍持が、露拂ひに人を追ふ、と一寸氣にした。が然うでない。

「へゝん、村方に人のねえやうに出洒張つて、へい、止してくらつせえ。正體は俺が見屆けたで、

俺が手柄に生捕るだ。多勢に難儀をさせた、蛇體めよ。」

「何、蛇か。」

と、釣込まれて、うつかり訊いた。——蛇體——と云ふ。……

九

奴は嘲笑つた呼吸を投げて、

「何を空惚けるだえ、藝もねえ。池田にも久能谷にも提灯を點けて歩行く蛇と云ふが、日本中何

處にあるだよ。村方のものだ思うて馬鹿にするなえ、柏原の權次郎だぞ。

と、尻を捲つて、凡そ一抱もあらう股を、もり〳〵と引搔きながら、
「黒提灯の正體な、若い別嬪だと云ふこと嗅着けて、お前等、汝が手に生捉るべい思うて來ただ事は風體で睨んだぞ。好色野郎、然うは行かねえ、俺が三日五日附廻いて、生命懸けで見屆けた蛇體だで、世間の人助け、村のもんの復仇にも、引裂かうと、のたくらさうと俺が勝手だ、指のさし人もねえ。今夜此からぶつ占める、で、お前等、へい、對手の形が別嬪だ云ふ處で邪魔をしてはなんねえぞ。可えか、あん、分つたか。」
と聲も腹も圖太く極着けるのに、憤然として、
「何だ、お前は。」と遣返した。
が、ぎよつとしたも道理こそ。
「くわッ、くわら、くわら、くわら〳〵〳〵。」
唐突に蛙の高鳴、腹を突出し、咽喉佛を仰向狀に搖つて、高聲を絞ると、胸をドンと打つて、
「こんなもんだ。此の餌で蛇體を釣るだ。お前等が目の屆かねえ谷戸中へ引込んで料理るべい。何んなもんだか、ばあ、と吐け。とぼん、として居ろ、へゝん。」
と笑つて、膏の蒸れた汗の臭氣を芬とさして、腕を突出し、据腰に成つて、間宮の前をぬうと拔ける、と小橋を踏切の方へ渡越す。

其處で跫音が止んだ、と思ふと……
「や、出たな。」と勢つて、ばさ〳〵と草を踏む音。やがて山の根の樹立に隱れた。
――田の畦らしい、松原一ッ遙かに離れて、流の上とも見えるあたりに、沖の小船を彩つたやうな、底の長みを持つ薄暗い灯が一つ――螢の光だと思つた。
が、蛇體だと云ふ、別嬪だと云ふ、引剝ぐ、と云ふ、のたくらすと云ふ。今の奴の言種と、駈出したらしい勢に引かれて、間宮もつか〳〵と小走りに成つた。方向は變へた。此方は橋向うから街道を横に、稍幅のある畦道を切つて入る。……丁度田畠を中に隔てて、谷戸口を行つた其の權次と云ふのと、眞中に挾んで、灯を目當にした事に成る。
所謂、(黒い提灯)ではよもあるまい、夜氣に沈み、靄に浮いて、人丈の顏の邊が、と見れば足より低い。來るかと見ればあとへ引き、行くかとすれば前に進む、一所に留るやうでもあり、ふはふはと搖れても見える。
それが、小橋からの間隔を、やがて半ば彼が進んで、灯も稍大ぶりに成りさうに思はれる處に成ると、高いも、低いも、縱にも、横にも、跡方もなくふつと消えた。
時に、山は大く、田は廣く、渺としてたよりなく成つて、今まで灯れつ、と見るあたりに、唯、聞ゆるのは蛙の聲。あの、眞似をする男も交るか、時節を過ぎたに遙に集く。

這奴の血相、懸念に堪へぬが、此の寂寞たる中に、他に蟲の聲さへ聞えぬのは、手籠になぞされたのではあるまい、怪しき姿は消えたのであらう。

螢が來る、螢が來る。續いて二つ、すら〳〵と空を飛んで、我を歸れ、と導いて、幽な絲を投げて行く。

間宮は橋の方へ引返した。

十

青田一枚、山の根の方へ隔てて、あの、池のあるあたり、間宮が畦道を歸りつゝ見た、ものの、其の時の姿ばかり、凄くも艶に、綺麗な色を嘗て知らぬ。

雖然、目の留つたのは裾のみである。其の裾は、はら〳〵と濡色の草の翠に、淡く淺葱を重ね映して、薄い灯に、雪にも紛ふ褄先を捌いて行く。

あゝ、間宮は遂に視た。

(黒い提灯)ではない。願くは濃い紫の燈籠と言はう。菱形に膨りと組んで、一面に紺土砂なんどで包んだやうに、上が暗く、底のやゝ明いのは、大なる桔梗の莟にもまがふ、遙に舷の形に見えたのは此である。

この燈籠の影は、淺く暗いために、螢の青い光を消さぬ。羅なるべし、袖摺れに、靡く蘆の葉、薄の葉に、靡く褄は、草を宿し、露を散らし、また、螢の青い影を映す。

其の褄の、葉と葉としつとり、白脛に搦んで、細く徑を移る毎に、指の數ほど、螢が薄へ、螢が蘆へ、すら〳〵と灯れて散る。散るが、深くもこぼれず、高くも飛ばず、白露の轉ぶが如く、水際に戯るゝ。

其處に、上搔を開く褄、下搔を捌く裳は、蘆間に寄する渚の浪。

地摺れに灯した燈籠は、影も、光も、蒼海原を手鞠の如く取つて提げしに似たらずや。

唯思ふと、一種の靈威に、彼は、被つて居た海水帽を脇に挾んで、敬意を表せずには居られなかつた。

其の燈籠は浪に點れて、蘆を打ちつゝ、而して草の小徑を行く。一度、最も近づいた時、池の面が颯と映つて、水の輪を捲く杭も見えた。と、松の樹の茂つた中に、裳もろとも灯が弗と消える。

遠方に蛙の聲々。

燈籠持てる人の、其の餘波とも見えたのは、山の根を、一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、不思議にも、一尺ばかり同じ間を隔てて、ふら〳〵と街道の方へ行く螢で——行列なして、青く點してふはり

ふはりと辿り行く。

彼は吹きもしない風に、ふら〳〵と案山子のやうに成つて、裟婆の遊里を視る螢橋の上へ急いで戻つた。

其處で視めても、四ツ續いた山の根の螢は、まだ其の列を崩さないで、却つて、近く大きく映る。

「姫様、お駕籠か。――いや、土手通ひの提灯だ――人形の燐火――」

と思ふ途端に、其の眞先の一箇が、中空に弧を描いて、山を切つて、すつと飛びつゝ、ふはりと間宮の頭の上。

眉に星を塗られた氣がして、顏を振つて、足を釣られて仰向くうちに、其の螢は、編目に濡箔を置いて、帽子の裏へ、ひらりと留る。

彼は持直して、熟と視た。

草の家の遊女たちは、青い蹴出しを、ひら〳〵と、其處此處に姿を見せたが、其の中から別に一つ――すい〳〵と優しく來て、すつと又麥藁の緣に留つて、四五寸、するりと這ふうちに、前の螢と一所に成つて、もつれて一つに成つて、眞直に衝と立つ、と一呼吸、どの螢もはつと消えて、四邊は一面に水の匂ひ。潮風がぶく〳〵と淀むやうに吹いて來て、幽に颯と鳴るのは彼方の

松風、池のあたりの梢が一搖れ、搖れたと見るのが、蓬に黑髮を捌いたやうな、其の枝透いて高い處に、恰も葉がくれの明星の如き大なる光を架けたは、影一つ、螢である。

「彼處へ行つたか、誘合つて、」

うつかり落して、足許に轉がつた麥藁帽子に心付いて、俯向いて瞳を返す。――

「誘ひに來たんですわね。」

脊筋を氷の撫でるが如き、沈んだが涼い聲。

間宮は汗も魂も一齊に引込んだ。

其處に、床几には丁度持つて來いの、低い欄干に褄を深く、細り掛けた帶腰の柳を透かして、直に橋板に黑い提灯。

十一

膚も透くやう、羅の紺地を着た、洗髮の櫛卷で、すつきり鼻筋の通つたのが、切れた眦を伏目に、優しい若い眉して、俯向いて、同じ其麥藁を熟と視めて居たではないか。

間宮は頭から窘んだが、

「貴女は？」

「此のあたりのものですわ。……まあ、失禮な、お狂言の言葉のやうでございますね。」
「むゝゝ。」
とばかり、呆れて顏を瞻ると、目の痛いほど艶である。
「誰方です。」
「遊女です、女郎です、辻君とやらなんです、そして螢の化ものです。」
呀！　狐は人の心を讀む。
「宿場の、――草の戸で男を引きます。それでも買手がございませんから、灯を點して、矢張り今の一つの螢のやうに男を誘ひに來るんです。身を焦すッて言ひますから、あやかつて眞似をして、褄の色まで、燈籠まで。ですが、誰も對手に成つてはくれません。」
「貴女。」
と、屹と向直つた、彼は蛙鳴の權次を思つた。
「對手に成つたら何うします。」
「えゝ、すぐに抱かれて寢ますわ。そのために、こんな奇異い服裝をして……暗夜を焦れて出るんですもの。」
間宮は此まで聞いて胴が据つた。卷煙草を拔いて、

「火を一つ貸して下さい。」と、黑い提灯に指を差した。爪もしびれず、脈も留らぬ。
「あれ、一寸。」
袖で娘らしく庇つて遮る。彼は、更めて吃驚した。
「不可ませんか。」――毒か知らん、それとも……
「否、お易い事ですけれど、お煙草をめし上る御役には立ちますまい。」
「何故です、貴女。」
「焦れて燃えて居りますものを、煙になすつちや酷い事、可哀相ぢやありませんか。眞個に螢の化けたのです。お煙草には點きますまいと思ひます。」
「失禮しました。」
「まあ、待つて頂戴、貴方。折角ですから、火の點きますやうに私がお禁厭をして差上げませう。ほゝゝ芝居の魔術がかりで。」
と向直ると、袖を投げたが兩手を懷、げつそりした婀娜な姿、と見ると、薄りと衣紋が開けて、すッと、立てた細い指。白い小蛇の鎌首が覗いたやうで、思ひも掛けず悚然した。
が、透いた膚の美しさ、乳を流したやうである。
蠟燭はしかし、鱗の臭氣もしなかつた。吸つた煙草は敢て澁くも苦くもなくて、何時喫むより

も甘かつた。
「點いたでせう、ちゝんぷい〳〵、おほゝゝゝ。」
瑩の印を解いた手で、そのまゝ、笑ひながら、黑髮のほつれを解く、と小指を反らして、一寸簪を突込んだ。
間宮は、ずつと身を引いて、ものをも言はず、たて續けて吹かして居る。
「貴方、……私にも飲まして下さい。」
「煙草を。」
「えゝ。」
「いや、それこそお易い御用です。」
「否、」
と、投げるやうに肩を振つた、が得も言はれない嬌態に成り、
「其のあがつて在らつしやるのを。」
「や、飲みさしを、」
「頂きたいのよ。」
「しかし、しかし此は……」

「不可いんですか、ぢや返して下さい。火は私がお貸し申したんですから、其を返して頂きますわ。」
「おあがんなさい。何とも、是非に及びません……」
婦人は輕く指に挾んで、
「エヂプトですね。」
「到來ものです。」と、我ながら苦笑する。
「あゝ、おいしい。御無理を願つて——貴方はお嫌ひなさるけれど、あの逆緣とやらですが、吸つけ煙草は、遊君のお儀式だつて云ふぢやありませんか。」

十二

「ですが、こんな結構なお煙草だと、お相方は薄雲、高尾、吉野、初瀨でなくては不可ませんねえ。」
間宮は再び怯かされた。
「濟みません……私なぞは、葛の葉、更科、姥捨ですわ。」
と自由事を言ひながら、欄干に水際立つて、するりと拔けさうな、淺葱鹿子の扱帶。帶は寬い

が、衣紋正しく、燈籠の灯に柳のやうな櫛卷の幻を映して、長閑さうに田の面を見渡し、
「お友達は一寸皆さん、おしけに成つた……羨しい事、……あの、貴方もおやすみなさいませんか。」
間宮は身繕ひを、きりゝとして、襟を端正と合せながら、
「私は無事なうちに失禮します。……貴方もお氣をなすつていらつしやい。」
何故か、しんみりと成つて云へば、しんみりと頷いて、
「は……い。」
「こんな晩は、お身體によくありません。」
「御深切に……氣を付けました處で、身體に惡うござんすたつて、婦が、たかが、宿場女郎ぢやありませんか。身體は疾に惡いんです。途中で惡戯をされましたつて、畢竟それはお客ですもの。私は其を捜して歩行いて居ますんです。……恁う云ひますのを、すねるの、曲るのと思はないで下さいまし、串戯にも、誰も介意つてくれるものは無いんですから。……あれを御覽なさいましな。」
と、空を教へるやうに云つた。撓つて細い人指ゆびを、欄干越に、紫の綠の絲を引いて指されたのは、彼方の松の葉の中に、同じ所に、今も輝く……星かと思ふ大なる螢の光である。

恁う相對して行んだ、はじめから、此の婦人と、其光は、何か結ばつたものが有るやうに思はれた。
「ね、彼處にもお仲間が一つ居ます。三階の部屋に賣殘つて、思惱んで居る可哀相なものです。あの光の、他より一倍强いのは、焦るゝ思ひが切なさゆゑで、身の果報ではありません。私は毎晩見ます、そして、可哀相でなりません、一つ離れて、骨の折れた松の梢で、一生懸命に青い灯を點して、どんなに男戀しいか、妻可懷いか知れません。……ひれふる山も思はれます、佐用姫のやうな螢ですね。」
しめやかに云つて、俯向いたが、膚も筋も萎々と成つて、衣に堪へない風情であつた。
——一吹き吹けばお迎ひぞえ——
むゝ、あの婆々に救はれようより、可し、美女に殺されよう。
「貴女、お別れに其の煙草を下さい。」
「えゝ。」
「今度は私が、御返濟を强求るんです。」
「否、お別れぢや私は可厭です。」
「ですが、」

「それは、私はお貸し申した火をお返し下さいッて御無理を申しました。煙草は貴方にお返しいたさなければ成りません。……けれど、螢に手向けたと思つて下さい、露より果敢なく消えるんですもの。」

「では、私は別れますまい。」

「そして。」

「歸れと仰有るまで傍に居ませう。」

「それぢやあ、貴方にお願ひがござんすのです。何うぞ、あの前方の松ケ枝の螢の許まで、御一所に入らして下さいませんか。」

覺悟はしたが、果せる哉。

「……實は、あの螢に誓ひました、――五日も、十日も、毎晩、同じ光が同じ所に灯れて居ます。身に引比べて、餘り果敢なく可哀なのを、思遣つた處から。

――私の魂は、屹とお前と一所に居る――

ですから、魂は彼處にあります。彼が私の魂なんです。――空蟬に灯したやうな、お氣味の悪い燈ですが、さ、……道しるべをいたしませう。」

十三

草を分けつゝ、足許の迚々しさは、燈籠の影に、靑く且つ白く、凄く艶なる浪に卷かれて、黑い海を踏んで唯二人、沖を渡る夢心地がした。が、肩を摺れ〳〵に、なよ〳〵と、しどけない姿を投掛けられて通るのは、離れの閨に導かれて、月さす桔梗、女郎花、築山を繞る胸のときめきであつた。

螢が灯す松影の窓。

天秤くらふな、此の化されものめが！

「褄をお取んなさい、濡れますから。」

「貴女こそ。」

「私は鐵の如き脛です。」

と云ふ下から、棒のやうに立竦む。

「何うなすつたの。」

「此の際申しては、龍宮で月末の勘定をするやうですが、草深で、蛇、蛇が、實は……」と、言ふ。

「あれ、蛇がお嫌ひ……大丈夫、私が居ますから。」
間宮は猛然と思起した――蛇體の事――
右手を遙かに、屏風を繞らす山の陰から、立樹を越して、蛙の聲、閨を守宮が覗くやうに、
「くわつ、くわつ〳〵〳〵くわつ〳〵。」と高らかに冴えて響く。
「あゝ、成りたけ燈籠の灯をお包みなさい。此を目標にして、貴女に附纏ふものが居ります。」
「は、亭主ですか。」
「え……」
「肥つた疣蛙の事でせう。」
と澄まして云ふ。白い顏が燈籠に、唇の紅が凄い。
「貴女。」
と、一つ言を切つて、
「如何に、何が何でも、私に此際、御主人の事を云ふのは酷い。」
「まあ、貴方は、私と恁うして、主人に成る、御亭主におなんなさるつもりなの。それはお止しなさいまし。世間の亭主と云ふものは、自分の方から强ひて望んだ戀女房でも、其の女房が一旦不幸で、人交りの出來ない病氣に成ると、片田舍の別莊へ、お慈悲の牢屋で押籠めて、それも、

たてすごしに一生を過させでもする事ですか！
空間を貸させて、男を近づけ、人間の生身の情ない、淺ましい身體の慾の弱味を餌に、道ならぬ事をさせるやうな仕向けにして、不義、不品行な迷に落ちれば、それを言立てに離緣をしよう。野にも、山にも、良人の家のほかには行く所のない果敢いものを、靑竹の杖に縋らしても追出す企圖をするものなんです。そんなのが亭主ですとさ。
そんなものより、いろにおなんなさいまし、ほゝほゝゝ。」
と花やかに笑ひながら、眦が逆立つた。が、はつと草によろめいた、見よ。紅鼻緒のゆひつけ草履、足には踊子がするやうな、白い三つこはぜを深く穿く。
間宮は針に呪はれた、美しい毒蛇を憐んだ。
「危い、お手を。」
「否、いろと思ひ、情夫、と思へば、お庇ひ申さねば成りません。私は惡いことを澤山しました。罪を造りました。此は腐つた女郎です。呪はれた蛇です、爛れた鱗には毒があります、觸つては不可ません。
此が婦の眞實です。
あゝ、口づけした此の煙草を、のまうと云つて下さいました、私は嬉しうございました。」

と涙ぐんで、ふと立ちしが、

「お煙草は、私が、貴方の吸口まで嚙みました。」

と振向いて莞爾した。唇の莟の、薄靄に開かむとする面影を見て、間宮は恍惚と我を忘れた。

我はこゝに、先刻に一面の青田を隔てて、魔界か、神仙の境かと見た、池に近く、同じ人とともに同じ色に包まれて、同じ艶の裡に立つのである。

「來ました――けれども、お約束いたしたお煙草は、それですから、最うお返し申されません、故と差上げません。

お歸りなさいますか――貴方何うなさいます、否、否、あれ、不可ません。」

「せめて胸を、胸と胸を！」

「否、否、」

と、身を飜して、唯氣を籠めて片褄あげた、が、蔽はれかゝるやうに川に望んで、すつくと立つ……五尺ばかり一幅の狹い流が、用水を池から落す。……此の向うに、松が一むら、就中高い樹の、梢にあり〳〵と其の螢の影。

「毎晩、毎晩、あの螢と一所に、私は夜を明かして此處に居ます。魂の許へ歸る、夢路を辿るやうな藻脫の此の身は、宙を行くもおんなじで、小さな此の流などは、あるとも知らずに歩行きま

した。けれども……病氣を御存じの上にも、遁走りもなさらないので、胸を抱かうと云つて下さいます、貴方の前では、こんな姿も、形の亂れるのが恥かしくつて、褄を廣くは跨げもしません。

……

不便と思つて下さいまし、……女は然うしたものですのに！……」

と、番へた矢をば外したやうに、ふつと消ゆるかと胸が低く、姿は地に裳して、草に支へた手は白し、涙は散つて螢の數、蠟燭の灯は蒼ざめた。

間宮は拳をしめ足摺した、氣休め、なんど、受入るべき婦人でない。

「夜が明けまして、御緣があつたら、またお目にかゝりませう……私は洲の松へ參ります、魂に歸ります。優しい方が在らつしやると、此の小川が飛べませんから。」

いざ、とて道を照すやうに、やゝ持翳した燈籠は、人と我とを境する、黑い波に似て幽に輝く。

不思議や、我が退くに從うて、此の灯次第に高く成りつゝ、……松を傳うて、螢に近く、朦朧として上るを見て、彼は一種の龍燈を感じた。

夜をまんじりともしないで、明星の消ゆるとともに、洲の松を、再び訪うた時を聞け

婦は高い松へ、幹を膝に乘るやうに、姿をなぞへに、羅の褄の下前も亂さず、蹴出しの淺葱縮緬も、秋の水の如く靜まり返つて、葉の數よりも千筋の黑髮、そよ〳〵と風のまゝ、小枝の股に

爪先を反らし、大枝に頬杖して、世を呪ふ目を眠つた。鬢の毛の亂れは颯と、面は梢より高く兩の瞼は葉よりも蒼い。足くびを一卷して、其の幹の半ばから、ずる〳〵地に五六尺、鎌首を、つきんと擡げて、婦の爪尖をぺろ〳〵と嘗めて居たのは、重き、大なる青い蛇。

唯見ると、濡色の洲の蘆を、楯に、二側、三側、陣を備へて、一齊に紅の剪刀を揚げたは、夥多の蟹で、朝靄に虹の染むが如く、さつと音を立てて犇々と進むと、蛇は、足を舐める舌を逆に返して、鎌首を宙に卷き、下ざまに磕と睨む、と、蟹は、ずつと引く。蟹が引くと、又舐める、一進、一退。夥多す。且つ其處に行くまでの畦路を踏んだ時、大粒の雨の注ぐが如く、幾百ともなき蛙の數の蝗より繁く飛んで、遁げつゝ騒ぐのに、間宮は既に一驚を吃して居たのであつた。

松に近い水の中に、臀を埋んで、腸の如く洟を長く垂しながら、腹を露出、踞んだ大蝦蟆の形で死んで居たのは、蛙鳴の權次郎で。此が諸肱に抱込んだのは、首のない、裸身の女。それは精巧の縫、恰も滑かに鑄たるが如く、また美しく刻んだ白蠟に紛ふ護謨の身衣である、(――いつも婦人が身を鎧つた――)足には爪先さへ拵へたが、癲病にたゞれた婦の足に指はなかつた。三鞐の足袋も然ることよ、身衣の胸を合す處に、一點、縷の絲の紅がある。

村中駈付けた時、渠等が寄らむとしつゝ、蛇に驚いた形は、いづれも蟹のやうであつた、灰色の。――で、誰も婦が死んだとは思はない、あれ〳〵御新造が、松に寢て假睡をして居るのだ、

と言つた。

坂東二番、三浦郡久能谷、岩殿寺觀世音、四萬六千日の夜、聞書の……此の記。

白金之繪圖

一

片側は空も曇つて、今にも一村雨來さうに見える、日中も薄暗い森續きに、畝り〳〵遙々と黑い柵を繞らした火藥庫の裏通、寂しい處をとぼ〳〵と一人通る。

「はあ、此なればこそ可けれ、聞くも可恐しげな煙硝庫が、カラ〳〵として燥いで、日が當つては大事ぢや。」

と世に疎さうな獨言。

大分日燒けのした顏色で、帽子を被らず、手拭を疊んで頭に載せ、半開きの白扇を額に翳した……一方雜樹交りに干潟のやうな廣々とした畑がある。瓜は作らぬが近まはりに番小屋も見えず、稻が無ければ山田守る僧都もおはさぬ。

雲から投出したやうな遣放しの空地に、西へ廻つた日の赤々と射す中に、大根の葉の彼方此方に青々と伸びたを視めて、

「扨て世はめでたい、豐年の秋ぢや、つまみ菜もこれ太根に成つたよ。」

と、一つ腰を伸して、杖がはりの繻子張の蝙蝠傘の柄に、何の禁厭やら烏瓜の眞赤な實、藍、萌黃とも五つばかり、蔓ながらぶらりと提げて、コツンと支いて、面長で、人柄な、頤の細いのが、鼻の下を尙ほ伸して、もう一息、兀の頂邊へ扇子を翳して、

「いや、見失うては成らぬぞ、あの、綠青色した鳶が目當ぢや。」

で、白足袋に穿込んだ日和下駄、コト〳〵と歩行き出す。

年齡六十に餘る、鼠と黑の萬筋の袷に黑の三ツ紋の羽織、折目はきちんと正しいが、色のやゝ褪せたを着、焦茶の織ものの帶を胴ぶくれに、懷大きく、腰下りに締めた、顏は瘠せた、が、目じしの落ちない、鼻筋の通つたお爺さん。

眼鏡はありませんか。綠青色の鳶だと言ふ、それは聖心女子院とか稱ふる女學校の屋根に立つた避雷針の矢の根である。

尤も鳥居數は潛つても、世智に長けては居さうにない。

此處に廻つて來る途中、三光坂を上つた處で、恁う云つて路を尋ねた……

「率爾ながら、些ともものを、些ともものを。」

問はれたのは、ふらんねるの茶色なのに、白縮緬の兵兒帶を締めた髭の有る人だから、事が手輕に行かない。——但し大きな海軍帽を仰向けに被せた二歲ぐらゐの男の兒を載せた乳母車を曳

いて、其の坂路を横押に押してニタ〳〵と笑ひながら歩行いて居たから、親子の情愛は御存じであらうけれども、他人に路を訊かれて喜んで教へるやうな江戸兒ではない。

默然で、眉と髭と、面中の威嚴を緊張せしめる。

老人もう一倍腰を屈めて、

「えい、此の邊に聖人と申す學校がござりまする筈で。」

「知らん。」と、苦い顏で極附けるやうに云つた。

「はッ、此は〳〵御無禮至極な儀を、實に御歩を留めました。」

がた〳〵と下りかゝる大八車を、ひよいと避けて、挨拶に外した手拭も被らず、其のまゝ、とぼんと行く。頭の法體に對しても、餘り冷淡だつたのが氣の毒に成つたのか、

「あゝ聖心女學校ではないのかい、それなら有ッぢやね。

「や、女子の學校？」

「然うですッ。そして聖人ではない、聖心、心ですが。」

「いかさま、然うもござりませう。實は先達て通掛りに見ました。聖、何とやらある故に、聖人と覺えました。いや、老人粗忽千萬。」

と照れたやうに其の頭をぴたり……と云つた爺樣なのである。

二

其の女學校の門を通過ぎた處に、以前は草鞋でも振ら下げて賣つたらう。葭簀張ながら二坪ばかり圍を取つた茶店が一張。片側に立樹の茂つた空地の森を風情にして、如法の婆さんが煮ばなを商ふ。これは無くては成るまい。あの、火藥庫を前途にして目黑へ通ふ赤い道は、恁る秋の日も見るからに暑くるしく、並木の松が欲しさうであるから。

老人は通りがかりに此を見ると、きちんと疊んだ手拭で額の汗を拭きながら、端の方の床几に掛けた。

「御免なさいよ。」

「はい〳〵、結構なお日和でございます。」

「然れば……ぢやが、歩行くには些と陽氣過ぎますの。」

と今時、珍しいまで躾の可い扇子を拔く。

「否、御隱居樣、恁うして日蔭に居りましても汗が出ますでございますよ。何ぞ、シトロンかサイダアでもめしあがりますか。」と商賣は馴れたもの。

「いや〳〵、老人の冷水とやら申す、馴れた口です。お茶を下され。」

「はい〳〵。」
些と横幅の廣い、元氣らしい婆さん。とぼけた手拭、片襷で、古ぼけた塗盆へ、ぐいと一つ形容の拭巾をくれつゝ、
「おや、坊ちやん、お嬢樣。」と言ふ。
十一二の編さげで、袖の長いのが、後について、七八ツのが森の下へ、兎と色鳥ひらりと入つた。葭簀越に、老人は此を透かして、
「あゝ、其の森の中は通抜けが出來ますかの。」
「此は、餘所のお邸樣の持地でございまして、はい、否、小兒衆は木の實を拾ひに入りますのでございますよ。」
「出口に逃ひはしませんかの、見受けた處、なか〳〵何うも、奥が深い。」
「最う口許だけでございます。で、ございますから、榎の實に團栗ぐらゐ拾ひますので、ずつと中へ入りますれば、栗も椎もございますが、よくいたしたもので、其處までは、可恐がつて、お幼いのは、おいたが出來ないのでございます。」
「はゝあ如何にもの。」
と、飲んだ茶と一緒に、したゝか感心して、

「これぞ、自然なる要害、樹の根の亂杭、枝葉の逆茂木とある……廣大な空地ぢやな。」
「隱居さん、一つお買ひなすつちや何うです。」
と唐突に云つた。土方體の半纏着が一人、床几は奥にも空いたのに、婆さんの居る腰掛を小楯に踞んで、梨の皮を剝いて居たのが、ぺろりと、白い横銜へに聲を掛ける。
眞顏に、熟と肩を細く、膝頭に手を置いて、
「滅相もない事を。老人若い時に覺えがあります。今とてもぢや、足腰が丈夫ならば、飛脚なと致いて通つて見たい。あゝ、それも成らず……」
と思入つたらしく歎息したので、成程、服裝とても秋日和の遊びと見えぬ。此の老人の用ありさうなも身過ぎのため、と見て取ると、半纏着は氣を打つて、悄氣た顏をして、剝いて落した梨の皮をくる〳〵と指に卷いて、つまらなく笑ひながら、
「はゝゝ、野原や、山路のやうな事を言つてなさらあ、はゝゝ。」
「いや〳〵、まるで方角の知れぬ奥山へでも入つたやうぢや。晝日中提灯でも松明でも點けたらばと思ふ氣がします。」
がつくりと俯向いて、
「頭ばかりは光れども……」

つるりと撫でた手、頸の窪。

「足許は暗ぢやが、なう。」と悄れた肩して膝ばかり、きちんと正しい扇を笏。

唯、思はず釣込まれたやうに成つて、二人とも何か其處へ落ちたやうに、きよろ〳〵と土間を眴す。葭簀の屋根に二葉三葉。森の影は床几に迫つて、雲の白い蒼空から、木の實が降つて來たやうであつた。

三

半纏着は、急に日が蔭つたやうな足許から、目を上げて、兀げた老人の頭と、手に持つた梨の實の白いのを見較べる。

婆さんが口を出して、

「御隱居樣は御遠方で在らつしやるのでございますか。」

「下谷ぢや。」

「其奴あ遠いや、電車でも御大抵ぢや無え。へい、そして何方へお越しに成るんで。」

「聊か此の邊へ用事があつての。當年唯た一度、極暑の砌參つたばかり、一向に覺束ない。其節通りがかりに見ました、大な學校を當にいたした處、唯今立寄つて見れば門が違うた。」

腕を伸して、來た方を指すと共に、齊く扇子を膝に支いて身體ごと向直る……それにさへ一息して、

「それは表門でござつた……坂も廣い。私が覺えたは、もそつと道が狹うて、急な上坂の中途の處、煉瓦塀が火のやうに赤う見えた。片側は一面な野の草で、蒸れの可恐い處でありましたよ。」

「それは裏門でございますよ。道理こそ、此の森を拔けられまいか、とお尋ねなさつた、お目當は違ひませぬ。森の中から背面の大島が拔けられますと道は近うございますけれども、空地でもそれが出來ませんので、此から、ずつと煙硝庫の黑塀について、上つたり、下つたり、大廻りをなさらなければ成りませぬ。何でございますか、女學校に御用事ではございませんか。それだと表門でも用は足りませうでござりますよ。」と婆さんは一度掛けた腰掛を又立つて、森を覗いたり、通を視たり。

「いや〳〵、其處を目當に、別に尋ねます處がありま す。」

「丁と分つて居るんですかい、おいでなさる先方つてのは。かう寂しくつて疎在でね、家の分りにくい處ですぜ。」と、煙草盆は有るものを、口許で燐寸を擦、と目を細うして仰向いて、半分消して置いた煙草をつける。

「餘り確かでも無いのでの。又家は分るにしてもぢや。」

と扇子を倒すのと、片膝力なく叩くのと、打傾くのが殆ど一緒で、
「仔細なく當方の願が屆くか何うかの、さて、」
と沈む……近頃見附けた緣類へ、無心合力にでも行きさうに聞えて、
「何せい、煙硝庫と聞いたばかりでも、清水が湧くやうでは無い。些と更まつては出たれども、又一つ山を越すのぢや、御免を被る。一度羽織を脫いで參らう。あゝ、いやお婆さん、それには及ばぬ。」
紋着の羽織を脫いだのを、本疊みに、スーツスーツと襟を伸して、ひらりと焦茶の紐を捌いて、縺れたやうに手を控へ、
「扮裝ばかり凛々しいが、足許は矢張り暗夜ぢやの。」と裾も暗いやうに、又陰氣。
半纏着は腕組して、
「眞個、足許が惡いんですかい、負つて行く事も成らねえしと……隱居さん、提灯でも上げてえやうだ。」
「夜だと眞個にお貸し申すんだがねえ。」
「何うですえ、其の森ン中の暗い枝に、烏瓜ッて奴が點つて居まさあ。眞紅なのは提灯見たいだ。ねえ、持つておいでなさらねえか、何かの禁厭に成らうも知れませんや。」

「はあ、烏瓜の提灯か。」
目を瞑つて、
「それも一段の趣ぢやが、まだ持つて出たと云ふ驗を聞かぬ。」と羽織を脫いで尙ほ痩せた二の腕を扇子で擦る。

四

「凍傷の藥を賣つてお歩行きなさりはしまいし、人。」
と婆さんは、老いたる客の眞面目なのを氣の毒らしく、半纏着の背中を立身で壓へて、
「可い加減な、前例にも禁厭にも、烏瓜の提灯だなんぞと云つて、狐が點すやうぢやないかね。」
「狐が點す……何。」
と顏を蔽うた皺を拂つて、雲の晴れた目を睜る、と水を切つた光が添つた。
「何、狐が點すか。面白い。」
扇子を颯と胸に開くと、懷中を廣く身を正して、
「どれ、何處に……おゝ、あの葉がくれに點れて紅いわ。お職人、いゝ事を云つて下さつた。どれ一つぶら下げて參るとします。」

「あゝ、隱居さん、氣に入つたら私が引ちぎつて持つて來らあ。……串戲にや言つたからつて、お年寄のために働くんだ。先祖代々、これにばかりは叱言を言ふめえ、どつこい。」と立つ。

老人は肩を揉んで、頭を下げ、

「此は何ともお手を頂く。」

「何の、隱居さん、なあ、おつかあ、今日は父親の命日よ。」

と、葭簀を出る、と入違ひに境界の柵の弛んだ鋼線を跨ぐ時、莨を勢よく、ポンと投げて、裏つきの破足袋、づしッと草を踏んだ。

紅い其の實は高かつた。

音が、かさ〳〵と此方に響いて、樹を抱いた半纏は、梨子を食つた獸の如く、向顱卷で葉を分ける。

「氣を付けうぞ。少い人、落ちまい……」と伸上る。

「大丈夫でございますよ。電信柱の突尖へ腰を掛ける人でございますからね。」

「むゝ、俠勇ぢやな……杖とも柱とも思ふぞ、老人、其の狐の提灯で道を照す……」

「可厭ではございませんかね、此の眞晝間。」

「其處が緣起ぢや、禁厭とも言ふのぢやよ、金烏玉兎と聞くは——此の赫々とした日輪の中には

三脚の鴉が棲むと言ふげな、日中の道を照す、老人が、暗い心の補助に、烏瓜の灯は天の與へと心得る。難有い。」と掌を額に翳す。

婆さんは希有な顏して、

「でも、狐火か何ぞのやうで、薄氣味が惡いやうでございますね。」

「成程、……狐火、……それは耳より。ふん……斯ほどの森ぢや、狐も居らうかの。」

「えゝ、で、ございますのでね、……居りますよ。」

「見たか。」

「前には、それは見たこともございますとも。」

老人此を聞くと腰を入れて、

「あゝ、たのもしい。」

「えゝ……」

と退つた、今の其の……たのもしい老人の聲の力に壓されたのである。

「さて、鳴くか。」

「へい？……」

「矢張り其の、」

と張肱に成つた呼吸を胸に、下腹を、づん、と据ゑると、

「クワーン！と言うて？」

どさりと樹から下りた音。瓜がぶらり、赤く宙に動いて、カラ〳〵と森に響く。

婆さんの顏を見よ。

半纏着が飛んで歸つて、同じくきよとつく目を合せた。

「驚いた……烏が一齊に飛びやあがつた。何だい、今の、あの聲は。……烏瓜を拐つただけで下りりや可いのに、何だかう、樹の枝に、茸があつたもんだから。」

五

「これ、これ、いやさ、これ。」

「はあ、お呼びなされたは私の事で。」

と、羽織の紐を、兩手で結びながら答へたのは先刻の老人。一方青煉瓦の、それは女學校。片側波を打つた亞鉛塀に、ボヘミヤ人の數珠の如く、烏瓜を引掛けた、件の繻子張を凭せながら、疊んで懷中に入れて居た、其の羽織を引出して、今着直した處なのである。

また妙な處で御裝束。

雷神山の急昇りな坂を上つて、一畝り、町裏の路地の隅、凡そ礫川の工廠ぐらゐは空地を取つて、周圍はまだも廣からう。町も世界も離れたやうな、一廓の蒼空に、老人が所謂綠青色の鳶の舞ふ聖心女學院、西曆を算して紀元幾千年めかに相當する時、其の一部分が武藏野の丘に開いた新開の町の一部分に接觸するのは、唯此處ばかりかも知れぬ。外廓の其の煉瓦と、角邸の亞鉛塀とが向合つて、道の幅がぎしりと狹い。

さて、其の青鳶も樹に留つた體に、四階造の窓硝子の上から順々、日射に晃々と數へられて、仰ぐと避雷針が眞上に見える。

此の突當りの片隅が、學校の通用門で、其から、ものの半町程、兩側の家邸。いづれも雜樹林や、畑を抱く。此の荒地の、まばら垣と向合つたのが、火藥庫の長々とした塀に成る。——人通りも何にも無い。地圖の上へ鉛筆で樂書したも同然な道である。

其處を——三光坂上の葭簀張を出た——此の老人はうら枯を摘んだ籠を唯一人で手に提げつゝ、曠野の路を辿るが如く、烏瓜のぽつちりと赤いのを、蝙蝠傘に搦めて支いて、青い鳶を目的に、扇で日を避け、日和下駄を踏んで、大廻りに、先づ其の寂しい町へ入つて來たのであつた。

いや、火藥庫の暗い森を背中から離すと、邸構への寂しい町も、櫻の落葉に日が燃えて、梅の枝にほんのりと薄綿の霧が薰る……百日紅の枯れながら、二つ三つ咲殘つたのも、何となく思出

の暑さを見せて、世はまださして秋の末でも無ささうに心強い。
其處を彼方此方、覗いたり、視たり、立留つたり、考へたり、庭前、垣根、格子の中。
「はてな。」
屋の棟を仰いだり、後退りを又して見たり。
「確に……」
歩行出して、
「いや、待てよ……」
と首を窘めて、こそ〳〵と立退いたのは、日當りの可い出窓の前で。
「違ふかの。」と獨言。變に、跫音を忍ぶ形で、其のまゝ通過ぎると、女學校の其の通用門を正面に見た。
「此のあたり……あゝ綠青色の鳶ぢや、待て、待て、念の爲よ。」
あの、輝くのは目ではないか、もし、それだと、一伸しに攫つて持つて行かれよう。金魚の木伊乃に似たるもの、狐の提灯、烏瓜を、更めて、蝙蝠傘の柄ぐるみ、丁と腕長に前へ突出し、
「迷ふまいぞ、迷ふな。」
と云ひ〳〵……(これ、これ、いやさ、これ。……)爰に言咎められて居る處は、いましがた一

度通つたのである。
其處を通つて、兩方の塀の間を、鈍い稻妻形に畝つて、狹い四角から坂の上へ、によい、と皺面を出した……
坂下の下界の住人は驚いたらう。山の爺が雲から覗く。眼界濶然として目黑に豁け、大崎に伸び、伊皿子かけて一渡り麻布を望む。烏は鷗が浮いたやう、遠近の森は晴れた島、目近き雷神の一本の大栂の、旗の如く、劍の如く聳えたのは、巨船天を摩す柱に似て、屋根の浪の風なきに、泡の沫か、白い小菊が、ちら〳〵と日に輝く。白金の草は深けれども、君が住居と思へばよしや、玉の臺は富士である。

六

「相違ない、此ぢや。」
あの怪しげな烏瓜を、坂の上の藪から提灯、逆上せるほどな日向に突出す、痩せた頰の片靨は氣味が悪い。
其處で、坂を下りるのかと思ふと、違つた。……老人は、すぐに身體ごと、ぐるりと下駄を返して、元の塀について又戻る……扨は先日、極暑の折に上つたと云ふ此の坂で、心當りを確めた

ものであらう。とすると、狙をつけつゝ、こそ〳〵と退いてござつた那の町中の出窓などが、老人の目的ではないか。

裏に、眉のあとの美しい、色白なのが居ようも知れぬ。

それ、うそ〳〵と又參つた……一度屈腰に成つて、靜と火藥庫の方へ通抜けて、隣邸の冠木門を覗く梅ケ枝の影に縋つて留ると、件の出窓に、鼻の下を伸して立つたが、眉をくしゃ〳〵と目を瞑つて、首を振つて、とぼ〳〵と引返して、然あらぬ垣越。百日紅の燃殘りを、眞向に仰いで、日影を吸ふと、出損なつた嚏をウツと吸つて、扇子の隙なく袖で壓へる。

其のまゝ、立直つて、徐々と、も一度戻つて、五段ばかり石を築いた小高い格子戸の前を行過ぎた。が溝はなしに柵を一小間、こゝに南天の實が赤く、根にさふらんの花が芬と薫るのと並んで、其の出窓があつて、窓硝子の上へ眞白に塗つた鐵の格子、まだ色づかない、蔦の葉が棧に縋つて廂に這ふ。

思はず、其處へ、日向にのぼせた赤い顏の皺面で、鼻筋の通つたのを、まともに、伸かゝつて、ハタと着ける、と、颯と映るは眞紅の肱附。牡丹忽ち驚いて飜れば、花瓣から、はつと分れて、向うへ飛んだは蝴蝶のやうな白い顏、襟の淺葱の洩れたのも、空が映つて美しい。

老人轉倒せまい事か。——呀、綠青色の夥間に恥ぢよ、染殿の御后を垣間見た、天狗が通力を

失つて、羽の折れた鴉と成つて都大路にふた〳〵と羽搏つた如く……慌しい遁げ方して、通用門から、どたりと廻る。と漸と其處で、吻と息。

丁ど其の時、通用門にひつたりと附着いて、後背むきに立つた男が二人居た。一人は、小倉の袴、絣の衣服、羽織を着ず。一人は霜降の背廣を着たのが、ふり向いて同じやうに、じろりと此方を見たばかり。道端の事、と敢て意にも留めない樣子で、同じやうに爪さきを刻んで居ると、空の鴉が暗號でも爲たらしい、一枚びらき馬蹄形の重い扉が、長閑な小春に、ヅンと響くと、がらがらぎいと鎖で開いて、二人を、裡へ吸つて、づーんと閉つた。

保險か何ぞの勸誘員が、紹介人と一所に來たらしい風采なのを、然も戀路ででもあるやうに、老人感に堪へた顏色で、

「あゝ〳〵、うま〳〵と入つたわ——女の學校ぢやと云ふに。いや、此の構へは、宛然二の丸の御守殿とあるものを、然とては羨しい。ぢやが、女に逢ふには服禮が利益かい。袴に、洋服よ。」

「何ぢや——(八百半の料理はまづい〳〵。)はあ、可厭な事を云ふ、……まるで私に面當ぢや。」

と氣が付いた……ものらしい……で、懷中へ顎で見當をつけながら、先づ其の古めかしい洋傘を向うの亞鉛塀へ押つけようとして、べたりと塗くつた樂書を讀む。

ふと眉を顰めた、口許が、きりゝと緊つて、次なるを、も一つ讀む。

「――（小森屋の酒は上等。）ふん〳〵、あゝたのもしい。何ぢや。（但し半分は水。）……と、はてな……？

勘助のがんもどきは割にうまいぞ――むゝ〳〵割にうまいか、此は大沼勘六が事ぢや。」と云つた。

こゝに老人が呟いた、大沼勘六、其の名を聞け、彼は名取の狂言師、鷺流當代の家元である。

七

「料理が、まづうて、雁もどきがうまい、……と云ふか。人も違うて、藝にこそよれ、ぢやが、成程まづいか、はゝつ。」

溜息を深うして、

「やゝまた、べらぼうとある……はあ、如何さま、此の（――）長いのが、べら棒と云ふものか。」

恰も、差置いた洋傘の柄につながつた、消炭で描いた棒を視めて、虚氣に、きよとんとする處へ、坂の上なる小藪の前へ、きり〳〵と舞つて出て、老人の姿を見ると、ドンと下りざまに大な破靴ぐるみ自轉車をずる〳〵と曳いて寄つたは、横びしやげて色の青い、猿眼の中小僧。

「やい！」と唐突に怒鳴付けた。

唯、ひよろりとする老人の鼻の先へ、泥を掴んだやうな握拳を、ぬつと出して、

「此ン爺い、汝だな、樂書をしやがるのは、八百半の料理がまづいとは何だ、やい。」

「これは早や思ひも寄りませぬ。が、何かの、此の八百半と云ふのは、お身の身内かの。」

「然うよ、まづい八百半の番頭だい、こン爺い。」

と評判の惡垂が、いひ狀に、ひよいと齒を剝いて唾を吐くと、ベッとりと袖へ。これが熨斗目ともありさうな、柔和な人品穩かに、

「私は樂書はせぬけれどの、まづいと云ふのを決して怒るな、これ、まづければ、私と親類ぢやでなう。」

「何だ、まづいのが親類だ――えゝ、畜生！」と云つた。が、老人の事でない。前生の仇が犬に成つて、あとをつけて追つて來た、面の長い白斑で、矢庭に胴を地に摺つて、尻尾を卷いて吠えかゝる。

「畜生、叱……畜生。」と拳を揮廻すのが棄鞭で、把手にしがみついて、さすがの惡垂眞俯向けに成つて邸町へ敗走に及ぶのを、斑犬は波を打つて颯と追つた。

老人は、手拭で引摺つて袖を拭きつゝ、見送つて、

「……綠樹影沈んでは魚樹に上る景色あり、月海上に浮んでは兎も波を走るか、……いや〳〵、

面白い事はない。」

で、羽織を出して着たのであつた。

頸窪に胡摩鹽斑で、赤禿げに額の抜けた、面に、てら〳〵と澤があつて、でつぷりと肥つた、が、小鼻の皺のだらりと深い。引捻れた唇の、五十餘りの大柄な漢が、酒燒の胸を露出に、べろりと兵兒帶。琉球擬ひの羽織を被たが、引かけ狀に出て來たか、羽織の其の襟が折れず、肩をだらしなく兩方を懷手で、ぎくり、と曲角から睨んで出た、(これ〳〵、いやさ、これ。)が、此なのである。

「何ぞ、老人に用の儀でも。」

と慇懃に會釋する。

赭顏は、でつぷりとした頰を張つて、

「いやさ、用とは此方から云ふ事ぢやらうが、うゝ御老人。」と重く云ふ。

「貴方は？」

「いやさ、名を聞くなら其許からと云ふ處だが、何も面倒だ。俺は小室と云ふ、むゝ小室と云ふ、此の邊の家主なり、差配なりだ。其が何うしたと言ひたい。

ねえ、老人。

いやさ、貴公、貴公先刻から、此の町内を北から南へ行つたり來たり、のそ〳〵歩行いたり、窺つたり、何ぞ、用かと云ふのだ。な、其だに因つてだ。」

もの云ふ頰がだぶ〳〵とする。

「然れば……」

「いやさ、然ればぢや無からう。裏へ入れば、こまゞ〳〵とした貸家もある、それはある。が、表の此の町内は、俺が許と、あと二三軒、然も大々とした邸だ。一遍通り門札を見ても分る。いやさ、猫でも、犬でも分る。

一體、何家を搜す？　いやさ搜さずともだが、假にだ。いやさ、七くどう云ふ事はない、何で俺が門を窺うた。唐突に窓を覗いたんだい。」

ずつと出て、

「扨は……」

「何が(扨は。)だい。」

と嚙んで居た小楊枝を、そツぱう向いて、フツと地へ吐く。

八

老人は膝に扇子、恭しく腰を屈め、
「此は御大人、お初に御意を得ます、……何とも何とも、御無禮の段は改めて御詫をします。
扨て、つかん事を伺ひまするが、扨て、貴方に、お一方、お娘御がおいでなさりはせまいか。」
と、思込んだ狀して言つた。
「娘……あゝ、女のかね。」
唐突に他の家の祕藏を聞くは、此奴怪しからずの口吻、半ば嘲けつて、はぐらかす。
愈々眞顏で、
「然れば、おあねえ樣であらつしやります。」
「姉だか、妹だか、一人居ます。一人娘だよ。いやさ、大事な娘だよ。」
「はゝつ、御道理千萬な儀で。」
「それが、何うしたと云ふんですえ。」と、餘り老人の慇懃さに、膨れた頰を手で壓へた。
「私、取つて六十七歳、えゝ、此の年故に、此の年なれば御免を蒙る。が、それにしても汗が出ます。」
と額を拭つて、咳をした……
「何とぞいたして御大人、貴方の思召をもちまして、お娘御、おあねえ樣に、でござる、一寸、

御意を得ますわけには相成りませぬか。」
「ふん、娘にかい。」
「何とも。」
「變だねえ、娘に用があるなら俺に言へ、と云ふのだが、其は別だ。いや敢て怪しい御仁とも見受けはせんが、まあね、此の陽氣だから落着くが可うござす。一體、何の用なんだい。」
「いや、それに就いて罷出ました……無面目に、お家を窺ひ、御叱を蒙つたで、恐縮いたすにつけても、前後申後れましてござるが、老人は下谷御徒士町に借宅します、萩原與五郎と申して未熟な狂言師でござる。」と名告る。
「はゝあ、茶番かね。」と言つた。
然り、茶番である。が、こゝに名告るは惜かりし。與五郎老人は、野雪と號して、驚流名譽の耆宿なのである。
「おゝ、父上、こんな處に。」
「お町か、何だ。」
と赭ら顏の家主が云つた。
小春の雲の、あの青鳶も、此の人のために方角を替へよ。姿も風采も鶴に似て、清楚と、端正

を兼備へた。襟の淺葱と、薄紅梅。喰もほんのりと日南の面影。
手にした帽子の中山高を、家主の袖に差寄せながら、
「帽子をお被んなさいましッて、お母さんが。……裏へ見廻りに行らしつたかと思つたんです。」
唯、見迎へて一足退いて、亞鉛塀に背の附くまで、殆ど固く成つた與五郎は、忽ち得も言はれない嬉しげな、まぶしらしい、而して懷しさうな顏をして、
「や、や、や、貴女、貴女ぢやつた、貴女。」と袖を開き、胸を曳いて、縋りもつかんず、然も押戴かんず風情である。
疑と、驚きに、淺葱が細く、搖るゝが如く、父の家主の袖を覗いて、睜つた瞳は玲瓏として清しい。
家主は、かたい奴を、誇らしげにスポンと被つて、腕組をづばりと爲ながら、
「何かい、……此の老人を、お町、お前知つとるかい。」
「はい。」
と云ふのが含み聲、優しく爽に聞えたが、些と覺束なささうな響が籠つた。
「あゝ、少時、一旦の御見、路傍の老耄です。令嬢、お見忘れは道理ぢや。もし、これ、此の夏、八月の下旬、彼是八ツ下り四時頃と覺えます。此の邸町、御宅の處で、迷ひに迷ひました、路を

尋ねて、お優しく御懇に、貴女にお導きを頂いた老耄でござるわよ。
と家主の前も忘れたか、氣味の惡いほど莞爾々々する。
「の、令嬢。」
「あゝ、存じて居ります。」
鶴は裾まで、素足の白さ、水のやうな青い端緒。

九

「貴女は爾時、お隣家か、其の先か、門に梅の樹の有る館の前に、彼家の乳母と見えました、圓髷に結うた婦の、嬰坊を抱いたと一所に、垣根に立つてござつて……」
と老人は手眞似して、
「ちようち〳〵あわゝ、と云うてな、其の兒をあやして、お色の白い、手を敲いておいでなさる。處へ、空車を曳かせて老人、車夫めに、何と、ぶつ〳〵小言を云はれながら迷うて參つた。
尋ねる家が、餘り知れないで、既に車夫にも見離されました。足を曳いて、雷神坂と承る、あれなる坂をば喘ぎましてな。
一旦、此の邊も搜したなれども、嘗て知れず、早や目もくらみ、心も弱果てました。處へ、煙

硝庫の上と思ふに、夕立模様の雲は出ます。東西も辨へぬ此の荒野とも存ずる空に、また、あの怪鳥の鳶の無氣味さ。早や、既に立窘みにも成りませうず處――令嬢お姿を見掛けましたわ。

扨て、地獄で天女とも思ひながら、年は取つても見ず知らぬ御婦人には左右なうはものを申し難い。なれども、いたいけに兒をあやしてござる。お優しさにつけ、づか〳〵と立寄りまして、慮外ながら伺ひましたぢや。

が、御存じない。いや此は然も然う、深窓に姫御前とあらうお人の、他所の番地をづか〳〵お辨別のないは其の筈よ。

硫黄が島の僧都一人、縋る纜切れまして、胸も苦しう成りましたに、貴女、爾時、フトお思ひつきなされまして、いやとよ、一段の事とて、なう。

御妙齢なが見得もなし。世帯崩しに、はら〳〵とお急ぎなされ、それ、御家の格子をすつと入つて、爾時ぢや――爾時覺えました、あれなる出窓ぢや――

何と、其の出窓の下に……令嬢、お机などござつて、傍の本箱、お手文庫の中などより、お持出でと存じられます。寺、社に丹を塗り、番地に數の字を記いた、此が白金の地圖でと、おほせで、老人の前でお手に取つて展いて下され、尋ねます家を、あれか、此かと、いや此の目の疎いを思遣つて、御自分に御精魂な、須彌磐石のたとへに申す、芥子粒ほどな黑い字を、爪紅の先に

お拾ひ下され、其の清らかな目にお讀みなさつて……其の……解りました時の嬉しさ。

御心の優しさ、御教への尊さ、お智慧の見事さ、お姿の藹たい事。

二度目には雷神坂を、しや、雲に乘つて飛ぶやうに、車の上から、見晴しの景色を視めながら、口の裡に小唄謠うて、高砂で下りました、はゝつ。」

と、踞むと、扇子を前半に帶にさして、兩手を膝へ、土下座も爲たさうに腰を折つて、

「さて、其の時の御深切、老人心魂に徹しまして、寢食ともに忘れませぬ。千萬忝う存じまするぞ。」

「まあ。」

と娘は、またゝきもしなかつた目を、まつげ深く衝と見伏せる。

此の狂人は、突飛ばされず、打てもせず、あしらひ兼ねた顏色で、家主は不承々々に中山高の庇を、堅いから、こつん〳〵こつんと彈く。

「解りました、何、其のくらゐな事を。いやさ、しかし、早い話が、お前さん、あゝ、何とか云つた、與五郎さんかね。其の狂言師のお前さんが、内の娘に三光町の地圖で道を教へて貰つたと恁う云ふのだ。」

「で、其の道を教へて下さつたに……就きまして、」

「まあさ、……いやさ、分つたよ。早い話が、其の禮を言ひに來たんだ、禮を。……何さ、それにも及ぶまいに、下谷御徒士町、遠方だ、御苦勞です。早い話が、わざ〳〵おいでなすつたんで、茶でも進ぜたい、進ぜたい、が、早い話が、家内に取込みがある、妻が煩うとる。」

「いや、まことに、それは……」

「まあさ、餘りお饒舌なさらんが可い。ね、だによつて、お構ひも申されぬ。で、お引取なさい、此で失禮せう。」

「あ、もし。扨、また。」

「何だ、又(扨。)扨、(又。)かい。」

十

與五郎は、早や懷手をぶり〻と搖つて行かうとする、家主に、縋るが如く手を指して、

「扨……や、此は又お耳障り。いや就きまして……令嬢に折入つてお願ひの儀が有りまして、幾重にも御遠慮は申しながら、辛抱に堪へ兼ねて罷出ました。

次第と申すは、餘の事、別儀でもござりませぬ。

老人、あの當時、……然れば後月、九月の上旬。上野邊の或舞臺に於て、初番に間狂言、那須

の語。本役には釣狐のシテ、白藏主を致しますする筈。……で、此は、當流に於ても許しもの、易からぬ重い藝でありましての、われら同志に於ても、一代の間に指を折るほども相勤めませぬ。

近頃、お能の方は旭影、輝く勢。情なや殘念な此の狂言は、役人も白日の星でござつて、やがて日も入り暗夜の始末。然るに思召しの深い方がござつて、一舞臺、われらの爲にお世話なさつて、別しては老人に其の釣狐仕れの御意ぢや。仕るは狐の化、なれども日頃の鬱懷を開いて、思ふま〻に舞臺に立ちます、熊が穴を出ました意氣込、雲雀ではなけれども虹を取つて引く勢での……」

と口とは反對、悄れた顏して、娘の方に目を遣つて、

「貴女に道を尋ねました、あの日も、實は、其のお肝入り下さるお邸へ、打合せ申したい事があつて罷出る處でござつたよ。

時に、後月の其の舞臺は、一寸淸書にいたし、方々の御内見に入れますので、世間晴れての勤めは、更めて來霜月の初旬、然る其の日本の舞臺に立つ筈でござる。が、劍も玉も下磨きこそ大事、やがては一拭ひかけまするだけの事。先月の勤めに一方ならず苦勞いたし、外を步行くも、から脛を踏んでとぼつきます……と申すが、早や三十年近う過ぎました、老人が四十代、唯一度、芝の舞臺で、此の釣狐の一役を、其の時は家元、先代の名人がアトの獵人をば附合うてくれられ

た。其れより中絶をして居ますに因つて、手馴れねば覺束ない、……此の與五郎が、さて覺束なうては、餘はいづれも若い人、まだ小兒でござる。

折からにつけ忘れませぬは、亡き師匠、且は昔勤めました舞臺の可懷さに、あの日、其の邸の用も首尾すまいて、芝の公園に參つて、もみぢ山のあたりを徘徊いたし、何とも涙に暮れました。歸りがけに、大門前の蕎麥屋で一酌傾け、思ひの外の醉心に、フト思出しましたは、老人一人の姪がござる。

此が海軍の軍人に緣付いて、近頃相州の逗子に居ります。至つて心の優い婦人で、鮮しい刺身を進ぜう、海の月を見に來い、と音信の度に云うてくれます。此の時と、一段思付いて、遠くもござらぬ、新橋驛から乘りました。が、夏の夜は短うて、最早や十時。此の汽車は大船が乘換へでありましての、尤も兩三度は存じて居ります。鎌倉、横須賀は、勤めにも參つた事です——

時に、乘込みましたのが、二等と云ふ縹色の濁つた天鵝絨仕立、ずつと奥深い長い部屋で、何とやら陰氣での、人も澤山は見えませいで、此の方、乘りました砌には、早や新聞を顏に乘せて、長々と寢た人も見えました。

入口の片隅に、フト燈の暗い影に、背屈まつた和尚がござる！　鼠色の長頭巾、ト二尺ばかり頭を長う、肩にすんなりと垂を捌いて、墨染の法衣の袖を胸で捲いて、寂寞として踞つた姿を見

ました……

何心もありませぬ。老人、其の前を通つて、ずつとの片端、和尚どのと同じ側の向うの隅で、腰を落しつけて、何か、のかぬ中の老和尚、死なば後前、冥土の路の松並木では、遠い處に、影も、顏も見合はうず、と振向いて見まするとの……」

娘は淺葱の清らかな襟を合す。

父爺の家主は、棄てた楊枝を惜しさうに、チョッと齒ぜせりをしながら、あとを探して、時々唾吐く。

十一

「早や遠い彼方に、右の和尚どの、形朦朧として、灰をば束ねたやうに見えました處、汽車が、ぐら〳〵と搖れ出すにつけて、吹散つた體に成つて消えました、と申すが、怪しいでは決してござらぬ。居所が離れ陰氣な部屋の深い所爲で、また寂い汽車でござつたのでの。

さて、品川も大森も、海も畠も佳い月夜ぢや。ざんざと鳴るわの、蘆の葉のよい女郎、口吟む心持、一段のうちに、風はそよ〳〵と吹く……老人、晝間息せいて、以ての外草臥れた處へ醉がとろりと出ました。寢るともなしに、うと〳〵としたと思へば、扨て早や、ぐつすりと寢込んだ

て。

大船、おほふなと申す……驚破や乘越す、京へ上るわ、と、慌しう帶を直し、棚の包を引抱いて、洋傘取るが据眼、きよろついて戸を出ました。月は晃々と露もある、停車場のたゝきを歩行くのが、人におくれて我一人……

ひとつ映りまする我が影を、や、これ狐にも成れ、と思ふ心に連立つて、あの、屋根のある階子を上る、中空に架けた高い空橋を渡り掛ける、とな、令孃、さて、此處ぢや。

橋がかりを、四五間がほど前へ立つて、コトヽと行くのが、以前の和尚。痩せに痩せた干瓢、ひよろりとある、脊丈の又高いのが、彼の墨染の法衣の裳を長く、しよび〳〵とうしろに曳いて、前かゞみの、すぼけた肩、長頭巾を重げに、宛然影法師のやうに、ふはり〳〵と見えます。」

と云ふと弗と其處へ、語るものが口から吐いた、鐵拐の如き魍魎が土塀に映つた、……其は老人の影であつた。

「や、これはそも、老人の魂の拔出した形かと思うたです、――誰も居ませぬ、中有の橋でな。然る處、前途の段をば、ぼく〳〵と靴穿で上つて來た驛夫どのが一人あります。其が、此の方へ向つて、其の和尚と摺違うた時ぢやが、の。」

與五郎は呼吸を吐いて、

「和尚が長い頭巾の頭を、木菟むくりと擡ると、片足を膝頭へ卷いて上げ、一本の脛を支かへ棒に、黑い尻をはつと振ると、組違へに、トンと廻つて、兩の拳を、はつたりと杖に支いて、

（横須賀行は此方かや。）

追掛けに、又一遍、片足を膝頭へ卷いて上げ、一本の脛を突支棒に、黑い尻をはつと搖ると、組違へにトンと廻つて、

（横須賀行は此方かや。）

と、早や此方狀に參つた驛夫どのに、くるりと肩ぐるみに振向いた。二度見ました。痩和尚の黃色がかつた青い長面。で、てら〳〵と仇光る……姿こそ枯れたれ、石も點頭くばかり、行澄いた和尚と見えて、童顏、鶴齡と世に申す、七十にも餘つたに、七八歳と思ふ、輕いキヤ〳〵とした小兒の聲。

で、又とぼ〳〵と杖に縋つて、向う下りに、此の姿が、階子段に隱れましたを、熟と視ると、老人思はず知らず、べたりと坐つた。

あれよ〳〵、古狐が、坊主に化けた白藏主。したり、あの凄さ。寂さ。我は化けんと思へども、人は如何に見るやらむ。尻尾を案じた後姿、振返り、見返る處の、科、趣。八幡、此に極つた、と鬼神が教を給うた存念。且つは又、老人が、工夫、辛勞、日頃の思が、影と成つて顯れた、此

でこそと、喃。」

與五郎、がつくりと胸を縮めて、

「あゝ、業は誇るまいものでござる。

舞臺の當日、流儀の晴業、一世の面目、近頃衰へた當流に唯一人、（古沼の星）と呼ばれて、白晝にも頭が光る、と人も言ひ、我も許した、此の野雪與五郎。裝束澄いて床几を離れ、揚幕を切つて！……出る！　月の荒野に渺々として化法師の狐ひとつ、風を吹かして通ると思せ。いかなこと土間も棧敷も正面も、ワイ〳〵がや〳〵と云ふ……緣日同然。」

十二

「立つて歩行く、雜談は始まる、茶をくれい、と呼ぶもあれば、鰻飯を誂へたに此の辨當は違ふ、と喚く。下足の札をカチ〳〵敲く。中には、前番のお能のロンギを、野聲を放つて習ふもござる。が、おのれ見よ。與五郎、鬼神相傳の祕術を見せう。と思ふのが汽車の和尙ぢや。此の心を見物衆の重石に置いて、呼吸を練り、氣を鍛へ、やがて、件の白藏主。

那須野ケ原の古樹の杭に腰を掛け、三國傳來の妖狐を放つて、殺生石の毒を浴せ、當番のワキ獵師、大沼善八を折伏して、さて、此處でこそと、橫須賀行の和尙の姿を、それ、髣髴として、

舞臺に顯す……しや、習よ、藝よ、術よとて、胡麻の油で揚げすまいた鼠の罠に狂ひかゝると、わつと云ふのが可笑しさを囃すので、小兒は一同、聲を上げて哄と笑ふ。華族の後室が抱いてござつた狆が吠えないばかりですわ。

何と、それ狂言は、をかしいものには作したれども、此の釣狐に限つては、人に笑はるべきものでない。

凄う、寂しう、可恐しげは扨ないまでも、不氣味でなければなりませぬ。何と！」

とせき込んで言つたと思ふと、野雪老人は、がつくりと下駄を、腰に支いて、路傍へ膝を立てた。

「然ればこそ、先、師匠をはじめ、前々に、故人が此の狂言をいたした時は、土間は野となり、一二の松は遠方の森と成り、橋がかりは細流となり、見ぶつの男女は、草と成り、木の葉となり、石と成つて、舞臺唯充滿の古狐、尤も奇特は、鼠の油の其よりも、狐のにほひが芬といたいた……ものでござつて、上手が古めた鼓に劣らず、聲が、タン〳〵と響きました。

何事ぞ、此の未熟、蒙昧、愚癡、無知のから白癡、二十五座の狐を見ても、小兒たちは笑ひませぬせぬに。喃、――

最早、生效も無いと存じながら、死んだ女房の遺言でも止められぬ河豚を食べても死ねませぬ

は、更に一度、來月はじめの舞臺が有つて、おのれ、此の度こそ、と思ふ、未練ばかりの故でござる。

寢食も忘れまして……氣落ちいたし、心萎え、身體は疲れ衰へながら、執着の一念ばかりは呪詛の弓に毒の矢を番へましても、目が晦んで、的が見えず、藝道の暗と成つて、老人、今は弱果てました。

時に蒼空の澄渡つた、」

と心激しくみひらけば、大なる瞳、屹と仰ぎ、

「秋の雲、靉靆と、あの鵄忽ち孔雀と成つて、其の翼に召したりとも思ふお姿、宛然夢枕にお立ちあるやうに思出しましたは、貴女、令嬢樣、貴女の事ぢや。」

お町は謹で袖を合せた。玉あたゝかき顏の優い眉の曇つたのは、其の黑髮の影である。

「老人、唯今の心地を申さば、炎天に頭を曝し、可恐い雲を一方の空に視て、果てしもない、此の野原を、足を焦し、手を燒いて、徘徊ひ歩行くと同然でござる。時に道を敎へて下された、あの、尊さ、嬉さ、おん可懷さを存ずるにつけて……夜汽車の和尙の、室をぐるりと廻つた姿も、同じ日の事なれば、令嬢の、袖口から、否、其の……あの、繪圖面の中から、拔出しましたもののやうに思はれて成りませぬ。

然やうに思へば、こゝに、繪圖面をお展き下されて、貴女と二人立つて見ましたは、凡そ天ケ下の藝道の、祕密の卷もの、奥許しの折紙を、お授け下されたおもひ致す！

姫、神とも存ずる、令嬢。

分別に盡き、工夫に詰つて、情なくも敎を頂く師には先立たれましたる老耄。他に縋らうやうがない。唯、偏に、令嬢樣と思詰めて、とぼ〳〵と夢見たやうに參りました。

が、但し、土地の、あの圖に、何と祕密が有らうとは存じませぬ。貴女の、お胸、お心に、お袖の裏に、何となく敎が籠る、と心得まする。

何とぞ、貴女の、御身からいたいて、人に囃され、小兒たちに笑はれませぬ、白藏王の法衣のこなし、古狐の尾の眞實の化方を御敎へに預りたい……」

「これ、これ、いやさ、これ。」

「少時！　然りとても、令嬢樣、御年紀、またお髮の樣子。」

娘は髮に手を當てた、が、容づくるとは見えず、袖口の微な紅、腕も端麗なものであつた。

「舞、手蹄、振、所作のおたしなみは格別、當世西洋の學問をこそ遊ばせ、能樂の間の狂言のお心得あらうとは嘗て存ぜぬ。

或は、何かの因緣で、斯道なにがしの名人のこぼれ種、不思議に咲いた花ならば、われらのた

めには優曇華なれども、些と其は考へ過ぎます。
それとも當時、新しいお學問の力を以てお導き下されうか。
然りとて痩せたれども與五郎、科や、振は習ひませぬぞよ。師は心にある、目にある、胸にある……
近々とお姿を見、影を去つて、跪いて工夫がしたい！　折入つてお願ひは、相叶ふことならば、お臺所の隅、お玄關の端に成りとも、一七日、二七日、お差置きを願ひたい。」
「本氣か、これ、おい。」と家主が怒鳴つた。
胸を打つて、
「血判でござる。成らずば、御門、溝石の上になりとも、老人、腰掛に辨當を持參いたす。平に、此の儀お聞濟が願ひたい。
口惜や、われら、上根ならば、此の、此なる烏瓜一顆、こゝに一目、令孃を見た丈けにて、祕事の悟も開けませうに、無念やな、老の眼の涙に曇るばかりにて、心の霧が晴れませぬ。
や、令孃、お聞濟。恁の通りでござる。」
とて、開いた扇子に手を支いた。埃は颯と、名家の紋の橘の左右に散つた。
思はず、ハツと吐息して、羽織の袖を、齊く淸く土に敷く、お町の小腕、無手と取つて、引立

てて、
「馬鹿、狂人だ。此奴あ。おい、そんな事を取上げた日には、これ、此の頃の畫工に賴まれたら。大切な娘の衣服を脫いで、いやさ、素裸體にして見せねば成らんわ。色情狂の、爺の癖に。」

十三

「生蕎麥、もりかけ二錢とある……場末の町ぢやな。はゝあ煮たて豌豆、古道具、古着の類。何ぢや、片假名を以てキメウニナホル丸、疝氣寸白蟲根切、となのつた……むゝ〳〵疝氣寸白は厭はぬが、愚鈍を根切りの藥はないか。
こゝに、牛豚開店と見ゆる。見世ものではない。こりや牛鋪ぢや。が、店を開くは、扨てめでたいぞ。
ほう、按腹鍼療、蒲生鐵齋、蒲生鐵齋、はて達人ともある姓名ぢや。あゝ、羨しい。おゝ、琴曲教授。や、此の町にいたいて、村雨松風の調べ。さて奥床い事なう。――べ、べ、べ、べッかッこ。」
と、ちよろりと舌を出して横舐を、遣つたのは、魚勘の小僧で、赤八、と云ふが靑い顏色、岡持を振ら下げたなりで道草を食散らす。

三光町の裏小路、ごま〳〵とした中を、同じく場末の、麻布田島町へ續く、炭團を干した薪屋の露地で、下駄の齒入がコツ〳〵と行るのを見ながら、二三人共同栓に集つた、かみさん一人、これを聞いて、

「何だい、其の言種は、活動寫眞のかい、おい。」

「違はあ。へッ、違ひますでござんやすだ。こりやあ、雷神坂上の富士見の臺の差配のお嬢さんに惚れやあがつてね。」

「あゝ、あの別嬪さんの。」

「然うよ、でね、其奴が、よぼ〳〵の爺でね。」

「おや、へい。」

「色情狂で、おまけに狐憑と來て居ら。毎日のやうに、差配の家の前をうろついて附纏ふんだ。昨日もね、門口の段に腰を掛けて居る處を、大な旦那が襟首を持つて引摺出した。お嬢さんが縋りついて留めてたがね。へッ被成もんだ、あの爺を庇ふ位なら、俺の頰邊ぐらゐ指で突いてくれるが可い、と其奴が癪に障つたからよ。自轉車を下りて見て居たんだが、爺の背中へ、足蹴に砂を打つかけて遁げて來たんだ。

それ、そりや昨日の事だがね。串戲ぢやねえや。お嬢さんを張りに來るのに辨當を持つてやあ

がる、握飯の。」

「成程、變だ。」……齒入屋が言つた。

「然うよ、其奴を、旦が踏潰して怒つてると、そら、俺を追掛けやがる斑犬が、ぱく〳〵食やがつた、をかしかつたい、それが昨日さ。」

「分つたよ、昨日は。」

「其の前もね、毎日だ。何處かで見掛ける。いつも雷神坂を下りて、此の町内をとぼくさ〳〵。其癖のん氣よ。角の蕎麥屋から一軒々々、きよろりと見ちや、毎日おなじやうな獨語を言はあ。」

「其奴が、(もりかけ二錢とある)だな、生意氣だな、狂人の癖にしやあがつて、(場末)だなんて吐しやがつて。」と齒入屋が、おはむきの世辭を云つて、女房達をじろりと見る奴。

「それからキメウニナホル丸、牛豚開店までやりやがつて、按摩ン許が蒲生鐵齋、たつじんだ、土瓶だとよ、藥罐めえ、笑かしやがら。何か惡戲をして遣らうと思つて、うしろへ附いちやあ歩行くから、大概口上を覺えたぜ。今もね、其處へ來たんぜ。」

「來るえ。」と、一所に云ふ。

「見ねえ、一番、尻尾を出させる考へを着けたから、駈拔けて先へ來たんだ。——そら、そら、來たい、あの爺だ——ね。

唯、琴曲の看板を見て、例の如く、帽子も被らず、洋傘を支いて、据腰に與五郎老人、うかうかと通りかゝる。

「あれ！　何をする。」

と言ふ間も無かつた。……おしめも褌も一所に掛けた、路地の物干棹を引ぱづすと、途端の與五郎の裾を狙つて、青小僧、蹈出す足と支く足の眞中へスッと差した。はずみにかゝつて、あはれ與五郎、でんぐりかへしを打つた時、

「や、」と倒れながら、激しい矢聲を、掛けるが響くと、宙で撓めて、とんぼを切つて、ひらりと翻つた。古今の手練、透かさぬ早業、頭を倒に、地には着かぬ、が、無慚な老體、蹌踉と成つて倒れる背を、側の向うの電信柱に擋とつける、と摺拔けに支へも敢ず、ぽつたら燒の鍋を敷いた、駄菓子屋の小店の前なる、緣臺に挫と落つ。

走り寄つたは婦ども。ばら〳〵と來たのは小兒で。

驚の森の稻荷の前から、唯、見て、手に藥瓶の柴を提げた、美しい若い娘が、袖の縞を亂して駈寄る。

「怪我は。」

「吉祥院前の接骨醫へ早く……」

「お怪我は？」

與五郎野雪老人は、品ある顏をけろりとして、

「やあ、小兒たち、笑はぬか、笑へ、あはゝ、と笑へ。爺が釣狐の舞臺もの、此處へ運べば樂なものぢや——我は化けたと思へども、人は如何に見るやらむ。」

と半眼に、從容として口誦して、

「あれ、あの意氣が大事ぢやよ。」

と、頭を垂れて、ハッと云つて、俯向く背を、人目も恥ぢず、衝と抱いて、手巾も取りあへず、袖にはら〳〵と落涙したのは、世にも端麗なお町である。

「お手を取ります、お爺樣、さ、私と一所に。」

十四

圓に桔梗の紋を染めた、嚴めしい馬乘提灯が、暗夜にほのかに浮くと、此を捧げた手は、灯よりも白く、黑髮が艶々と映つて、ほんのりと明い顏は、お町である。

唯、眉に翳すやうにして、雪の頸を、やゝ打傾けて優しく見込む。提灯の前にすく〳〵と並んだのは、順に數の重なつた朱塗の鳥居で、優しい姿を迎へたれば、恰も紅の色を染めた錦木の

風情である。

一方は灰汁のやうな卵塔場、他は漆の如き崖である。

富士見の臺なる、荼枳尼天の廣前で、いまお町が立つた背後に、

此の一廓、富士見稲荷鎭守の地につき、家々の蓄犬堅く無用たるべきもの也。地主。

と記した制札が見えよう。それからは家續きで、丁度お町の、あの家の背後に當る、が、其の間に寺院の其の墓地がある。突切れば近いが、避けて來れば雷神坂の上まで、土塀を一廻りして、藪疊の前を拔ける事に成る。

お町は片手に、盆の上に白い切を掛けたのを、しなやかな羽織の袖に捧げて居た。暗い中に、向うに、最う一つ茫乎と白いのは涎掛で、其の中から目の釣つた、尖つた眞蒼な顏の見えるのは、青石の御前立、此の狐が晝も凄い。

見込んで提灯が低く成つて、裾が鳥居を潛ると、一體、聖心女學院の生徒で、晝は袴を穿く深い裾も——風情は萩の花で、鳥居もとに彼方、此方、露ながら明く映つて、友染を捌くのが、內端な中に媚かしい。

狐の顏が明先にスッと來て近くと、其の背後へ、眞黑な格子が出て、下の石段に踞つた法然あたまは與五郎である。

老人は、石の壇に、用意の毛布を引束ねて敷いて、寂寞として腰を据ゑつゝ、兩手を膝に端坐した。

「お爺樣。」

と云ふ、提灯の柄が賽錢箱について、件の靑狐の像と、しなつた背中合せに、お町は老人の右へ行く。

「やあ、」

以つての外元氣の可い聲を掛けたが、それまで目を瞑つて居たらしい、夢から覺めた面色で、

「又してもお見舞……令孃、早や、それでは痛入る。——老人にお敎へ下さると云ふではなけれど、繪圖面が事の起因ゆゑ、土地に緣があらうと思へば、もしや、此の明神に念願を掛けたらば——と貴女がお心付け下された。暗夜に燈火、大智識のお言葉ぢや。

何か、故と仔細らしく、夜中に此へ出ませいでもの事なれども、朝、晝、晩、日のあるうちは、令孃のお目に留つて、易からぬお心遣ひ、お見舞を受けまする。且は親御樣の前、別して御尊父に忍んで遊ばす姫御前の御身に對し、別事あつて成らぬと存じ、御遠慮を申すによつて、故と夜陰を選んで參りますものを、何として此の暗いに。此では老人、身の置きどころを覺えませぬ。第一唯今も申す親御樣に、」

「否、母は、よく初手からの事を存じて居ります。煩つて居りませんと、もつと以前に何うにもしたいのでございますッて。眞個にお爺様、貴老の御心勞をお察し申して、母は蔭ながら泣いて居ります。」

「あゝ、勿體至極もござらん。其の儀も豫てうけたまはり、老人心魂に徹して居ります。」

「私も一所に泣くんですわ。眞個に私の身體で出來ます事でしたら、何うにもしてお上げ申したいんでございますよ。それこそね、あの、貴老が遊ばす、お狂言の罠にかゝる爲に、私の身體を油でいためてでも差上げたいくらゐに思ふんですが……それはお察しなさいましよ。」

「言語道斷。」と與五郎は石段をずるりと辷つた。

十五

「そして、別にお觸りはございませんの。おとしよりが、こんなに、まあ、御苦勞を遊ばして。」

「いや、老人、胸が、むず痒うて、たゞ身體の震へまする外、爰に參つてからは又格別一段の元氣ぢや、身體は決してお案じ下されう事はない。却つて何かの悟を得ようと心嬉しいばかりでござる。が、御母堂樣は。」

「母はね、お爺樣、寢ました切、食が細つて困るんです。」

「南無三寶。」

「今夜は、些と更けましてから、それでも蕎麥かきをして食べて見よう、と然う言ひましてね、丁度父の在所から屆きました新蕎麥の粉がありましたものですから、私が枕頭で拵へました。父は、あの一晩泊りに其の在へ參つて留守なのです。母と又、お爺樣、貴老の事を然う申して……屹とお社においでなさるに違ひない、內へお迎へをしたいんですけれど、あゝ云つた父の手前、留守では猶更不可ません。」

「おゝ〳〵、如何にも。」

「蕎麥かきは暖ると申します。差上げたらば、と母と二人で然う申しましてね、あの、こゝへ持つて參りました。おかはりを添へてございますわ。お可厭でなくば召上つて下さいましな。」

「や、蕎麥搔を……然れば匂ふ。來世は雁に生れうとも、新蕎麥と河豚は老人、生命に掛けて好きでござる。そればかりは決して御辭儀申さぬぞ。林間に酒こそ暖めませぬが、大宮人の風流。」

と露店でも開くが如く、與五郎一廻りして毛布を擴げて、石段の前の敷石に、しやんと坐る、と居直つた聲が曇つた。

また魅せられたやうな、お町も、其の端へ腰を下して、世帶ぶつた手捌きで、白いを取つたは布巾である。

與五郎、盆を前に兩手を支き、

「あゝ、今夜唯今、與五郎藝人の身の冥加を覺えました。……就ては、新蕎麥の御祝儀に、爺が貴女に御伽を話す。……われら覺えました狂言の中に、鬼瓦と申すがあつての、至極初心なものなれども、此がなか〳〵の習事ぢや。――先づ都へ上つて年を經て、やがて國許へ立歸る侍が、大路の棟の鬼瓦を視めて、故郷に殘いて、月日を過ごいた、女房の顏を思出で、絶て久しい可懷さに、あの鬼瓦が其の顏に瓜二つぢやと申しての、聲を放つて泣くと言ふ――人は何とも思はねども、學問遊ばし利發な貴女ぢや、言はいでも分りませう。繪なり、像なり、天女、美女、よしや傾城の肖顏にせい、美しい容色が肖たと云うて、涙を流すならば仔細ない。誰も泣きます。鬼瓦さながらでは、ソッとも、嘘にも泣けませぬ。

泣け！　泣かぬか！　泣け、と云うて、先師匠が、老人を、月夜七晩、雨戸の外に夜あかしに立たせまして、其の家の、棟の瓦を睨ませて、動くことさへさせませなんだ。

十六夜の夜半でござつた。師匠の御新造の思召とて、師匠の娘御が、ソッと忍んで、蕎麥、蕎麥かきを……

と言が途絶え、膝に、しかと拳を當て、

「袖にかくして持つてござつた。其を柿の樹の大な葉の桐のやうな影で食べました。鬼瓦ではなけれども、其の時に涙を流いて、やがて、立つて、月を見れば、棟を見れば、鬼瓦を見れば、ほろほろと泣けました。

さて、其の娘が緣あつて、われら宿の妻に罷成る、老人三十二歳の時。――彼は一昨年果てました。老の身の杖柱、やがては家の藝の唯一人の話對手、舞臺で分別に及ばぬ時は、師の記念とも存じ、心腹を語つたに――いまは惜からぬ生命と思ひ、世に亡い女房が遺言で、止めい、と申す河豚を食べても、まだ死ねませぬは因果でござるよ。

此度の釣狐も、首尾よく化澄まし、師匠の外聞、女房の追善とも思詰めたに、式の如き恥辱を取る。

扨て、申すまじき事なれども、先達て計らずもをがみました、貴方のお姿、お顏だちが、扨て扨て申すまじき事なれども、過去りました、あの、そのものに、いや〳〵貴女、令孃、貴女とは申すまい、親御でおはす母君が。いや〳〵……恐多い申すまい。……此の蕎麥搔が、よう似ました。……

やあ、雁が鳴きます。

「おゝ、……雁が鳴く。」

與五郎は、肩をせめて、胸をわなゝかして、はら〳〵と落涙した。
「お爺様、さ、そして、懷爐をお入れなさいまし、懷中に私が暖めて參りました。母も胸へ着けましたよ。」
「えゝ！」と思はず、皺手をかけたは、眞綿のやうなお町の手。
「親御様へお心遣ひ……剩へ外道のやうな老人へ御氣扱、前お見上げ申したより、玉を削つて、お顏にやつれが見えます。なう……此は何をお泣きなさる。」
「胸がせまつて、唯胸がせまつて——お爺様、貴老がおいとしうて成りません。確乎抱いて上げたいわねえ。」と夜半に嘗む、此の一輪の赤い花、露を傷んで萎れたのである。
人は知るまい。世に不思議な、此の二人の、毛布に犇と寄添つたを、あの青い石の狐が、顏をぐるりと向けて、鼻で覗いた……
「此は……」
老人は懷爐を取つて頂く時、お町が襟を開くのに搦んで落ちた、折本らしいものを見た。
「……町は基督教の學校へ行くんですが、お導き申したと云ふお社だし、はじめが此の繪圖から起つたのですから、此をしるしにお納め申して、同じに願掛をしてお上げなさいと、あの母が然う申します。……私も其の心で、今夜持つて參りましたよ。

與五郎野雪、これを聞くと、拳を握つて、舞の構へに、正しく屹と膝を立てて、
「むゝ、いや、かさねゞ〳〵……たとひキリシタンバテレンとは云へ、お宗旨までは尋常事ではない。此の事、其の事。新蕎麥に月は射さぬが、暗は、ものぢや、冥土の女房に逢ふ思。此の燈火は貴女の導き。やあ、繪圖面をお展き下され、老人思ふ所存が出來た！」
と熟と睜つた、目の冴は、勇士が劍を撓むるが如く、袖を抱いてすツくと立つ、姿を絞つて、ぢり〳〵と、繪圖の面に——捻向く血相、暗い影が颯と射して、線を描いた紙の上を、フツと拔け出した足が宙へ。
「クワーン。」と一喝。百にもあまる朱の鳥居を一飛びにスーツと拔ける、と影は燈に、空を飛んで、梢を傳ふ姿が消える、と谺か、非ずや、雷神坂の途半ばのあたりに、暗を裂く聲、
「クワーン。」と響いた。
「あれえ。」
「否、怪いものではありません。」
「老人の夥間ですよ。」
社の裏を連立つて、眉目俊秀な青年二人、姿も對に、暗中から出たのであつた。
「では、矢張りお狂言の？……」

「否、能樂の方です。――大師匠方に内弟子の私たち。」
「老人の、あの苦心に見倣へ、と先生の命令で出向いて居ます。」
と、齊しく深くした帽子を脱いで、お町に禮して、見た顏の、蠟燭の灯に二人とも瞼が露に濡れて居た。
「若先生。」
「おゝ大沼さん。」
「貴方もかい。」
大沼善八は、靴を穿いた、裾からげで、正宗の四合壜を紐からげにして提げて居た。
「對手が、あの意氣込ぢやあ、安閑として居られません。寒い！（がた〳〵と震へて）いつでもお爺さんに河豚鍋のおつきあひで嘲笑はれる腹癒せに、内證で、……おゝ、寒！　ちび〳〵と敵を取らうと思つたが、恐入つて飲めんのでした。――お嬢さん、貴女は、氏神でおいでなさる。」

浮舟

一

「浪花江の片葉の蘆の結ぼれかゝり――よいやさ。」

と蹌踉として、

「これわいな。……いや、どつこいしよ。」

脫いで提げたる道中笠、一寸左手に持換へて、紺の風呂敷、桐油包、振分けの荷を兩方、蝙蝠の憑物めかいて、振落しさうに掛けた肩を、自棄に前に突いて最一つ蹌踉ける。

「……解けてほぐれて逢ふ事もか。何を言やがる。……此方あ可い加減に溶けさうだ。……まつにかひあるヤンレ夏の雨、かい……とおいでなすつたかい。」

さつと沈めた浪の音。磯馴松は一樹、一本、薄い枝に、濃い梢に、一ツづゝ、翠、淡紅色、繪のやうな、旅館、別莊の窓灯を掛連ね、松露が戀に身を焦す、紅提灯ちらほらと、家と家との間を透く、白砂に影を落して、日暮の打水のまだ乾かぬ茶屋の葭簀も靑薄、婦の姿もほのめいて、穗に出て招く風情あり。此處は二見の浦づたひ。

眞夏の夜の暗闇である。此の四五日、引續く暑さと云ふは、日中は硝子を燒くが如く、嚇と晴れて照着ける、が、夕凪とともに曇よりと、水も空も疲れたやうに、ぐつたりと雲がだらけて、煤色の飴の如く粘々と搔曇つて、日が暮れると墨を流し、海の波は漆を畝らす。此で居て今夜も降るまい。癖に成つて、一雫の風を誘ふ潮の香もないのであつた。

男は草鞋穿、脚絆の兩脚、しやんとして、恰も一本の枕の如く、松を仰いで、立停つて、……

眦を返して波を視た。

「あゝ、唄ぢやねえが、一雨欲しいぜ……

俄然として額を叩いて、

「慌てまい、六ちやん、いや、ちやんと云ふ柄ぢやねえ。六公、六でなし、六印、月六齋で居やあがら。はゝはゝ。」

肩を刻んで苦笑ひして、又ふら〳〵と砂を踏み、

「野宿に雨は禁物でえ。」

其の時躓く。……

「これわいな！　慌てまいとは此の事だ。はあ、松の根ッ子か。此の、何でもせい。」

岸邊の茶屋の、それならぬ、渚の松の舫船。――六藏は投遣りに振つた笠を手許に引いて、屈

腰に前を透かすと、つい目の前に船首が見える。

船は、櫂もなく艪もなしに、濱松の幹に繋いで、一棟、三階立は淡路屋と云ふ宏壯な大旅館、一軒は當國松坂の富豪、池川の別莊、清洒なる二階造、二見の浦の海に面した裏木戸の兩の間、表通りへ拔路の濱口に、波打際に引上げてあつた。

夫女巖へ行くものの、通りがかりの街道から、此の模樣を視めたら、其も名所の數には洩れまい。舷に鰡は飛ばないでも、舳に蒼い潮の鱗。船は波に、海に浮べたかと思はれる。……が藍を流した池のやうな浦の波は、風の時も、渚に近い此の船底を洗ひはせぬ。戯にともづなの舫を解いて、木馬のかはりにぐら〳〵と動かしても、縱橫に搖れこそすれ、洲走りに砂を辷つて、水に攫はれるやうな憂はない。

氣の輕い、のん氣な船は、件の別莊の、世に隔てを置かぬ、たゞ夕顏の杖ばかり、四ツ目に結つた竹垣の一重を隔てた。濡緣越の座敷から聞え來る三味線の節の小唄の、二葉三葉、松の葉に輕く支へられて、流れもあへず、絹のやうな砂の上に漂つて居るのである。

二

「此の何でもせい。……住吉の岸邊の茶屋に、よいやさ。」

と風體、恰好、役雜なものに名まで似た、因果小僧とも言ひさうな這奴六藏は、其の舷に腰を掛けた、が、舌打して、

「ちよッ面倒だ。宿錢は鐚でお定り、それ、」

と笠を、すぽりと落し、次手に振分の荷を取つて、笠の中へ投げ込んで、

「いや、お泊りならばア泊らんせ、お風呂もどん〳〵湧いて居る、障子も此頃はりかへて、疊も此頃かへてある。——嘘を吐きやあがれ。」

空手を組んで、四邊を見たが、がッくりと首を振つて、

「待てよ……靑天井が黑光りだ。電は些と氣が無えがね、二見ヶ浦は千疊敷、濱の砂は金銀……だらう、さうだろさゝだろ然うであろ。成程どん〳〵湧いて居ら、伊良子ヶ崎までたつぷりだ。あゝ、しかし暑いぜ。」

腕まくりを肩までして、

「よく皆、瓦の下の、壁の裡へ入つてやがる。瓦の下、壁の裡、別莊でも旅館でも、階下も二階も恁の溫氣に、夕風の潮を避け、南うけに座を移して、伊勢三郎が物見松に、月もあらば盜むべく、神路山、朝熊嶽、五十鈴川、宮川の風にこがれて居るらしい。ものの氣勢も人聲も、街道向は賑かに、裏手には湯殿の電燈の小暗きさへ、

燈は海に遠かつた。

六藏ニヤ〳〵と獨笑して、

「お寢間のお伽もまけにしてと——姉さん、眞個かい、洒落だぜ〳〵洒落ぢやねえ。入らつしやい、お一方、お泊でございますよ。へい、お早いお着樣で、難有う存じます。これ、御濯足の水を早くよ。あい〳〵、とおいでなさる。白地の手拭、紅い襷よ……柔な指で水と來りや、俺あ盥で金魚に化けるぜ。金魚うや、金魚う。」

と可い氣な賣聲。

「はてな、紺がすりに、紺の脚絆、をかしな色の金魚だぜ。畜生め、鯰ぢやねえか。刎ねる處は鮒だ奴さ。鮒だ、鮒だ、鮒侍だ。」

と胸を搖つて、ぐつと反つたが、忽ち肩ぐるみ頭をすくめて、

「何を言やあがる。」

で、揚あしを左の股、遣違ひに又右て。燈は遠し、手探りを、何の氣もなく草鞋を解いて、びたりと揃へて、トンと船底へ突込むと、殊勝な事には、手拭の疊んで持つたをスイと解き、足の埃をはた〳〵と拂つて、臀で楫を取つて、ぐるりと船の胴の間にのめり込む。

「御案內引あい〳〵……」

と自分で喚き、

「奥の離座敷だよ、……船の間——とおいでなすつた。あゝ、佳い見晴、と言ひてえが、暗くッて薩張分らねえ。」

勝手な事を吐くうちに、船の中で胡坐に成つた。が兎が櫂を押さないばかり、狸が乘つた形である。

「何、お風呂だえ、風呂は留めだ。恁う見えても餘り水心のある方ぢやねえ。はゝゝゝ、湯に水心も可笑いが、どん〳〵湧いてるは海だらう。——すぐに御膳だ。膳の上で一銚子よ。分つたか。脫落もあるめえが、何ぞ一品、別の肴を見繕つてよ、と仰せられる。」

と仰せられ、

「あゝ、いゝ酒だぜ、忠兵衞のおふくろかい、古い所で……妙燗々々〳〵。」

と二つばかり額を叩く。……暢氣さも傍若無人で、いづれ野宿の、こゝに寢て了ふつもりで居よう。舫船を旅籠とより、名所を座敷にしたやうなことを吐す。が。僅か一時ばかり前、此の町通り、兩側の旅籠の前を、うろついて歩行いた折は、早や日も落ちて、脚にも背にも、放浪の陰の漾つた、見るからみじめな樣子であつた。

三

黄昏に、御泊を待つ宿引女の、廂はづれの床几に掛けて、島田、圓髷、銀杏返、撫つけ髪の夕化粧、姿を斜に腰を掛けて、淺葱に、白に、紅に、ちら〳〵手絡の色に通ふ、團扇の繪を動かす狀、もの言ふ聲も媚かしく傾城町の風情がある。

浦づたひなる掃いたやうな白い道は、兩側に軒を並べた、家居の中を、あの注連を張つた岩に續く……、松の蒔繪の貝の一筋道。

氷店、休茶屋、赤福賣る店、一膳めし、就中、鵯の鳴くやうに、けたゝましく往來を呼ぶ、貝細工、寄木細工の小女どもも、晝から夜へ日脚の淀みに商賣の逢魔ケ時、一時鳴を鎭めると、出女の髪が黑く、白粉が白く成る。

優しい聲で、

「もし、お泊りかな。」

「お泊りやすえ。」

彼方でも、お泊りやす、此方でも、お泊りやす、と愛嬌聲の口許は、松葉牡丹の紅である。

「泊るよ。」

其處へ、突掛けに紺がすりの汗ばんだ道中を持つて行くと、

「はい、お旅籠は上中下と三段にございますがな、最下等にいたしましても……」

何うして、こんな旅籠へ一宿出來よう、服裝を見ての口上に違ひないから。

「何だ。無價泊めようと云ふのぢやねえのか。」

「外を聞いておくんなはれ。」

「指揮は受けねえ。」と肩を搖つて、のつさり通る。

「お泊りやす。」

「俺か。」と又ずつと寄る。

「否、違ひまんの。」

「狀あ見ろ、へゝん。」

と、半分白い目で天を仰いで、拗ねたやうに其のまゝ素通。

此の邊とて、道者宿、木賃泊りが無いではない。要するに、容子の好い婦人が居て、夕をほの白く道中を招く旅籠では、風體の恁の如き、君を客にはしないのである。

荷も石瓦、古新聞、乃至、懷中は突つぽでも、一度目指した軒を潛つて、座敷に足さへ踏掛くれば、銚子を倒し、椀を替へ、比目魚だ、鯛だ、と贅を言つて、按摩まで取つて、ぐつすり寢て、

いざ出發の勘定に、五錢の白銅一個持たないでも、彼はびくとも爲るのではなかつた。

針が一本――魔法でない。

此の六でなしの六藏は、元來腕利きの仕立屋で、女房と世帶を持ち、弟子小僧も使つた奴。酒で崩して、賭博を積み、いかさまの目ばかり裝つた、己の名の旅雙六、花の東都を夜遁げして、神奈川宿のはづれから、早や旅錢なしの食ひつめもの、旅から旅をうろつくこと既にして三年越。

右樣の勘定書に對すれば、洗つた面で、けろりとして、

「おう、仕立ものの用はねえか。羽織でも、袴でも。何にもなきや經帷子を縫つて遣ら。勘定は差引だ。」

女郎屋の朝の居殘りに遊女どもの顏を剃つて、虎口を遁れた床屋がある。――それから見れば、旅籠屋や、溫泉宿で、上手な仕立は重寶で、六の名は七同然、融通は利き過ぎる。

尤も仕事を稼ぎためて、小遣のたしにするほどなら、女房を棄てて流浪なんかしない筈。

からつけつの尻端折、笠一蓋の着たッ切雀と云ふも恥かしい阿房鳥の黑扮裝で、二見ヶ浦に塒を搜して、

「お泊りだ、お一人さん――旅籠は鐚でお定り、そりや。」と指二本、出女の目前へぬいと出す。

誰が對手に成るものか、默つて動かす團扇の手は、浦風を軒に誘つて、背後から……鹽花々々。

四

六は門並六七軒。

風體と面構で、其の指二本突出して、二兩を二百に値切つても、怒つて喧嘩はしないけれど、誰も取合ふものはなし。

いざ、と成れば、法もかく、手心は心得たが、さて指當つて、腹は空く、汗は流れる、咽喉は乾く、氷屋へ入る仕覺も無かつた。

すねた顏色、ふてた圖體、而して、身輕な旅人の笠捌きで、出女の中を伸歩行く、白徒の不敵らしさ。梁山泊の割符でも襟に縫込んで居さうだつたが、晩の旅籠にさしかゝつた飢と疲勞は、……六よ、怒るなよ……實際餘所目には、ひよろついて、途方に暮れたらしく可哀に見えた。

此の後を、道の小半町、嬉しさうに、をかしさうに、視め〳〵、片頰笑みをしながら跟いて歩行いたのは、糊のきいた白地の浴衣に、絞りの兵兒帶無雜作にぐるりと捲いた、耳許の靑澄んで見えるまで、頭髮の艶のいゝ、鼻筋の通つた、色の淺黑い、三十四五の、すつきりとした男で。

何處にも白粉の影は見えず、下宿屋の二階から放出した書生らしいが、京阪地にも東京にも人の知つた、巽辰吉と云ふ名題の俳優。

で、六が砂まぶれの脚絆をすじりもじつて、別莊の門を通つたのと、一足違ひに、彼は庭下駄で、小石を綺麗に敷詰めた、間々に、濃いと薄いと、すぐつて緋色なのが、やゝ曇つて咲く、松葉牡丹の花を拾つて、其の別莊の表の木戸を街道へぶらりと出た。

巽は時に、醉ざましの藥を買ひに出たのであつた。

客筋と云ふのではない、松坂の富豪池川とは、近い血筋ほどに別懇な親類交際。東に西に興行の都度、日取の都合が付きさへすれば、伊勢路に廻つて遊ぶのが習ひで、別けて夏は、三日なり二日なり此處に來ない事はないのであつた。

今度も、別莊の主人が一所で、新道の藝妓お美津、踊りの上手なかるたなど、取卷大勢と、他に土地の友だちが二三人で、昨日から夜晝なし。

向う側の官營煙草、兼ねたり藥屋へ、ずつと入つて巽が、

「御免よ。」

「はい、お出でなさいまし。」

唯、側對ひの淡路屋の軒前に、客待うけの圓髷に突掛つて、六でなしの六藏が、(おい、泊るぜえ)を遣らかす處。——考へても——上り端には萌黃と赤と上草履をずらりと揃へて、廊下の奥の大廣間には洋琴を備へつけた館と思へ——彼奴が風體。

傍見をしながら、

「寶丹はありますかい。」

「一寸、ござりまへんで。」

「無い。」

「左樣で、ござりません。仁丹が可うござりますやろ。」と夕間暮の藥簞笥に手を掛ける、とカチカチと鳴る環とともに、額の拔上つた首を振りつゝ大な眼鏡越にじろりと見る。

「寶丹が欲しいんだがね。」

「强い、お生憎樣で。」

「お邪魔を。」

「何うだ、姉え、此だけぢや。」

六は再指二本。

此の、笠ぐるみ振分けを捲り手の一方へ、褌も見える高端折、脚絆ばかりの切草鞋で、片腕を揮つたり、擧げたり、鼻の下を擦つたり、べかこと赤い目を剝いたり、勝手に軒をひやかして、ふら〳〵と街道を伸して行くのが、如何にも舞臺馴れた演種に見えて、巽はうか〳〵獨笑して其の後に續いたのである。

五

やがて一町出はづれて、小松原に、紫陽花の海の見える處であつた。

「君、君。」

何と思つたが、巽が其の六でなしを呼んだのである。

「えゝ、手前で、へい。」と云ふと、ぎつくり腰を折つて、膝の處へ一文字に、つん、と伏せた笠の上、額を着けさうにして一ツおじぎをした工合が、丁寧と言へば丁寧だが、何とも人を食つた形に見える。

辰吉は片頬笑して、

「突然で失禮ですがね、何處此處と云つてるよりか、私の許へ泊つちや何うです。」

「へい、貴方へ。」と、俯向けて居た地薄な角刈の頭を擡げて、はぐらかす氣か、汗ばんだか、手の甲で目を擦つて、ぎろりと巽の顏を見た。

「何うです、泊りませんか……ッたつてね、私も實は、餘所の別莊に食客と云ふわけだが、大腹な主人でね、戸締りもしない内なんだから、一晩、君一人ぐらゐ、私が引受けて何うにもしますよ。」

「へゝゝ、御串戲を。」と道の前後を眄して、苦笑ひをしつゝ、一寸頭を搔いたは、扨は、我が擧動を、と思つたらう。

「串戲なもんですか。」

其處が水菓子屋の店前で——巽は、別に他に見當らなかつたので、——居合す小僧に振向いて、最う一軒藥屋はないか、と聞いて、心得て出て、更めて言つた。

「眞個だよ、君。」

と笑ひながら、……もう向うむいて行きかける六藏を再呼んで、

「……今君が通つて來た、あの、旭館と淡路屋と云ふ大な旅館の間にある、別莊に居るんだからね。」

「何とも難有え思召で、へい。」

と、も一度笠を出して面を伏せて、

「いづれ又……」

「では然やうなら。」

「御機嫌よろしう。」

二見ケ浦を西、東。

思ひも掛けない親船に、六はゆすぶつた身體を鎭めて、足腰をしゃんと行く。
「兄さん、兄さん。」
「親方。」
と若い女が諸聲で、やゝ色染めた紅提灯、松原の茶店から、夕顔別當、白い顔、絞の浴衣が、
飜然と出て、六でなしを左右から。
「親方。」
「兄さん。」
「えゝ、俺が事か。兄さん、とけつかつたな。聞馴れねえ口を利きやあがる。幾干で泊める。恁
う、旅籠は幾干だ。」
「否、宿屋ぢやありません。まあ、お掛けなさいな。」
「よう一寸。」
「何にも持たねえ、茶代が無えぜ。」
「何んですよ、そんな事は。」
「はてな、聞馴れねえ口を利きやあがる。」
「其の代りね、今、親方、其處で口を利いたでせう。」

「一寸、あの方は何と云つて。矢張り普通の人間とおんなじ口の利き方をなさる事？　一寸さあ
……」
と衣紋を抜く。
六藏解めぬ面の眉を顰め、
「何だ、人間の口の利方だ？……ほい、ぢや、ありや此處等の稲荷樣か。」
「まあ！」
「何だい？」
「あら、名題の方ぢやありませんか、巽さんと云ふ俳優だわよ。」
「畜生め、此奴等、道理で騒ぐぜ。むゝ、素顔にやはじめてだ。」
と、遠くを行く辰吉のすらりとした、後姿に伸上る。
「可いわねえ。」と、可厭な目色。
「默つてろ。俺も恁う見えて江戸兒だ。巽の假聲がうめえんだ。……」
「あら、嬉しい。ひい！」と泣聲を放つたり。
「馳走をしねえ、聞かして遣ら。二見中の鮑と鯛を背負つて來や。熱燗々々。」と大手をふつた。
これぢや頓て、鼻唄も出さうである。